で、源家恩顧の武士多くして成らざるを見拔いた義時の彌縫策であるかもしれない。何故ならば政子はこの隱謀を知るや小山宗好、三浦義村に命じて直ちに實朝を時政の邸より義時の家に迎へしめたが兵は皆實朝に從つて附隨したと傳へられるからである。義政は更に侍所別當の和田義盛をおびき出して亡ぼし、政所別當と共に侍所別當を兼ねる身分となり、政治及軍事の全權を握つた。卽ちこれが執權である。卽ちこのやうに賴朝以來の宿臣老將をして次第に凋落せしめて獨り北條氏の基礎を鞏固ならしめたのである。虎視耽々として今は源氏が自滅するのを待てばいいのである。かくして彼は實朝暗殺に成功した。政子はかくの如く義時の傀儡となつてゐたのである。彼女は親子の人情を無視されて、その暗殺を座視したのである。だから何等批評の餘地はない。彼女のその夫賴朝在世中とその死後との間に於ける行爲の統一性を考へようとするのは根本から誤りなのである。今は彼女は女としての涙を持つてはゐたであらうが、義時の勢力の前に、或は自家の繁榮の前には、ひそかにその涙を拭つてゐるより他には無力な彼女だつたのだ。

義時は實に巧妙に政子を利用してゐる。承久の亂起るや政子諸將を簾下に招き、秋田城介景盛を以て告げしめ、

「皆心を一にして承はれ、是れ最後の詞である。故右大將軍賴朝が朝敵を征伐し關東を草創してより、官位といひ、俸祿といひ、その恩既に山より高く海より深い。報謝の心淺からんや。然るに今や逆臣の讒に依り非義の綸旨を下さる。名を惜しむの族は早々秀康胤義等を討取つて、三代將軍の遺跡を全うすべし。但し院中に參ぜんと欲する者は只今申し切るべし」

と云ひ渡した。實に機宜に適した名論で政子の女傑ぶりは遺憾なく發揮されてゐると見ることが出來る。幕府は源家絕え又朝廷に於ける幕府擁護者も死に絕えたので、この承久の頃には賴朝の頃とは異なつて朝幕位置を顚倒してゐる位であつたから、公家も亂を起さうといふ氣持にもなつたのである。鎌倉では一大事である。そこを政子は賴朝以來の恩顧を思ひ起さしめて諸將を統率したのである。群參の士悉く命に應ずと誌されてゐる。

云ふべき時にてきばきと云つてのけた鮮やかな手腕は並ではない。然し逆に考へると、院中に參ぜんと思ふ者は申し出ろなんていふのは誰もそむく者はないといふ情勢にあればこそ云へたものとも思はれる。特に既に滅亡してゐる源氏三代の恩顧を眞向ふにふりかざした所など老猾を極めてゐる。つまり後に控へた義時が北條氏に當面の責任をのがれしめん爲に、源氏の遺制の爲に諸將が奮起するやうな形式を取り、源氏利用の爲に政子を使つたとも見得るのであつ

て、少し穿ち過ぎた解釋ながら、北條氏の巧妙な戰術を思へば、あながちに油斷は出來ない。現に實朝死後親王を迎へて鎌倉の主たらしめんと策動したが、北條氏は陪臣の故を以て將軍になれぬなど考へたわけではなく、未だ殘つてゐる賴朝にゆかりある將卒を懷柔する手立てだつた。遂に藤原賴經下向して將軍となり、たゞ一寸源家に因緣があるに過ぎなかつたがその因緣を以て將軍として迎へたので、當時漸く二歲。かくして北條氏執權として政治の實權を獨占した。源家の正統絕えて止むを得ないと思はしめた所など正に曲者である。承久の亂の時の政子も正にその手で利用されてゐるのであらう。

亂後の跡始末を見るとこの間の消息は尙更瞭然たるものがあるやうに思はれる。北條勢は泰時以下十九萬の大軍を擁して京都を犯し、後鳥羽上皇を隱岐に、順德上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐（後に阿波に）遷し奉り、剩へ時の帝仲恭天皇は未だ御幼少にしてこの事件に何等御存知ある筈もなきに順德上皇の皇子といふ理由を以て、之を九條殿に幽閉し奉り、後堀河天皇を擁立し申し上げた上、勿論反鎌倉派の公卿は全部掃蕩してゐるが、事皇室に關して何といふ畏れ多いことをしたものであらうか。結果から見ればこの亂によつて武力が朝廷を壓して、名實共に鎌倉幕府の完成といふことになる。その點賴朝の素意の達成であるともいへるでもあら

うが、賴朝が果してこのやうな臣下としてあるまじき不遜を敢へてすることを心に期したであらうか。賴朝追討の院宣を義經が受けたと聞いた時彼は痛痕措く能はざる程、常に朝廷を尊び、朝敵といはれることを怖れたのである。それを今や賴朝も許すかの如き面貌を以て皇室に對して不屈き至極なことをしたのである。これは、云ふ迄もなく政子と北條氏の巧妙なる行爲だつたのである。

又この時軍兵京都に迫るの時、若し錦旗をなびかせて來らば道の邊に伏して恭順を誓へ。然らざるの時は一擧にして京都に履み入れとさとしたやうに增鏡にのつてゐるが、これなども出鱈目の甚しきものである。錦旗にさへかく迄忠順の心ある者が、何すれぞ亂後三上皇を遠く御遷し奉り、累を皇位に迄及ぼすが如き不忠をするであらうか。

兎にも角にもかく武力を以て京都を壓して幕府の基礎を固めることが出來たといふのは、他の何事でもなく北條氏の成功であつて、政子がこゝ迄賴朝の政治を徹底させたといふのではない。下剋上の風は實に北條氏に起因する。彼等は主家源氏を亡ぼし、その野望達成の爲には禁裡をさへ蹂躙して憚らなかつた。政子は可哀そゝにその手先であつたのだ。政子が朝廷に對してどんなことをしたかを知りたいならば、建保六年彼女六十三歲を以て熊野詣と稱して京都に

入つた時のことを見ればわかる。朝廷では政子を大事にして、迎へて從三位に叙し、次いで上皇は仙洞御所に召されたのであるが、政子は「邊鄙の老尼、龍顏に咫尺するも其の益なし、」と稱して參上しなかつた。政子は以て朝廷を脅威したのである。承久の亂の來らんとするのが既に目にうつてゐたのであらうが、隨分不屈者である。嘗ては賴朝と戀を語り、靜に同情した人情のある政子が、どうしてこのやうに變つてしまつたのであらうか。云ふ迄もない、北條義時の手先きとなつてしまつたからである。

右のやうに觀察を下してみると、鎌倉初期は正に義時の術策中のものであつたやうだ。政子亦確かに女丈夫ではあつたが、義時は更に、辣腕家で政子は畢竟その傀儡となり了つたと見られる。これが政子の本意より出たか不本意ながらであつたかによつて、彼女の功罪は決定する。

吾妻鏡は政子尼將軍に讃辭を呈して、この前後の矛盾ある政子を說明してゐない。然しそれはその筈である。もともと吾妻鏡は北條氏の側近の者が記した記錄であるから、その主なる役者、政子を賞讃しないで終ることは出來ない。これに依つて政子を政治家として認むるのは結局淺薄といふべく、又源氏を亡ぼした罪、或は亡ぶるのを座視した罪は、如何なる意味に於いてゞも、日本武士道よりは逃れることは出來ない。政子は貞操の觀念を唱導した。その功績は大きい。然し彼女の實踐した所は生家の奴隷に過ぎなかつた。然しこれは彼女の罪とのみはいへない。これが封建武家の子女一般の運命であつた。

阿佛尼

平安朝時代の物語文學が鎌倉時代に至つて軍記物となり、急にその光を低くめた觀があるが、十六夜日記の著者阿佛尼はその程度は低いながらも鎌倉期に於いて光を放てる作家である。特にその序文が、平安朝には見られなかつた簡勁な卒直な表現が、鎌倉期を通じて有數な名文として、彼女を不朽ならしめたのである。又又その一面には、その中に盛られた母としての情に奮ひ起つた所の鎌倉期女性の型を見せてゐる事が、彼女を一種の烈婦とする傾向のために、尙一層世の忘れられざる名を後世に傳へたのである。しかし阿佛尼の傳記は例によつて明らかではない。

殘された彼女の作品を見ると、勅撰集その他に入つてゐる歌は續古今集、續拾遺集以下通計四十四首、外に夫木集に五十一首、歌枕名寄に七首ある。夫木集の中には弘安二年宮崎宮百首、若宮百首、三島社百首、同三年稻荷社百首、新熊野百首など鎌倉に於ける作が入つて居り、安嘉門院四條百首と名付けたものも傳へられてゐる。

その作としては、十六夜日記、轉寢の記、夜の鶴、（一名阿佛尼口傳）消息體の歌論書、乳母の文（一名庭のをしへ）息女紀の內侍に與へた手紙が殘されて居り、その外名筆の譽高かりし爲めに、源氏物語、西行物語の筆寫が傳へられてゐる。

その外阿佛尼の傳記の記錄を二三拾つて見ると

扶桑拾葉集作者系圖に

從五位下佐渡守度繁女　號四條又稱右衞門佐、安嘉門院侍女、大納言藤原爲家室、中納言爲相母、後剃髮、法名阿佛、號北林禪尼云々

とあり、又源承の和歌口傳畫に

阿房安嘉門院越前とて侍りける。身をすてゝ後奈良の法華寺に住みけり。後に松尾の慶政上人のほとりに侍りけるを、源氏物語書かせんとて法華寺にて見馴れたる人のしるべにて、院の大納言典侍のもとに來れり。續後撰奏覽の後の事なり。年月を送りて定覺律師を生めり。誰が子やらんにて侍りしほどに、はるかにして爲相を生めり。

とあるから、これらの材料によつて阿佛尼の傳記を辿つて見るとする。

阿佛尼は佐渡守平度繁の娘である。しかし度繁は實父ではなかつたらしい。うたゝねの記に

よると、『後の親とかたのむべきことわりも淺からぬひと』に伴はれて遠江國に下つた事が記されてゐるからである。彼女の生年月日は勿論わからない。ともかく彼女は安嘉門院に仕へて四條又は右衞門佐と呼ばれたといふ。東見記下によると初め右衞門佐後には四條と呼ばれたと書いてある。右衞門佐は四條の異母妹ではないかと疑ひを持つ者もあるが、そうするとうたゝねの記が妹の作となつてくる。これは阿佛尼が若き日の作と考ふべきであるからこの疑は首肯されない。

安嘉門院とは、高倉天皇第二皇女邦子內親王のことである。承久三年御誕生、元仁元年（十六歳）安嘉門院と號され、文暦二年（二十七歳）にして尼となり、弘安六年九月四日（七十五歳）薨去せられた。阿佛尼はつまり若くしてこの宮に仕へ、初め右衞門佐後四條と呼ばれたのであるが、彼女はこの宮仕への間に、誰か名前はわからないが或る高貴な方と熱烈な戀愛をした。紀內侍はその時愛の花として生まれた娘である。しかしその戀は失はれた。その苦惱がやがて彼女をしてうたゝねの記を書かせたのであらう。うたゝねの記によると彼女はその戀に破れ、身を投げて死なうと思ひ、どこか御所めいたいかめしい邸から夜中ぬけ出しはしたが、道に迷つて果さず、掛の里女に救はれて西山のあたりの尼寺に入り、更に愛宕に移つて御佛の前

に行ひすましてゐたが、程なく歸り、義父度繁に連れられて遠江國に下つた。處が彼女を幼少の折から養育してくれた老人が京に病んで篤いと聞いて、濱松に居ること一月ばかりにして急ぎ京に歸つたことが書かれてゐる。又阿佛作と傳へられる庭の訓にも家出の記事があるから、相當深刻な戀愛事件があつたものと思はれる。かくして彼女はこの傷心の爲めに尼になつたのであらうと思はれる。

源承が口傳書によれば彼女は奈良の法華寺に入り、後松尾の慶政上人のもとに歸つて來たが、やがて龜山院の大納言典侍に召されて源氏物語五十四帖を書寫するやうになつた。

阿佛は才學秀れた女性であつたらしく、源氏物語を愛讀したことは他にも文獻がある。紀州徳川家には阿佛書寫と傳へる源氏五十四帖あり。安藤氏には土御門內大臣通親日記一卷がある。その他二三彼女の手蹟と稱するものが傳へられ、或は鎌倉滯在中には源氏を講じたなどの記錄も見え、當時その名の聞えた學問もあり、手も立派な婦人として認められてゐたのであらう。その爲めに龜山院の後宮に入つたのであらう。源承口傳によれば續後撰奏覽後のことであるとするから、恐らく建長三四年頃かと思はれる。そうして此處に於いて彼女は一に定覺を生むとある。うたゝねの記に見る情熱を持つ未だうら若い身である彼女が、今や再び後宮に歸つ

て來たのであるから、或は再び新しい戀愛が行はれるやうになつたことも無理からぬことであつたらうか。しかし可成爛熟したものであつたことはそれが誰の子であるか口傳を書いた源承にもわからない程だから、その模樣は想像に難くない。源承は阿佛が後に嫁した所の爲家の子であるとしてゐる。つまり阿佛尼にとつては義理の子である。その彼にして然りである。阿佛の素行の程も察せられる。定覺の父は不明であるが源顯定ではないかと云ふ學者もある（玉井氏）定覺を生み、その親は誰かなどといつてゐたが、その後『はるかにして爲相を生めり』と口傳に書かれてゐる。爲相は爲家との間に出來た子供であつて、建長三年より十二年を去た弘長三年爲家六十六歳に當る。かやうにして阿佛尼は爲家の妻となつたのである。爲家は俊成定家爲家とつゞく御子左家として名譽ある歌道の家統である。爲家ははじめ宇都宮彌三郎頼綱の女を娶つて爲氏爲教の二子がある、この時爲家は既に四十二歳になつてゐた。——が爲家自身は康元元年六十歳にして剃髪し、今は法體の身でありながら、しかもかゝる晩年の老境に於いて阿佛と關係が出來たことは實に奇異な感を抱かせる。爲家が精力家であつたことはその妻頼綱の女の以外の女に、爲顯、源承、慶融、隆俊、女大納言典侍の子女を產ましめてゐることによつても知られるが、阿佛との間にも爲相の生れた後二年にして爲守を生んでゐる。爲家は六

十八歳に當るわけである。阿佛は當時いくつ位か年齡不明である。

しかしこの二人の間柄は玉葉集、風雅集等で見ると、濃やかな情交の結果であるらしい。二人には年の程もわからぬ熱烈な戀の贈答歌が載つてゐる。では何時頃から交際が始まつたかと云ふに、彼女の歌が勅撰集に載つたのは爲家の續古今集が初めであるから正元元年頃からであらう。かゝる勅撰集に載ることは歌人の名譽だから阿佛尼と爲家とが接近する機會を作つたであらうが、それにしてもかゝる六十歳を越えた、しかも頭を丸めた老人との情事を思ふと、阿佛尼といふ人の體格が何處となくわかるやうな氣がする。

阿佛尼は以上四人の外になほ子供があるやうである。十六夜日記には子供の歌を記した所に、「五つ子供の歌」とある。その人たちは、侍從、太夫、山の律師、阿闍梨の君、女院に奉仕する女である。侍從は爲相、太夫は爲守、山の律師は定覺か、女院に奉仕する女は殘月抄に「紀內侍也」とあり、庭の訓に紀內侍どのへと書れたるこれ也。紀伊といふよび名の內侍なれば、かくは云へるにや、夜の鶴も、庭の訓より以前に、此內侍に書ておくられし書也、父は爲家卿にはあらずと云ふ。阿闍梨の君といふのは殘月抄に慶祐とするが誤りであらう。山の律師よりも年長者であるといふから阿佛の若い時の子でもあらうか。勿論爲家の子ではない。

以上によつて阿佛が如何に才色兼備で、多情多恨な女であつたかがわかる。就中爲家との關係の動機や年齢等を考へると、阿佛は到底尋常一般の女性ではないやうである。爲家は當時歌道の正統の家柄にあつた。阿佛はその室となることの虚榮を持つてゐたのでもあらうか。歌道に携はる者の名譽であることは確かである。この點を考へると阿佛も相當立ちまはつた所の野心家のやうにも思へる。或は老年の爲家を阿佛はその令色を以つて誘惑したのではないかと云ふ想像もされてくる。この想像は然し後の十六夜日記の作者としての阿佛尼の性格の解釋に一抹の影を投ずるのも止むを得ないであらう。

それ故彼女はその子爲相、爲守に和歌の正統を繼せたいと願ふのも、母として無理もないことであらうが、漸く衰へて病牀に横はる爲家に種々の心配を重ねしめたのは恐らく阿佛であつたであらう。年老いて生まれた末子の可愛さは勿論云ふ迄もないことであるが、和歌所の領邑として御子左家が俊成以來領有せし近江國坂田郡小野庄と播磨國三木郡細川庄の中、後者を一旦爲氏に授けありしに、後十四年經たる文永十年七月に取戻し、又文永十一年六月再度文券を發して爲相のものたらしめて、後に十六夜日記を書かせるやうな訴訟沙汰を起す原因を作つたのも、恐らくは彼女の腕のしたことであらうし、又爲家に代つて二子に口傳をしたり、歌學上

のこと迄心配した。

爲家は建治元年七十歳を以つて薨じた。時に爲相十三、爲守十一、かくして播磨國細川庄の訴訟が起つてくる時がきた。

爲氏は二度の文券を受けながらも依然として細川庄を領有して爲相に渡さうとしないので、阿佛尼は横領されたと訴へて出た。埒が開かない爲めに、自ら鎌倉幕府に直接訴訟して決濟して貰はうと、建治三年十月十六日都を立つて、行程十四日鎌倉月影ヶ谷に着いた。恰度その頃は蒙古襲來の爲めに幕府はそれ所でなく、中々訴訟も解決せず、四年に及び、弘安六年九月阿佛は係爭中鎌倉で死去し、英勝寺に之を葬つた、年七十五とあるが怪しいものである。

この時の道中に於ける歌日記の如きものが十六夜日記である。未だ生長せざるいたいけな子供の爲めに、自分はか弱い女の身を以つて、京より鎌倉まで心細い旅をつゞけながらも、腹の底には烈々たる意志を藏するあたり、烈婦傳中の一人と數へられて來た次第であるが、話をくだいて見れば、先妻の子供と後妻の子供との跡取り爭ひに後妻が飛び出したといふだけで、御家騷動の紋切型である。それがどうして阿佛に限り人の心を打つたのか。それは、十六夜日記のおかげだつたのだ。神佛に祈つたり、或は世を恨む哀情を吐露したりしたこの日記は、單な

る日記文學であるに止まらず、偉大なる母性愛の文學であるといふ感銘を與へたが故である。これが讀者の同情をひいたのである。

如何に紋切型のお家騒動とは云へ、確かに阿佛には子を思ふ母の情が溢れて、その眞情胸を打つものがある。然し人の子の親は何も阿佛に限つたことではない。何處のお家騒動でも我子が可愛ければこそ起るのである。それ故爲氏が如何に親の命に背く不孝者であるか、恰度十六夜日記に書かれてゐるやうな不孝者であるかを論證しない限り、阿佛の行爲は尋常茶飯事になつて正當化されることは出來ない。況んや賞讃に値する點は何處にもないのである。

爲家が爲氏から細川庄を取上げたのは事實であるが、その翌年文永十一年五月八日には爲家は爲氏を伴つて經仕卿を訪ねた續拾遺和歌集の撰者に推擧してゐる。更に撰者に決まつた時には爲家は七十八歳で病牀にあつたが、こゝに於いて家門は安泰だと喜び、尙爲相にとつても冥加一方ならずであると喜んでゐる事實がある。だから不孝者故に庄園を取り戻したといふのは他の理由によるものでなければならない。所が一つある。それは爲氏が歌學上の學說について爲家の感情を害したことがあり、その時阿佛は爲家を口說いて歌の文書を奪つたりしたことがある例を見ると、蓋し不孝者云々は主としてこの歌學の上の問題であるかもしれない。然し源

承も歌學に於ける地位の對抗から阿佛に對して惡口を云つてゐるが、その中で凡て、阿佛の讒言であるとけなしてゐることなど、一應の注意を惹くと思ふ。何處迄が阿佛尼の云ふことが本當かは、喧嘩の片口狀だけではわからないといふ事である。然し以上の說明によつても知られるやうに歌學上の意見の相異、及び從つて歌學の正統を嗣がうとする名譽慾が如何にこの訴訟事件に重大な要素をなしてゐるかを察することが出來る。それ故にこの事件は單に土地が横取りされたといふことの忿懣に止まらずして、その土地が和歌所の領邑として俊成以來の庄園であつた關係上、歌學の正系であることを示すには是非ともその庄園を必要とする事情だつたのではないかと思ふ。現在十三やそこ〳〵の子供が歌學に如何なる考へを持つかなどは凡そ話にはならない。それ故爲氏を異端であるとし阿佛は自分こそその流れを正統にうけた者であるといふことをどうしても示さないでは居られなかつたのであらう。これが恐らく事件の核であつたのだらう。源承口傳にも阿佛はよく云はれない所を見ると阿佛が爲家生前に如何に畫策して凄腕の繼母だつたかを窺はしめて、彼女が子供の爲になせることは尤もなことながら、事件を起す發端を彼女自ら作つた、卽ち一分の非は彼女にもあつたのではないかと想像もされるから、輕々しくは彼女の云ふ通りに聞くことは出來ない。しかしともかくも爲氏は父の死後その

命に從はず、そのまゝ庄園を領してゐたから、その點形式的には矢張り親不孝には違ひない。

そこで、彌々十六夜日記とはどんなものであるかを考察する段取りになつて來た。當時爲氏は五十歳前後であり、阿佛は恐らく四十歳前後、爲相爲守は十三、十一の少年である。そこで一應事件から離れて十六夜日記を文學として解剖して見る必要がある。蓋し、この日記が殘されてゐたればこそ、その作者としての阿佛が如何なる境遇に居たものか、如何なる性格の女であつたかを明らかにしたいと興味深く問題にされるのであつて、このやうな事件の釋明は畢竟十六夜日記の爲に齎らされたが故である。

十六夜日記は大體四段に解剖される。卽ちそれは序、紀行、鎌倉滯在中の消息、長歌、となる。然しこの四段は夫々性質を異にしその間統一あるものではない。それ故いつ書かれたものかゞ問題にされる次第であるが、思ふに鎌倉月影の谷にあつて、この訴訟を起すに至つた境遇などを思ひ、その思ひ惱みしものを、旅行の途中作つた歌などを配して完成したものであらう。十六夜日記には異本阿佛東下たりといふのがあつて、その卷末に大進匡聘の考證によると鎌倉北の方に奉つたのであるかもしれないと見える。或はかゝる事情があつたのかもしれないが、ともかくも誰かに見せる爲めに特に纒めたものであることは確かである。特に第二の紀行

の部を見ると、粟田口より鎌倉まで、單調に、歌と詞書の連續の感がある。單に個條書的で描寫的でないことは、當代の紀行文海道記或は東關紀行に比較して見るとよくわかる。歌學上歌枕として有名な所が主として詠まれ、旅情を嘆ずるものは實に寥々たるものがある。だから阿佛は恐らくは自分の旅情を吐露したのではなく、却つて名所歌のよき見本を作らんとしたのではないかと疑はしめる。特に注意すべきは叙述の部分が極めて短く、特色もなく、單に歌への詞に迄歪められてゐることである。それ故この點から推すと、阿佛は勿論自己の創作慾から作つたものには相違なからうが、京都に殘つてゐる我が子へ、名所歌の模範を示さうとしたのではないかと思はれる。特に爲守から歌を三首送つて來てこれに點をつけて下さいと云ふのに對して、

今年は十六ぞかし。歌のくちなれば、やさしくおぼゆるも、かへすがへす心の闇と、かたはらいたくなん。これも旅の歌には、こなたを思ひて、詠みたりけりと見ゆ。下りしほどの日記を、この人々の許へつかはしたりしを、よまれたりけるなめり。

とあるによつて察知せられる。つまり阿佛は鎌倉に着いて、月影の谷に宿り、

めぐりあふ末をぞたのむゆくりなく空にうかれしいさよひの月

とある迄を先づ書いて京へ送つたのであらう。その時、歌のお手本に序文をつけて、彼女の心ばへのある所を示したのであらうと思はれる。否、或は序文は全體が出來上つてから附け加へたのであるかも知れない。ともかく序文は勇健な筆致で、ひたむきな表現を持ち、その迫力は紀行の歌の所とは格段の相違がある。彼女が鎌倉へやつて來た意氣をその文脈の底から讀み取ることが出來る。前右兵衞督の御女云々から最後迄は思ふに鎌倉で更に書き加へたものと思はれる。この都の人々との消息の部分は文章も暢達して、一種の抒情味がある。然しながらそれには、訴訟に關した何等の記述もなく、更に京に居る子供への關心も語られてゐない。只一例あるに過ぎない。それ故、これも紀行歌と同じく、或は贈答歌のお手本として書かれたものであるかも知れない。否そのやうに見た方がこの序文の文章の迫力に對して無難な解釋かもしれない。更に最後の長歌の如きは恐らく後人が阿佛のものとして卷末に附したものが誤つて本文の中につゞけられたのであるべく、何等必然的な關係はない。

以上のやうに文脈の解剖によつて大膽な憶測が許されるならば、次のやうな結論が引き出されて來やう。十六夜日記は「名所歌や贈答歌の見本を作る好都合な境遇を巧みに利用し、よき歌學書を作らうとする意味に動かされたに違ひない。十六夜日記がかゝる形式を取るに至つた

根柢には當時の傳說に對する高い價値評價と、その價値が高ければ高い丈、それを自己の方へ奪ひ取らうとする意慾とが動いてゐた事が考へられる、阿佛尼の場合は、その意慾が、歌學の權威を奪ひ來つて自己の子供に與へようとする形に於いてあらはれた」(風卷氏)といふのも一應の論でなければならない。そうしてこの結論によつて序文は後に加へられたものであることを思はしめ、且つ阿佛尼の性格へ考察の目を向けしむるものがあると思ふ。

こゝに於いて、問題をもとにして當初の訴訟事件に關聯せしむるならば、細川庄を取られることは勿論重大な事であつたであらうが、それに附隨すると考へられる歌學上の地位が寧ろ彼女の情熱を驅つて訴訟事件に迄進展せしめたのであらうと思はれる。そうしてこの事は尙歌學家といふ一種の家系が傳統付けられんとする世態をよく反映して、それあるが故に、彼女をして鎌倉迄も下らしめ執拗に訴訟を追はしめたと思はれる。財產爭ひではなくてその實名譽の附托爭ひであつた。阿佛尼が虛榮に憧憬れて邁進する姿も見られ、愈々以て彼女の性格が普通の優しい女性でなかつたことを知らしめる。それ故十六夜日記の序に見える母としての愛に迷つてといふ母性愛は勿論認められる所であるが、單にそれのみによつて彼女を我國烈婦傳中の一人とすることは少し褒め過ぎではないかと思はれる。

然し次のことは云へる。平安朝迄の文學女性及び一般の女性は只々優にやさしき女性であつた。素直な大きな力に從順する典雅な女性であつたのに、彼女は野心に燃ゆる所ありと結論されても、畢竟は子に對する母の愛情に充ち溢れ、烈々たる意志を以つて邁進した所、即ち甲斐甲斐しく積極的である所、自ら平安女性とは性格の異なる女性の面貌であることを知る。丸い女性に對して彼女は角のある女性だつたと云へる。彼女の文章がきびきびとしてゐる點が平安朝女流文學に對して一種の特色であるやうに、その性格も何處かきびきびとして一種の「瓣」がある所、つまり戰鬪的な點、矢張り平安朝に對して變つた女が出現したといふことは充分に云へるのである。この點勿論阿佛は特筆すべき女性であつて、鎌倉期女性の一面を發揮したものであると云へる。

以上によつて私は阿佛尼を或はこれ迄の傳說的定說に對して幾分價値を下げるやうな論述をしたやうになつたが、結局は彼女が如何に性格的に平安朝に對して異質的であつたかを讀者に納得せしめることが出來たなら、そしてその點に於いて彼女が特筆さるべき價値があることが徹底し得たならば、私は滿足するのである。

阿佛尼は鎌倉に止まること四年、弘安六年九月、訴訟も治らざる中に死んで英勝寺に葬られ

たとなつてゐるが、阿佛東下りによると阿佛は京に歸つたと云つてゐる。十六夜日記には、都の歌ども、この後多くつもりたり、又かきつぐべし」となつて終つてゐて、その後どうなつたかは知らない。そこで阿佛は鎌倉で死んだと考へられ、新編鎌倉志には阿佛卵塔の跡は英勝寺の境内の北の方にあると誌されてゐる。所が類從名物考二には東寺の北安井塚の上に阿佛の墓があり、之を安井塚と云ふと書いてあり。又阿佛東下りの奥に大進匡聘は、「領地安堵敎書が弘安二年七月廿日に出て居り、阿佛尼は弘安三年四月八日に歿し、墓は西八條大通寺と鎌倉英勝寺にある。流布十六夜日記には歸京の事書殘したるは鎌倉にて認て置かれしが、此日記は侍女が追々書繼し故に慥に歸京の事迄も書きのこせり。然らば大通寺の墓誠なるべし。鎌倉は後世の拵物か」と云つてゐる。かくの如く異說紛々として彼女の死んだ時と處とは今以つて不明である。

然し、この阿佛東下りは一考を要する。一體十六夜日記は種々の名によつて傳へられてゐるのである。即ち、

阿佛東くだり、阿佛吾妻くだり、いさよひの日記、いさよひの記、路次之記、阿佛房紀行、道の記、阿佛道行、不知夜記、

などであり、この中路次之記、道の記が最も古く、十六夜日記は後人が日記中の記事によつて命名したものであるらしい。然しこのうち阿佛東下りは阿佛自身のものではないらしく、流布本十六夜日記とは内容を異にしてゐる。例へば富士山麓で阿佛が病氣して輿に送られて鎌倉に入つたとあるが、日記には全然ない。

而して日記中の伊豆箱根丸子酒匂等の記事は東下りには見えない。その上鎌倉に於ける行動については無關係である。且つ大體が小說的構想のもとに纒められてゐて、日記に必須事項である時と處との制約がない等の點からして、恐らくは十六夜日記をもとにして書かれた小說であらう。多分大平記の成立してから後、多くのお伽草紙の類が生まれる頃であらう。お伽草紙の和泉式部、唐糸草紙、小町草紙、紫式部の卷など、相前後して現れたものと思ふと池田氏は云つてゐる。

この他に、阿佛の作として世に傳はるものはこの稿の初めに書いたやうに、乳母の文（一名庭の訓）がある。その女紀內侍に與へたものとして阿佛作とされてゐる。又夜の鶴（一名阿佛口傳、阿佛房和歌口傳）とて佐々木氏日本歌學史には爲家の說を祖述せるものとされて居り、一般の通說であるが、その文のぎごちなさから男の筆ではないかと疑はれ、恐らくは室町時代

の後人の附托ではないかと云ふ者もある。

要するに、この二者は尙不明に屬する。

そこで私は最後に彼女の歌の作風について一言してこの愚稿を終へる。

彼女の歌風は傳統化されて行く過程時代を表はしてゐて、大體に於いて天眞に詠出したものは甚だ少ないことを遺憾とする。

人しれずねこそなかるれ空蟬の身をなきものと思ひなせども

は未だ初期のもので、幾分いい例であるが、傳統時代の弊害が著しく、徒らに技巧を弄し、或る歌詞を重視したりして、更に面白味が薄い。

今參局

室町時代は世に暗黑時代といはれて、全社會の統制は徹底的に破壞された時代であつた。その最も極端な事件は應仁の亂で、足利家及びその豪族間の勢力爭ひが遂に十數年の長きに亙つての戰亂となり、京洛の地は概ね兵火に見舞はれ、世の珍奇財寶の滅するもの數を知らず、紛亂は遂に拾收する所なくして、下剋上の風習をいよいよ盛ならしめ、世は滔々として群雄割據の强い者勝ちの戰國の世の中となつて行つた。

室町時代も、足利義滿の頃には未だ何とか世の中に幾分の統制はあつた。彼は明と屈辱的外交を結んで日本國王源臣義滿などと大それた名辭を以つて明朝から錢貨を仰いでゐるのは甚だ怪しからぬ次第ではあるが、未だその頃の社會はどうにかよかつたのであるが、八代義政の頃になると秕政百出して遂に應仁の大亂をし出來して了つた。義政は東山に銀閣を營み、美術の事に關しては非常なる勳功者ではあつたが、政治向きの方面はから駄目だつた。黑板博士著國史の研究下卷に

——義政の初政には兎にも角にも尙幕府の政令が行はれてゐた。その後彼は寧ろ放縱に陷り秕政百出した。そして時勢は應仁文明の大亂へと進んで行つた。今秕政の一般についてその主要なるものを列擧すれば、第一に德政令の濫發、第二に寬正大飢饉に對する放漫、第三に寵嬖女謁の弊、第四に義政の驕奢等である」と述べ、更に

——第三の義政の嬖寵政治ともいふべきものがまたその秕政の一をなし、いよいよ社會の狀勢を惡化せしめた。尊氏が建武式目の中に權貴並に女性禪律僧の口入を禁じた一條を設けたにかかはらず早くも空文に歸した」……とて相國寺蔭涼軒季瓊を擧げ、次いで、「それが女性にもあつたのはまた義政の時代程甚しいことがないといつてよい。その一人は側室大館氏であつた。彼女は今參局といひ義政の寵愛を受けて屢々政務に容喙し、殆しど幕府の政權を握つたかのやうに見えた。もし諸人がその望みを達せんには今參局に賴る外なく、一時執權の如しとさへいはれる程であつたが餘りに勢力を負ひ、義政の夫人日野富子を排斥して自ら夫人たらんとし、富子を咒詛したことが露はれて隱岐に流され、間もなく自殺した。しかし夫人富子も一筋縄の婦人ではなかつた。貨殖の道に長じ、賄賂によつて大なる富をなし、その勢力寧ろ義政の上に出でたといはれてゐる。これは義政をして多少ヤケ氣味の人たらしめた所以でもあつた。

文義政が弟僧義尋を養子とし還俗せしめて名を義視と改め、嗣子とした後、富子が己の腹に生れた義尚を立てんとしたことは應仁文明の大亂を起す一因であつた。」と說かれてゐる。

由來政治に婦人が顏を出すやうな時は常に暗い陰を作つて碌なことはない。尤も中には立派に政治家らしくし拔いた春日局の如きものもないではないが、矢張り國の政治そのものからいふと暗い感じが伴つてゐて、健全な社會だつたとはいへないやうだ。この義政は大體が政治家向きではなく、藝術家肌の男であつたが、この時女連が跋扈したのは更に事情を惡くした。今參局や夫人日野富子などは婦人が政治に流した害毒の最たるもので、恐らくは日本歷史を通じて最もよくなかつた婦人の中に數へられるべきであるかもしれない。義政の政治は二期に大別され、前期は應仁の亂勃發數年前迄の花やかな政治的生活と、後の全然政治を放任した東山時代とに二分して考へられるが、その前者には生母裏松重子、上臈今參局、後期には夫人富子が活躍してゐる。かゝる背後にあるべき人を表面にのさばらしめたのは、時勢にもよるが、一には義政がいけなかつたとすべきであらう。

今參局など前述の如く頗る惡評をうけてゐるが、何れにしても女傑であつたことに相違はなからう。依つてこゝにその人物を仔細に見ることとする。

今參局が幕府で如何に勢力があり惡評をも受けてゐたかは、臥雲日件錄、康正元年正月六日の條に好例がある。それによると竺雲等連が來た。お茶の後天下の政治の事に談及ぶや、竺雲の云ふには、世に三魔の說がある。俗に云ふ落書といふものだが三人形が路頭に立つてる畫を畫いてある。思ふに政治が三魔より出づといふのである。御今、有馬、烏丸であるといつた。予曰ふ、烏丸はしたを缺いた體である、妙と謂ふ可しとある。卽ち今參局は女だてらに三魔の一人に數へられてゐるのである。又大乘院記錄殘篇、長祿三年正月十七日條に、室町有祇候女房號號金葉此五六ヶ年天下萬事併在此身上令謳歌候間振權勢傍若無人也とある。一寸讀めないがこれは、大乘院經覺大僧正自筆の日記經覺要抄より出て誤寫の結果で、室町殿祇候女房號御今參此五六ヶ年天下萬事併在此身上之由令謳歌候間振權勢傍若無人也といふので、長祿三年より五六年前から幕政を左右して傍若無人の振舞があつたことがわかる。

尙碧山日錄、長祿三年正月十八日條に、「以レ事問二春公一々々語レ余曰、大相公之嬖妾某氏、曾司二室家之柄一、其氣勢滔々不レ可レ近焉。其所レ爲殆如二大臣之執事一者、貪戾而惱レ民、又多所二柘忌一。意爲二陰事一、而殃二其室家之夫人一。其事遂發、相公大怒、命二大夫持淸一、俾竄二貶之海外之隱島一也。曰、彼若司二家室之權一、有二累年積歲一者、其禍可レ及二天下一也。而今有二此貶一天之所レ罰也。

予曰、古史曰婦人預(カル)外事(ニ)非國(ノ)福(ニ)云々、相公斥(ク)此、蒼生所(ノ)欲(スル)、而天下安全之端也、可(キ)以喜(ブ)矣。」とある。威權は執事の如く、貪戾にして民を惱ましてゐて、ひどく嫌はれてゐたが、終に陰事をなして足利將軍家の夫人に禍をかけたのが發覺した。義政大いに怒つて持清をして、位を奪つて海の隱岐島に流した。彼にして若し長年權力を持たしめたならばその禍は天下に及ぶべし。今この事あるは天の罰する所であるといふのである。そこで筆者が答へて云ふには、古史にも婦人が家の外の事にかゝはるのは國の禍とはならぬといふが其の通りで、只今義政が此を斥けたのは人民の望む所であり、天下安全の端であり、喜ぶ可きであるとあつて、今參局は散々にやられてゐる。彼女は非常な勢力はあつたが嫌はれたことも一通りではなかつたらしい。

一體今參といふのは新參者といふ意味で、特別の名前ではない。彼女の名前はわからないのである。御今上郎とも書かれ、義政との關係も、只祇候の女房、或は嬖妾とも書かれて身分も判然としない。內裏今參局といふ同名異人もあり、又御いまゝゐり、大館殿と傳へるが、義政の妾の中には大館持房の女佐子(サンコ)もあるし、又他に大館氏もゐるから、中々以て判明し難い、爲めに史家には長い間疑問を以て見られた女性であつたが、はからずも圖書寮本の檢査によつ

て、その素性を明らかにすることを得たといつて三浦博士が史林第十一卷にその論を發表した。依つてその所論をきくことにする。

相國寺の周麟が文龜三年に書いた故總州太守源公持房景龍院殿高門常譽禪門行狀といふのがあつた。卽ち大館持房傳である。開周は大館氏で持房の子である。この行狀記は大館氏の出自や父祖の勳業を詳叙した後に、持房の祖父掃部助氏信に及び

氏信長子曰滿信、次男爲(ハ)大島所(ト)養(ス)以繼其後、三男曰滿冬、々々有息女、所謂今參局也

とあつて、氏信—滿冬—今參局と系統を明らかにし、更に局と義政との關係には、彼女は義政の乳母であつた。襁褓のうちより仕へたとある。大體義敎のあとは義勝（榮山）八歲でついだが、嘉吉三年十歲で薨じ、弟義政（喜山）九歲で將軍職をついだ。大館持房は老家臣として見侍した。このやうな事情故、義政は育てゝくれた彼女に甚だ恩義を感じ、そこで今度嗣立に當つては自然と勢力を持つに至つたものと見える。政內より出で權大夫人に過ぐといふので、義政の生母裏松重子よりも勢力があつたのである。それ故公卿大臣賄賂を競つて局へ遣はすとある。これによつて彼女は義政の嬖妾だの、夫人とならうとはかつた等の說は皆誤りであることがわかる。が、ともかく、この生母裏松氏とは勢力爭ひをするやうになつたことは首肯出來る

依つてその一例をこゝに挿入して置かう。（これはその行狀記にあるわけではない。）斯波千代德の尾張國守護代職田敏廣の更迭問題に關する義政の內政干涉から、今參局と裏松重子との衝突した事件である。康富記、經覺要抄によると、寶德三年義政は今參局の請ふがまゝに、織田敏廣の守護代を退けて先年義教の忌諱に觸れて失脚した織田某をその後任にせんとした。斯波氏もその老臣もこの命を拒んだ。時に重子も亦斯波の自由に委すべき由を申入れたが義政きかない。そればかりかその老臣を上意不應の罪に處せんとし、管領は彼に切腹を命じやうとした。重子は天下の重事に及ばんことを歎くのあまり九月潛かに營中を脫して嵯峨に赴いて、表面は五大尊堂に參籠して腹病を癒さん爲めといつたが、その實は、近日將軍の政治は何事も今參局と大御乳人との兩人で取り行ひ、たまさか自分が口出しても採用されないのを不平に思つたのである。そこで幕府は驚いて管領等相集つて、重子の條件を納れることにした。その一は、今參局の洛中居住を禁ずること、第二は尾張國守護代を競望する織田某を千代德に引き渡すことといふのである、義政は悉く之を納れて爾後織田の事に關しては一切干涉せぬことに同意した。今參局はこれが爲め營外に逐はれた。然しその後の記事に局は、かゝる公事を申沙汰することを斟酌すべき旨の怠狀を申して無事に收まつたらしい。重子はかくして嵯峨から幕府

に戻つてゐるが、まるで駄々をこねてゐるやうなものだが、幕府を擧げての騷ぎなのである。以てこの女共の勢力の大なるかを察することが出來る。この際は今參局の方が凹んだやうである。つまり裏松重子が躍氣となつて勢力の伸長をはかり、今參局を貶さんとしてゐるわけであらう。然し、この事件後八年を過ぎた長祿三年正月十日、義政夫人日野富子が生んだ若君の死因に就いて今參局の咒詛する所であるといふ問題が起り、局の調伏の結果だとせられて處刑された。その事情は、經覺要抄長祿三年正月十七日の條に、「而今度御臺日野富子御產事ニ彼仁今參局稱ニ調伏一。若公腹中被ニ死去一。驗者共皆以失ニ面目一云々。於ニ御今參局一者、待所ニ被レ仰付一、被ニ遠流一候畢。以外次第也。去十四日江州隱岐島被レ流之由有其聞云々」と書かれてゐる。つまりこゝで局と重子との間に正面衝突が起つて、今後は義政も重子に加つたので、局は全く失脚したのである。これは義政將軍になりてより十六年目卽ち二十五歲に當るが、夫人は初產であつた。しかも男子出產であるに、生まれて間もなく死んだ。或は死產とも傳へられ、切角の喜びもなくて、義政に取つて只大いなる落膽ばかりが殘つた。この時夫人の側から、これは誰か咒詛した者があつた爲めの不幸であると云ひ出され、その噂が高まつた。今參局の仕業だといふのである。

このあたりから、さきの行狀記の文章によつて書いてゆくならば、巫女が往來して木人を埋めて祭つたといふ噂だからとて、それを掘り出さしめたり、或は道中の祠で祈つたといふので、祠には門に釘を打たせたりするといふ有樣で騷然とした。卽ち叡山の密法を習得せる僧侶を召して、未婚の少女を索めて秘かに神うつりをさせると、少女は呪を見て失心し、譫語めいた語を語つた。或人が蠱をなした。或人が詛を爲した。應に妄言を知るべしといつたので、扨てこそ元兇は今參局だといふことになつた。義政は惑つたが、未だ年も若かつたので、すつかり少女の言を信じた。かくて局は巫蠱に連坐して幕府から逐はれ、大館持房に命じて閉門させた。持房は心外の心持で、どうしてかゝることがあり得ようか、願くばその虛實を察せられよと云つたが、義政は諾かなかつた。幕府の中の女達はこれ迄の今參局の寵を嫉妬するものが多かつたので、彼女等は、持房が申開きをすることを恐れて、更に義政を怒らしめ、別に佐々木正觀に命じて局を隱岐に流さしめた。この隱岐は日本海の隱岐島ではなくて琵琶湖の沖の島である。何故ならば途を江の甲良庄に取るとある。江とは近江のことで甲良庄は唐崎のことであらう。時に局の寵をねたむ者は、追究の手をゆるめず、何處迄も速かに殺さなくてはと思つて義政に請うたので、義政はこゝで今參局に死を賜つたのである。配流の途上に死を賜ふなどと

いふことを見ても、その反感は極度に深かつたものと見える。乃ち正月十九日甲良の佛寺で之を殺した。その時局は、我婦人と雖も、自殺の出來ないわけはない。おめおめと殺されて我一門を辱かしめやうやといつて右手に刀を執つて腹を刺き、左手で之を掠つた。それでも尙死なず、言語も正しかつたが、刻を移して息絕えたといふ。側にあつた武夫は皆涙を流して女人中の大丈夫なりと嘆歎したといふ。

何と物凄い死に方をしたものではないか。これを見ても彼女は活氣熾んな女性で、成程政治を料理する程の女傑であつたことが首肯される。彼女が呪詛したかどうかは別として、この男兒出產の事件が發端となつて彼女は府中に於ける勢力を失墜したことが知られる。義政の落膽を種に、夫人側としてはともかくも乘ずべき機會であつたに違ひない。これだけの資料では何れが狐か狸か判ずべき樣もないが、木人を地に埋めたり、道祖神を祭つたりすると人に呪ひをかけることが出來るといつた土俗的信仰が行はれてゐたことを知り、當時のこの程度の信仰狀態で、しかもこのやうな反證すべき方法の全然ない所に向つて、引つかけられた方は負けに決まつてゐる。

然らばこの張本人は誰か。この行狀記には明記してないが、これは思ふに憚かりある人だつ

たが爲めであるに違ひない。尋尊大僧正自筆寺務方諸廻請の長祿三年二月八日の條に、御臺所の病氣が今以て本復しない。そこで更に今參局一味の者を皆府中より逐出したといふ記事がある。これによるとその張本人が裏松重子であることを推測し得る。而して更にこの事件は決して今參局一人の問題ではなくて、その一黨に迄禍が及んでゐる所を見ると、府中既に女軍は黨を組んで勢力爭をしてゐたものと見える。そうなれば何れか烏の雌雄を知らんやである。寺務方諸廻請に今度の事實否を知らずといひ、此間故を知らずと書いてあるが、思ふにこれが世人の觀察する所であらうか。

ともかく、この事件は疾風迅雷的に處理されてゐる。十日に出產があつて、十三日（經覺要抄では十四日）に配流と決まり、十八日（蔭凉軒日錄による）或は行狀記によれば十九日には處刑されてゐる。その間旬日を出ないのである。このやうな早急さも、裏面に何かを疑はしめるであらう。そこで局の罪も事實無根であるかもしれないといふことになる上に、やがて局に對する同情が湧いてきた。初七日の佛事は等持寺や相國寺で營まれ、又甲良では連年大旱が續いて寃罪のことが現はれたと噂された。尙ほその間には府中で又異變が起つた。次の年卽ち寛正元年六月十九日に三條氏の息女が義政の胤を孕んで產室にあつた所、夢に今參局が出て、そ

の腰に抱きついたのを見たが、覺めて後どうも體の中が安からず、遂に出產を待たで死亡した。產醫刀を以てその腹を割いてその子を取り出したが、子も亦死んでしまつたとある。（碧山日錄、大乘院寺社雜事記、持房行狀記）聞く者之を畏ると書かれてゐる。その上に更に府中に、ぼんやりと局の姿が往來するのを見たといはれ、つまり今度は幽靈が出るといふ騷ぎなのだ。そこで何とか怨靈を鎭めねばとあつて、朝封を乞ふて天王となし、御靈廟祭に附した。今に至るも人之を悲しむとある。卽ち年と共に寃罪が知られたらしい。死刑後四年を過ぎて寛正四年六月には、近江國壽千寺領及越中國三宮跡を義政は局の追善料として寄進してゐる。（蔭凉軒日錄）

法號を攝取院壽峯祥仁と云ふ。

以上今參局について語つた。隨分迷信深い附加物があるが、時代が時代だけに仕方がない。世に天王樣といふ神社があつて、現在でもそれを信心すれば天の災難をよけて子供が育つといふ信仰がある。

築山殿

築山殿は徳川家康の第一の夫人で、今川義元の女とされるが實は養女である。家康は岡崎の松平廣忠の長男で幼名を竹千代といひ、八歳の時より今川義元に人質となつて駿府に留められてゐた。弘治二年十五歳、その正月十五日義元の加冠のもとに元服、義元の一字を貰つて二郎三郎元信と名乘つた。この時關口刑部少輔親永が理髪の役を勤めた。關口氏は今川氏と姻戚の間柄だつたので、この日親永の女を義元の養女として元信と結婚させた。これが築山殿である。

云ふ迄もなくこれは政略結婚であつた。當時の今川、松平、織田とこの三豪の勢力を見ると松平は兩豪の間に挾つて殆んど立つ瀬なき狀態であつた。駿河の今川氏は遠江を併せ領して三河に及び、頗る强豪だつたので松平氏は今川氏に賴つてゐた。松平廣忠は天文十八年卽ち竹千代が人質となつて駿府に來た年の春旣に卒してゐて、當時の松平家は當主が人質となり、岡崎には今川の城番が居るといふ有樣で、屬國にも等しかつた。然し又今川氏の庇護なくんば忽ち

にして織田氏に犯されてしまふであらう。こういふ情勢に於いて築山殿と結婚してゐるのである。

當時の徳川氏の勢力を說明する好き例がある。竹千代は人質だつたから三河に歸へるわけにはいかなかつた。元服したのを機會に展墓を口實に辛うじて許されたが、その翌年春には直ちに駿府に戻つてゐる。彼は祖父の清康を慕つて名を藏人元康と改め、その翌年永祿元年には三河に歸つて寺部の城に鈴木重敎を攻めてゐる。時に十七歳、これが彼の初陣で今や正に一人前にならうとしてゐたわけである。そこで三河なる老臣共は、駿河の義元に乞ふに、元康も旣に元服を濟まし歸國したのであるから、駿府より差し置かれた岡崎の城代等を引き取つて舊領を返して頂きたい、と申入れた所、義元が云ふには、明年は尾張へ出軍と考へてゐる時であるから、その時三河へ赴き、境目を檢査して舊領を引き渡すから、それ迄は先づあづかり置かう、とてんで話がつかない。老臣共もせんすべなく憂憤しつゝ月日を送るとある。これを以て兩者の關係をよく知ることが出來る。元康はその城岡崎も尙義元の配下の者の手中にあつて、駿府に住まねばならなかつたのである。

このやうな事情に於いて築山殿との間に夫婦關係はつゞけられた。この間幸にも仲睦じかつ

たらしく、築山殿は永祿二年三月駿府で男子生産、これは後に岡崎三郎信康と呼ばれた人で築山殿と運命を共にした。その翌年又一女龜姫を生んだ。この時期が築山殿にとつて最も多幸なときであつた。就中彼女は家康に對して優位を以つて望むことが出來たでもあらう。然し運命は逆睹し難い。永祿三年桶狹間に義元信長に討たるゝや、事情は急轉したのである。

信長の折しもの豪雨を衝いての騎馬隊の夜襲か奇功を奏して義元敢なく討死するや、哀れ今川勢は一擧にして覆滅した。これによつて一時に、武名を擧げたのは勿論信長であるが、元康も亦大いに得る所があつた。元康は義元に從つて出陣して大高城を守つてゐたが、義元の討死を聞いて大樹寺迄引き上げた。岡崎の城は、守つてゐた今川氏の城番共が周章狼狽して逃れ去つたので、そのあとを彼はそのまゝ入城することが出來た。かくして彼は人質として城を出てより十七年振りで歸城することが出來、こゝに思ひがけざる舊地盤を占據するやうになつたのである。一方今川氏はこの一戰で全く頓挫し、その子氏眞あとを嗣いだが愚將で家臣從はず、最早昔日の勢力はなかつた。そこで、三河の元康は突如として自己の勢力を恃むことが出來る事情になつた。之に加へて、信長は戰勝に乘じて西上の志を抱き、後顧の憂を斷たんとして元康と和議せんと水野信元等によつて謀つてきた。今や信長は旭の勢で松平家の敵ではない。今

川氏は落日の衰運にある。元康も轉身せざるを得ない。こゝ於て、元康は永祿四年信長と和し、五年には同盟を誓つてゐる。そこでこれ迄の敵味方處を異にするに至つたばかりでなく、今川松平の勢力關係迄一轉する有樣であつた。元康は西郡の鵜殿藤太郎長照を生捕り、石川伯耆守數正の謀を以て、當時駿府にあつた長子信康と取りかへ、かくしてこの年元康は家康と改名して名實共に氏眞と斷つた。氏眞大いに怒つて兵を起したが却つて三河一圓を家康の爲に占領されるといふ有樣で、このやうに今川氏と正面衝突となつたので德川家は織田氏と益々親密なるを必要とし、こゝにこの兩家の間に政略結婚が結ばれた。德川實紀によると、永祿六年信長の女德姫を信康に納れる約束をし、更は十年五月には入輿結婚すと誌されてゐる。信康九歲に當るから少し年が若すぎるから、思ふに只の入輿に過ぎなかつたのかもしれない。兩家の親密が重ねられてゆく間、今川氏の衰運は益々酷しく、これを虎視耿々と見てゐたのが甲斐の武田信玄である。父信虎と謀つて今川氏に喰ひ入り、更に家康とは大井川を以て駿遠分割を提議して、急に南下して今川氏を破つた。これが永祿十一年十二月で、かくして今川氏は亡びたのである。尤も氏眞は朝日奈泰能の遠州懸川の城に入つたが家康に攻め落された。家康は今川氏との舊來の親懃を思つて、氏眞をその姻戚の間柄なる小田原の北條家に落さしめ、信玄一時

甲斐に歸つた隙に駿河を彼のために復さしめんと謀つたが、再び信玄南下し、遂に元龜元年駿河はすつかり武田領となつた。氏眞は北條氏康の子氏政の代となるや、再び追はれて居るに所なく、濱松城なる家康の食客となつて世を終つたといふ。以上は大分後の話にはなるが、今川氏は實に憐れむべき沒落をなしたのである。

このやうな今川氏の衰運が、政略結婚であつた築山殿の身分にどんなに關係するか云ふまでもない。その上に今川氏を亡ぼした武田勢は餘勢をかつて西德川織田にあたつてきた。德川家にしては以前の今川家とは比較すべからざる危險に曝されたわけである。織田信長は家康と和議し後顧を斷つて、永祿十一年京に上つたが、將軍義昭との間に隙あり、義昭は遠く武田等とも謀を通じて織田に當らんとしたので、今や武田勢は織田に殺到せんとする勢を示して、先づ道の順路として家康を蹴散して西上せんとした。當時家康は元龜元年正月濱松城に入り、岡崎には信康をして守らしめてゐた。家康は武田の强勢を抑へるには信長と力を合はせねばその家運を全うすることが出來ない。こゝで兩家の親密は更に加はつた。當時信康は十二歳、元服して信長の一字を貰つて信康と名乘つた。玉輿記によるとその翌年德姫と結婚したとあるが、この點德川實紀とは記載年月を異にするが、ともかくこの武田勢の凄い力に對する防禦として、

信長との關係を親密にする爲のものと思はれるから、この時結婚の式でも擧げたのではないかと思ふ。三年十二月果然武田勢は天龍川を渡つた。家康は織田の援軍と共に手兵を具して三方原に對陣したが、武田の大軍には抗する由もなく、慘敗を喫して、命からがら身を以つて逃れ歸つた。德川實紀その他德川家の歷史書には、德川勢敗れたりと雖も尙薄氣味の惡いやうな底力を示してゐたので、武田勢も手を出し兼ねて三河に入つたと傳へるが、そんな實力は無かつたやうだ。この時信玄にその氣で揉まれたら一揉みで德川家は亡びたかもしれなかつたが、信玄は濱松城などに目もくれず、たゞ一息に三河に進んだのである。思ふに彼の心の中では、德川氏は一敗地に塗れて又立つの力なきを知り、織田を倒せば自然と自己の屬國となると高を括つてゐたのであらう。事實德川家はその位に見くびられる程度の慘敗を蒙つたのであつた。その實力を見くびられた爲め、却つて德川は幸運にも家を全うすることが出來たのである。

武田信玄は三州野田の城を攻略したが、時に創を得て又遂に立たず、壯途半ばにして甲斐に引き返した。右のやうな事情故今や德川氏は織田氏が唯一の賴みの綱となつた。いつ何時武田氏にやられるか知れないのである。恐るべき脅威である。武田勝賴は亡父の遺志をついで囂々として大軍を擁して再び三河に侵出した。時に天正三年五月、織田德川聯合軍は長篠に迎へ戰

つた。この時織田の新戰術鐵砲勢のために、武田は父以來の諸豪傑大半を失ひ、大敗して甲斐に逃げ歸つたので、德川家は幸にしてその危機を免かれることが出來た。然し勝頼はこれで終息して了つたのではなかつた。その後も駿河から遠州に入つて家康と對陣したり、築山殿が武田勝頼内應の廉を以つて殺された天正七年に家康は江尻に於て勝頼と對陣してゐる。だからこの間德川氏は武田氏に對する爲に、西織田氏とは親密を結ばねばならぬ仕儀にあつたのである。

以上を要約すると、德川氏はじめ今川氏に依つて纔かに全うし、後織田氏と結んで、三河遠江と領有して東海の一强族となつたが今川氏が、武田氏に亡されし後は武田氏との對抗上累卵の危に臨み、何處迄も織田氏に依らねばならぬものとなつてゐた。信康德姫との政略結婚によつて兩家の親密を謀るに及んで、こゝに築山殿の地位が結婚後數年にして、どのやうな變轉を見たかは吹々を要しない所である。それ故悲劇の素地は既に置かれてゐたとも云へよう。そこで右の事情を考へ合はせつゝ、築山殿の悲劇の顚末を眺めねばならぬ。野史、玉輿記、さては江戸大奥の秘密等に云ひ傳へられる築山殿は頗る評判が惡い。性質姦惡にして嫉妬深く、恐ろしく婦德缺乏の人である。はじめ家康に寵せられてゐた間はよかつたが、追々と家康の寵の薄

らぐに及んで、精力あまつてヒステリーを起したと傳ふ。築山殿の侍女のお萬が天正二年二月、家康の次男を生んだ。於義丸といつて後の越前中納言秀康である。この時は家康も築山殿の惡質を知つて憚かる所があり、夜半秘かにお萬をして家康のもとに通はしめたといふ。然し姙娠したことが遂に築山殿の目にとまつた。玉輿記によると、彼女は嫉妬のあまりお萬を全裸にして冬の夜庭木に縛りつけて放置した。お留守居番の本多作左衞門が夜中見廻ると、怪しき女の聲がするので近づいて樣子を知り、繩を解いて自分の羽織を着せ、秘かに伴ひ歸つた上、濱松城外富士見村にかくしたと傳へてゐる。

これがほんとだとすると築山殿も相當ヒステリー症狀である。お萬は事實他所へ預けて於義丸を生んでゐるが、この母子は家康との對面が出來なかつたので信康は二人の心中に同情して盡力し漸く父子の對面が出來たと傳へられてゐる。

築山殿のヒステリーは遂に我子信康と德姫との間をさへ悶えながら眺めるといふ程にまで進んだといふ。これは少し話がひど過ぎるが德姫とは不和であつたことは事實である。德姫は信長の女だから親の仇の子と思つて心よくなかつたことは察せられる。德姫は女ばかり二人を生んだので築山殿は信康に凡そ大將たる者は早く男子を產むがいい、便々として一人の女に附着

してゐるがよくないと側妾を置く事を勸めた。信康が多くの美女を愛するやうになつたのもこれから間もない事であると云ふ。この時岡崎の城下に一人の美女が現れた。甲斐武田の家臣某の妾腹の出、本妻に讒せられ三河にさすらふといふ。年十六、築山殿は早速これを信康に仕へしめた。信康喜んで鍾愛したので、德姫の怨みを買つた。こゝに德姫の侍女に小侍從といふ者同情して信康の樣子を德姫に告げたので、信康はその告げ口を怒つて德姫の目の前で小侍從を刺し、兩手で口を上下に割いたといふ、信康は父にも勝る猛將だつたが頗が亂暴で亂行は日々に募り、臣下の切諫もきかず、切られた者十數人に及ぶと云ひ、信康は鬼神の如く恐れられた。

築山殿も亂行が募つて醫者の減敬なる者と通じた。この減敬は武田の廻し者で、築山殿に取り入つて德川織田の滅亡を企んでゐた者であつたといふ。築山殿は減敬にそゝのかされて勝頼に書を送つて、德川織田を討ち取る手段もあるから、德川の舊領を信康に賜はり、又自分は誰か武田の臣下のもので然るべき人の妻となし給ふならば武田の味方とならうと申入れた。すると勝頼からは、信康が勝頼に味方するならば德川の舊領は勿論、信長の所領のうち何れなりとも一ケ國を新恩として進上する。築山殿には郡内の小山田兵衛が去年妻を失つてゐるからそれ

に迎へしめんと返事が來た。このことが藤川久兵衛なる者の女で築山殿に事へてゐたお琴といふのが見付け、德姫に仕へてゐたその妹に告げたので終に露顯し、減敬は風を喰つて逃亡した。德姫は驚いて事の始終を信長に急使を以て知らした。築山殿が惡人であること、信康が武田の家人の女を妾にしたこと、又築山殿と減敬とが密通したこと、信康の亂暴のこと、そして勝頼との文中に、信康は未だ武田と一味したわけではないが何ともして勸めて味方にすべしとの事だから油斷したら末には敵とならうと細々と書き送つた。

信長は大いに驚いて、直ちに濱松の家康に、築山殿を誅すること、信康に死を賜ふことゝ二ケ條を强要してきた。家康も事の重大を考へて酒井忠次をして承諾の旨を傳へしめ、天正七年八月三日信康を岡崎より大濱に移し、自らは濱松を發して七日には岡崎城に入り、九日信康を更に遠州堀江城に移し、十日には天龍川の岸二俣城に移し、大久保七郎左右衛門忠世に預けた。築山殿は野中三五郎重政に命じて八月廿九日小籔村に殺した。更に九月十五日天方山城守、服部半藏正成の兩人使となつて二俣城に赴いた。信康は謀反して勝頼に一味するなど思ひも及ばぬ事であると繰り返し遺言し半藏に介錯を頼んで自刄し、山城が首を打つた。信康時に二十一歳。墓は二俣の清瀧寺にある。

大體右のやうな傳へになつてゐて、築山殿は、性質よろしからず嫉妬深くして、婦德おさまらなかつたといふことは或はほんとうかもしれない。現にそのために天正五年離緣されて伊勢に移されたが信康秘かに岡崎に呼び迎へ置いたといはれてゐる。寵遠ざかるに及んで肉體的悶えに荒んで行くなど小說的に見れば頗る興味ある題材であるが、そのために夫を怨み家を亡すが如き考へを持つに至つては惡婦の標本ともいふべきである。然しながらその結果右のやうな悲劇を醸したといふ口吻の云ひ傳へは果してどうであらうか。何故かとならば減敬なるものによつて勝賴と內應したといふその內容は如何に愚なる女なりと雖も餘りにも馬鹿々々しいではないか。到底眞面目の話とは受けとれない。却つて餘りにも揑造的な印象さへ起し、信ずべき筋合のものではない。その上に德姬が信長に傳へた所は、信長に注意を與へて警告する目的のものであるにしても、それに附け加へて洗ひざらひを書き立て、自分の夫である信康の惡口迄書くに至つては一體德姬は自分を何と心得てゐたかと疑ひたくなる。それ故何か爲にする所のものがあるやうに思はれる。私はこれは武田をだしに使つた信長の策謀ではないかと思ふ。

信長は政略結婚の大家で、遠く勝賴ともまた淺井長政ともこの結婚をしてゐる。淺井氏の如き、信長は妹お市の方を婚がせてゐながら六年目には淺井氏を亡ぼしてゐる。更に好き例は、

信長自身美濃の齋藤道三の女濃姬と結婚してゐて、その自分の妻を利用してゐることである。彼は夜な夜な不審の擧動を示して妻を訝からしめて扨て妻に打明けて云ふには、もともと齋藤家と織田家とは深い怨恨がある。それで實は此頃齋藤家の家老と心を合はせ、彼等が道三を打つて火を揚ぐるを合圖として、我軍攻め込むといふ約束をしたとまことしやかに告げた。濃姬は大いに驚きて秘かに父の道三に知らしたので誠忠無比なる兩家老はこの爲に慘ましい最期を遂げるに至つた。かくて齋藤氏は自ら勢力をそいでその後間もなく土岐氏に亡ぼされた。信長苦肉の策に濃姬はうつかり乘つたのだ。信長とはこのやうな男である。信長は自分の野心のためには妹も女も眼中になく、あらゆる策謀に利用して顧慮する所がなかつた。だからこの德姬信康の場合も亦その例に漏れないものではなからうか。先づ我々はこの點を怪しんでかゝらねばならない。信康はまるで暴君のやうに傳へられてゐるが、家康を凌ぐ猛將であつて天正元年十五歲での初陣以來長篠合戰にも大井川の對陣にも中々豪膽な所を見せて敵も味方も舌を捲かしめてゐる。信長は早くより目をつけてゐたが、將來正に恐るべき名將と思つたのであらう。今や今川亡び武田また昔日の悌はない。この際德川氏は父子二代の名將を出して勢を駿河に迄張るに及んでは信長にとつて侮り難き强豪となるに違ひない。信長は危險を感じて德川氏の勢

力を殺ぐことを策謀したのではないか。ともかくも信康を殺さねばならぬと思つたのであらう。その理不盡の事柄に理由を作る爲にこの築山殿をマークしたのではないか。幸にして德姫とは不和である。こゝを利用したのではないか減敬なる唐人醫者も武田のまはし者ではなくて織田の通偵であつたかもしれない、例の勝賴との間の文通なぞと稱するものも減敬と信長とのからくりかもしれない。德川實紀卷三信康自害の所に、「是皆織田右府の仰によるところとぞ聞えし」とあつて信長がいつかな聞かないので信康無實の罪を主張しながらも自害をしなければならなかつたのではないか。こゝには尙次のやうな話を載せてゐる。信康の守役平岩七之助親吉は、信康罪蒙りたりと聞いて濱松にはせ參じて、家康に申入れるにこれみな讒者のする所であり、よしや信康によからぬ行狀があるにもせよ、それは自分が年頃輔導の道を失へる罪であるから、先づ自分の首を刎て織田氏に見せたなら或は信長の怒も解くであらうかと忠誠を示した。家康はこれを聞いて云ふのに、信康が武田氏に語らはれて謀反すといふが自分は眞實とは思つてはゐない。然しながら我今亂世にあたつて强敵の中にはさまれ、たのむ所はたゞ織田殿の助を待つばかり、今日彼の援を失はんには我家亡んこと明日を出でない。されば我父子の恩愛のすてがたさに累代の家國を亡ぼしては、子を愛することを知つて祖先のことをおもはぬ

に似る我かく思ひ取らないなら何うして罪なき子を失つて吾つれなき命長らへようと思ふぞ、又汝の首を刎て信康が助かるのであるならば汝の言葉に從ふであらうが、信康は遂にのがるべき事ないのであるから、汝の首まで切つて我恥を重ねんも無念な話である。こゝの程をよくよく思ひ取るがいい。しかし汝の忠義の程は忘れないぞと涙に咽んだので親吉も重ねて出す言葉もなく、泣く泣く御前をさがつたといふ。「是等の事をおもひあはするに當時の情體ははかりしるべきなり」と評してゐる。恐らくはこれが眞實だつたであらう。信康も家康も知つてゐたがどうにもならなかつたのであらう。前述の織田德川の勢力關係を思ひ合はすれば無理なく首肯される所であらう。尙次のやうな挿話も附加されてゐる。信康を大久保忠世に預けたのも家康にしては深き考へがあつたのであるが、忠世は心得ずして殺してしまつた。その後幸若が滿仲の子美女丸を討てと命ぜし時其の家人仲光我子を伐てこれに替らしめし有樣の舞を見て、家康は忠世によくこの舞を見よと云つたといふ。忠世大いに恐懼したといふ說がある。ほんとうかどうかわからないが書きそへてゐる。

右のやうにして見ると、この信康、築山殿の悲劇は正しく信長の策謀のために止むに止まれぬ仕儀となつたものと思ふ。信長の目あては信康にあつて、築山殿などはその口實を提供せし

める道具でしかなかつたのである。徳川織田兩家を謀らうなどといふ大それた女性ではなかつた。まんまと信長のわなにひつかゝつた點、築山殿は淺はかな女性であることには相異ない。これとても時勢の波に翻弄されたのであつて、婦德修らざりしといふ惡評は滿更虛言ではなかつたかもしれないが、周圍の事情から美點を云はず、缺點のみを數へ立てねばならぬやうになつてゐたのが、やがて彼女の全部を形付くる結果となつたのではないかと思ふ。同じく德川實紀の築山夫人自害の箇所に、野中三五郎重政が命をうけて止むなく討ちとつて濱松にかへつて言上したら、家康は「女の事なればはからひ方もあるべきを、心をさなくも討ち取りしか」と惜しんだといふ。重政大におそれ是より蟄居したと野中家傳に見ゆと誌されてゐる。これを見ると家康は尙築山殿を惜しんだ點が見えて、彼女の陰謀は信長の謀計であつたこと彌々明白になるやうに思はれる。彼女は淺はかだつたので陷穽に落ちたのであらうが、或はその事も尙無實の罪であつたかもしれない。畢竟は彼女が今川氏にゆかりがある女性であつたことに萬事の籤運がかかつてゐたとすべきであらう。

今にして顧るならば、後には天下を取つた家康の妻となつたのであるから、彼女ほど果報者は無かつた筈であるが、この今川家にゆかりある者なるが故に得た果報も、亦そのゆかりの故

に皮肉な運命になつたのである。尤もこの悲運は戰國時代の女性一般の持つ所のものであつた。當時の諸國は內に武を蓄へ外はあらゆる外交を謀らねばならぬ。世は亂れ國は保ち難かつた。互に聯合しては共同の敵に當り、或は遠交近攻、その術策の拙ない國は隣國に蠶食されてしまふ。だからこの世相に於いては、當時の女性は多かれ少かれ、戰國的政略の犧牲となつて翻弄された。或者はそのために浮び、或者はそのために却けられた。この時代の女人の運命程頼るに頼られぬ果敢なきものはなかつた。後の淀君などもこの例に漏れない。築山殿もその波に翻弄された、籤運の惡い女性であるとすべきであらう。

彼女の墓は濱松市廣澤町の西來院といふ禪寺にある。月窟といふ扁額をかけた半ば朽ちた靈屋の中に肌靑い自然石の墓となつてゐる。

清池院殿潭月秋天大禪定法尼淑靈

と刻まれその左右に天正七年卯八月晦日といれてある。月は築山の音に通はせたものであらうか。築山殿が殺された小籔村といふのは、濱松郊外佐鳴湖畔の小村で、今もその地に築山御前の打たれたといふ御前谷や、その血を洗つたといふ首洗ひの池などといふ名稱が殘つてゐる。その名前の土地が果し、その地であつたかどうかは不詳であるが、ともかく此處で築山殿は濱

松城より逃れてきたが、追手に捕へられて失はれたと口碑に傳へられてゐる。

尙、最後に築山殿を打つた者は村越茂助直吉、或は岡本平右衞門、石川太郎右衞門の兩人であると誌した書物があるが、それは誤りらしい。この西來院に燈籠が供養されてゐる。それに享保八癸卯年八月二十九日野中三五郎重政曾孫友重男野中三五郎源重司敬白、又他の一基には、文政七年甲申八月廿九日、水戸野中三五郎源重司と刻まれてゐる所を見ると、野中三五郎の子孫のものが築山殿の靈魂を弔はんとて寄進したのであつて、これは野中家に傳へられてる家傳の歷史を物語るのであるから、德川實紀等に傳ふる如く、築山殿を殺したのは野中三五郎重政であるとすることが出來よう。

淀君

一門海に浮んで壇の浦に藻屑と化した平家の最期は正しく落日の空の如き華やかな最後であつたが、豐臣氏が大阪城に滅亡した花々しさもそれに劣らぬ世の語り草である。この悲劇は秀吉が不世出の英雄であつただけに盡きぬ哀傷を投げかけてゐる。世の有爲轉變は窮まる所を知らない。今日ありて明日なきことが人の身の上であるが、百姓の小伜から身を起し、一度立つては天下を提げて朝鮮征伐迄した痛快な英雄兒も、一朝勢力が逆轉すれば二代と保ち難き衰滅を喫せねばならなかつた。戰國の末より德川の初期へかけて歷史を繙く人で、天下雲の如く起つた諸英雄と又跡方もなく消え去つたその無常を知つて、恐らく肅然として一種の感慨に耽らないものは稀であらう。信長は正しく天下を取らんとしたが一代で倒れた。秀吉よく天下を取つたが二代とつゞかなかつた。家康よく天下を治めて成功したかの如く思はれるが、德川氏とて十五代しか續かなかつた。矢張り倒されてしまつた。その盛時期の長短はあつても同じやうに哀れな末路を遂げしめられた。これがこの世の運命であり、この世の姿なのだ。昨日が昨日

ではなく、明日が明日ではない。

元和元年五月八日大阪城は陷つて、秀頼及び母淀君は自盡して果てた。人間秀吉が我子の上にかけてゐた夢もこれであと方もなく消え失せてしまつた。それがそれでよかつたかどうかは別である。人間がこの世に於ける念願といふものゝ實際の有樣を見るやうには思はれないだらうか。さもあらばあれ、大阪城の焰と共に燒け盡して後を殘さぬ豐臣氏の最期は、悲慘といへば悲慘だが、何處となく日本人らしい諦めがあつて、さつぱりとしてゐる。玉碎してゐる。これが尙一層豐臣氏に哀傷を投げかけしめてゐると思はれる。

淀君はこの大阪城滅亡の立役者として人の記憶に長く止まつた女性である。淀君はこれといつて取立てゝいふ程の女傑でも何でもなかつた。或は寧ろ虛榮で一杯になつた思慮足らざる凡俗の女性であつたやうであるが、秀吉の妾、秀頼の母として、大阪城の煙と共に化した爲にはからずも人に知られる人となつた。歷史に名が殘ることを以つて運のいいといふならば彼女も亦最も運のいい人であつたといふべきであらう。然しながら淀君はその運命の激變はさることながら、美婦にして淫亂、奸臣を近づけて遂に大阪城を亡ぼすといはれてきて、あまり名譽ある評判を取つてゐない。明良洪範、鹽尻、翁草等には、「秀頼は秀吉の實子でなく大野修理の

子かと疑ひけるが、その實は當時卜筮の爲に寵せられし法師あり、之と密通して棄君秀頼を產む。大野は秀吉の死後淫せり。淀殿は容貌美にして邪智婬亂なりし。名古屋山三が美男なりしにも思をかけて不義の事ありける。凡そ大阪城滅亡の起りは淀殿にあり、秀吉無學にして家法なく、室家婬亂なるをさとり給はざりし。宜なるかな二世を保事能はずして跡なく亡び給へし、嗚呼」と書かれてゐる玉露證話、武家閑談にも秀頼の出生が秀吉名護屋出陣中なることを疑つて名古屋山三の胤と稱してゐる。然し淀君は果してそんな女性であつたらうか。名古屋山三との間柄の傳說に就いては出雲阿國の項に於いて蒙を啓いてあるからそこを參照して頂きたい。淀君は秀吉に從つて名護屋にあり、陣中で懷姙して戻つたのであるから別に不思議はない。ともかく秀吉殊に淀君の惡口は、家康の老獪なる策謀と、江戸時代の史家が如何に曲筆を弄してゐるかを一應察して見なければならない所であらう。家康も漸く年老んとしてゐるし、秀頼は成長せんとしてゐる。關ヶ原の役では豐臣方は本妻の杉原方と、この淀君方とに二分した爲に、淀君方諸將亡び、德川氏に幸して天下を取る勢をなさしめ、大阪の衰弱を來さしめたとは云へ、家康にして見れば何とか早く埒をあけねば死ぬにも死ねないといふ焦慮であつた。豐臣氏恩顧の諸將をなるべく大阪城より離反させる爲に、淀君の婬亂ぶりを吹聽し、秀頼を名

もなき坊主とのいたづら事の結果だと彼がいひふらしたと見られないであらうか。徳川氏は大阪を亡ぼす爲には隨分無理難題をふつかけて戰爭を起してゐるではないか。事實このやうな裏面があればこそ、淀君評論にも二種出てくるのであらう。それ故こゝで淀君辯護のために一筆を取るのも敢て無駄とばかりはいへまいと思ふ。

淀君は近江國淺井郡小谷城主淺井備前守長政の長女で、ちやちやといつた。母は織田備後守信秀の女で、信長には妹に當るお市の方である。お市の方は永祿六年八月、當時十七歳を以て淺井氏に輿入れをした。勿論一種の政略結婚であつて、これで織田淺井兩者は和を調へ、織田氏は遂に京都に上つて足利義昭を征夷大將軍とした。然し勿論信長は彼の下風に立つを欲しないから、義昭と不和を來たし、義昭は秘かに越前の淺倉、近江の淺井、甲斐の武田と應じて信長を謀らんとした、こゝで信長は長政と敵となり、遂に淺井氏は信長のために天正元年九月小谷城を攻落され、長政は自殺した。其時長政は、お市の方は信長の妹だから不憫なこともしまいと、ちやちやを頭に三人の息女と共に家臣藤懸三河守に守らしめて信長の陣所へ送らしめた。このちやちやの妹は中を初、末を江といつて、後に、京極高次室常高院、及び德川秀忠室崇源院となつた人であるが、かくして三人の姉妹は信長の弟上野介信包の手によつて養育せら

れ尾張國淸洲城に居た。小谷城攻略の大將だつた羽柴秀吉は、淺井氏の故領を賜はり、小谷二十二萬石の領主となり、天正二年には長濱に城を築いた。織田家は美人系でお市の方は日本一の美人といふ名を取つてゐた。秀吉はそれ故密かにお市の方を望んでゐたと傳へるものもある。適々天正十年六月本能寺の變が起り信長が殺された。信長の諸將狼狽してゐる中を備中高松にて毛利の軍と對陣してゐた秀吉は、機敏にもひそかに和を結び、急據引き返してその十四日光秀と山崎に弔合戰をした。光秀敗死するや秀吉の威名忽ちに高くなり、そこで織田家の宿將淸洲に集つて信長の後嗣を定めその遺領を處分した。この時秀吉は信長の嫡男信忠の子三法師丸を擁し柴田勝家は三男信孝を立てゝ爭つてゐる。その時更に秀吉は勝家とお市の方をも爭つたといはれてゐる。この時信長の三男信孝の媒介によつてお市の方は柴田勝家に再嫁した。ちやちや等母に從つて勝家の居城越前國北庄に移つた。秀吉勝家が爭つたといふことの眞僞の程はわからぬが、翌年兩者が賤ケ嶽で相戰ふに至つた事情の中に、このお市の方への横戀慕を數へる人もあるからこゝに書き添へて置くのである。然し當時の勝家はその領地こそ越前の八郡に過ぎなかつたが、越中の佐々成政、金澤の佐久間玄蕃、越前府中の前田利家、能登七尾の菅谷九右衛門、美濃越前の一部を領する金森五郎八等その威令のもとにあつて、その勢力範圍

は廣く北陸四州に跨がつて、矢張り信長舊幕下では第一の大名で兵力は強大であつた。又草履取りの身分ともとからの重臣とはその身分の上からも輕重が異るから、よし秀吉は爭つたにしても矢張りお市の方は柴田へ行つたらうと思ふ。それに急に勢を增して重鎭となつた秀吉に對しては矢張り諸將の嫉妬もあつた筈である。云つて見れば勝家、秀吉の兩雄の間には並び立たざる情勢にあつたといへる。織田氏後嗣にもとづいて、遂に兩者の危機は爆發した。天正十一年四年十九日より廿一日、賤ケ嶽の合戰となつたのである。

この戰は佐久間玄蕃盛政が勝に乘じて退くことを知らなかつたのと、前田利家が秀吉に內應して傍觀的態度をとつた爲に勝家は大敗した。盛政と柴田勝政は生擒にされ、勝家は敗殘の兵三千を收めて越前に走つたが途に兵卒皆散じて北庄についた時には從ふ者僅かに百有餘人を餘すのみと傳へる。悲慘なものである。北庄は恰度運惡く普請中であつた。それに兵力が少ないので外郭を撤して內郭により天主を死守することに軍議一決し、四月廿四日寄せ來る秀吉の大軍を見下しながら天主閣に上り悲痛な訣別をした。ちやちやはじめ三女を中村文荷齋に托して秀吉の陣所に送らしめ自らは火を放つて自刄した。お市の方も自分の運命の重なる悲運に屑よく勝家に殉じた。その時お市の方の辭世は

さらぬだに打ぬる程も夏の世の夢路をさそふほとゝぎすかな

勝家も辭世を殘した。

夏の夜の夢路はかなき跡の名をくもゐにあげよ山ほとゝぎす

文荷齋も之に和して

思ふどち打つれつゝも行く道のしるべや死出の山ほとゝぎす

このやうに淀君の母お市の方は運命に弄されて悲慘な生涯を終つたのである。秀吉はこの三人の姫にとつては、父を母を悲慘にも死なしめた當の仇である。それだのに何の運命かこの三人の姫は秀吉のもとで養はれることゝなつたばかりか、天正十六年頃には既にちやちやは秀吉の愛撫に應ふる側室となつてゐる。戰國の女性は氣の毒である。然しちやちやの場合は相手が天下の英雄兒の秀吉だけに華やかさの方が目につくのである。ともかく淀君にとつては、當然今にも殺されるかといふやうな危險な運命をはかなんだのが、今や一轉して最も華美な運命にのつた女性とならうとしてゐるのである。

彼女は十七年三月より山城の淀城に住し、秀吉よりは淀の女房又は淀の者と呼ばれて寵愛された。ちやちやが世間から淀殿と呼ばれるのは淀に住んでゐたからで、淀君といふ呼び方は遙

か後世のことである。十七年五月淀君は秀吉との間に棄丸を産み後鶴松と稱した。淀君の年齢はわからないが、當時末妹の達姫が十七歳になつてゐるから彼女は尠くとも廿歳位にはなつてゐる筈である。秀吉は子供が無かつた。この時秀吉は已に五十四歳となつてゐたので後嗣が出來たことを非常によろこび、秀吉の鍾愛は一に鶴松に集まるに從つて、淀君の側室としての地位も次第に他の側室を凌ぎ、天正十八年の小田原陣にはわざわざ手紙で呼び寄せられてゐる。秀吉はこの時四月十三日付で北政所宛に淀君を小田原へ下すやうに手紙を出したのに九月になつても淀君は着かない。そこで秀吉は待ちかねて淀君へ手紙を出した。その手紙と入れちがひに月の廿五日に彼女は來てゐるのであるが、その手紙には秀吉の人柄も見られ、且つ鶴松を如何に父親らしい心づかひを以て愛してゐるかゞ知られて興味があるから左に錄する。

その後文にて申候はで、御心許なく思ひ候若君大きくなり候や、そこほどの火用心、又はした〳〵まで亂れなきやうに堅く申つけられ候はん事せんにも候廿日頃にかならず參り候て若君抱きその夜さにそもじをも傍に寢させ申候可候せつかく御まち候可候、かしく

おちや〳〵參る　　てんか

かへすがへす若君冷し候はぬやうに申つけ候可候何かにつけ油斷あるまじく候

鶴松への愛にかこつけて淀君へそつと云ひ寄るところなど誠に面白い所で、淀君が深く愛されてゐたことはこれでもよくわかる。淀君は當時大阪に移つてゐたやうである。

このやうに慈まれた鶴松は可哀そうに十九年八月三歳を以て夭折した。秀吉のなげきは深く、この悲歎を忘れんとして文祿元年朝鮮の役を起したやうに云ふ者もある程であるが、秀吉如何に老耄したとてこんな事であのやうな大事業を起す程のそんなうつけ者ではない。足利義滿以來明よりうけた屈辱的外交に對する反抗であつて征明のことは秀吉は前々より口にする所であつた。かくして征明の軍を起すや秀吉は肥前名護屋に出張して親しく全軍に傳令してゐたがこの時も矢張り淀君は隨伴して陣中にあつた。こゝで彼女は懷姙して大阪に歸へり、文祿二年八月捨丸を産んだ。秀吉その報を受けるや喜び譽へん方もなく、軍務は前田利家に托して急ぎ大阪迄歸つて來てゐる。淀君は廿四五歳か秀吉五十八歳である。三年秋に伏見の築城成るや淀君は十二月捨丸と共に伏見城に移り同城西の丸に住んだ。捨丸は慶長元年十二月元服して秀頼と稱した。かくして淀君は秀吉よりはお袋樣などゝ呼ばれ、秀吉の正室杉原氏禰々を初めとして他の側室にも子がなかつた關係上、權勢は杉原氏を凌ぐばかりであつた。然しこの杉原氏

は非常に圓滿な人だつたので淀君との間に變ないさかひはなかつたやうであるが、臣下は自ら二派に分かるゝ傾向があつた。慶長三年八月秀吉の歿後、四年十月秀吉の遺志によつて淀君は秀頼を擁して大阪城に移つた。

秀吉の朝鮮攻略は全然失敗に終つたが、最も豐臣氏にとつて打擊だつたのは、豐臣恩顧の大名が朝鮮でその將士を傷き失つて大いに武力を損じたことである。それ故これ迄は秀吉の敵ではなかつた家康の軍勢が、內地に居て出征しなかつた爲に、武力比較上有力なる軍勢となつたことである。これは豐臣家の前途について大いに憂ふる所であらねばならない。そこで淀君は石田三成等と謀つて畫策する所あつたが、秀吉の遺臣は淀君と杉原氏とに二分し　遂に慶長五年九月關ヶ原の合戰には三成以下淀君方は殆んど亡んでしまつて、こゝに豐臣氏に代つて德川氏の勢力は日々隆盛を加へるに至つた。家康は征夷大將軍となり今や豐臣氏に昔日の悌なく、寧ろ大阪地方の一大名化した感があり、元和元年城亡ぶ迄の十數年は、かくしてぢりぢりと德川氏に亡された歷史といつていい。

當時の德川豐臣兩家の位置顚倒の例としては、慶長十年秀忠は十萬の大軍を率ひて上洛し、內大臣となり、更に父の職をついで征夷大將軍となつた。この時家康は秀頼に、秀忠が大將拜

賀の儀あるによつて秀頼も對面のため御上洛あつて然るべしと申送つてゐる。まるで家來扱ひである。これは秀頼淀君をはじめ豐臣恩顧の舊臣を怒らせ一時は戰亂に迄なるかと思はしめたが、この時は家康機を見て屈した。然し十六年には家康上洛するが再び秀頼に上洛をすゝめてきた。この時は高臺院及び淸正の誓言に從つて秀頼は二條城に家康に謁してゐるのであるから、時の勢力は既に分明してゐたと見るべきであらう。

このやうな次第だから大阪方の不安はどんなだつたか想像に難くない。かゝる間にあつて關西の神社佛閣に秀頼寄進の土木事業等を盛に起してゐるのも、一面にはこの不安に對する神頼みであると見ることが出來ようかと思ふ。これは家康の勸めによつて行つた土木事業で、この爲に多額の費をなして、後大阪の陣の時軍用金の不足を來して敗軍に及んだ一原因であると說く人もある。或はそのやうな所もあつた筈と思ふが、淀君の身の上に同情的な眼を注ぐならば、もつと人間的な營みが考へられると思ふ。淀君にしてみれば、「父長政の滅亡、母お市の方の自殺等を眼前に見一族滅亡離散の中にあつて孤兒より一躍天下の覇者秀吉の側室となつて榮耀を極め、秀吉の後嗣秀頼の生母として諸大名を脚下に平伏せしめた淀君は、この德川氏の勢力に屈服することを欲せず云々」と百科辭典に批評がはいるやうに、登りつめた榮華が今や

頽落せんとする萠しに恐れてゐるのである。まして淀君は人一倍兒煩惱で、世間並の母親の如く、只秀頼の將來が案じられたのであらう。彼女にはもうこの世の運命程頼られぬ、はかられぬものはなかつたであらう。神か佛かにすがる他にはその氣持をのばす由もなかつたのではないかと想像する。だからこの神社佛閣の造營も、家康の政策にはかられたとばかりは思はれない。彼女自身が進んでしたことかもしれないと思ふ。

一體に淀君は悪評が多すぎる。思ふにこれは關東方の差し口と考へられる。大體淀君はたいした策略家のやうにも思はれてゐる。これは關白秀次が亂行の結果自殺せしめられたのが、秀頼出生後である爲に、淀君は石田三成と策謀したのであるといはれるのであるが、淀君は寧ろ平凡な腕もない女で、こんなことの出來る女ではない。石田三成なら或はしたであらう。只淀君は秀頼の母親として、可愛いばかりに、柄にない差出口もしたかもしれない位の話かと思ふ。秀次の最後はいはゞ自業自得であらう。又淀君は石田三成と關係して關ケ原の役を起したやうにもいはれてゐて、淀君の不品行の悪評は至れり盡せりの感がある。三成死後は大野治長を嬖寵し、その爲に恩顧の舊臣も愛想をつかして大阪城を見離すに至り、遂には忠臣片桐且元迄も城から逐ふに至つて大阪城滅亡の因を造つたといふ。一つにこれ淀君の婬亂に禍すと云は

れる。美少年の小姓を玩弄する圖など猥本の好題目とは實以て氣の毒である。どの點迄これらを信じてよいかは勿論わかつた話ではないが、大阪城で威張り我儘云つてゐる淀君を何とか悪評を加へなければならなかつた家康方の存在を忘れるわけにいかない。江戸時代の史家は儒教の影響をうけて、時の天下德川幕府の爲に幕政が正義人倫にかなつてゐたことを書かなければならない。所が家康は秀吉が死ぬ時前田利家と共にくれぐれも秀頼の後事を托されてゐる。然諾を重んずるはこれ武士道である。その家康が方廣寺の鐘銘を持ち出して難題をふつかけて豐臣氏を亡してしまつた。戰國の世で、尋常茶飯事ではあるが、幕府の文筆業者は神君の人德を汚がすやうなことは書けない。そこで大阪の滅亡は淀君の不倫がもとで自業自得で、家康は亡ぼすつもりではなかつたのであるといふやうな議論を形作つた。これ淀君の悪評は火に油をそぐやうなものであつた。何せ秀吉死後城陷る迄十四五年の空閨時代があるから、それを如何に過したかはわかる筈のものではない。且つ淀君は秀吉にとつては織田方で主筋に當つてゐるので自然と氣位も高く、彼を眼下に見下してゐたなどと傳へられるやうに、相當我儘者であつたらしいから、暗の種も無いではなかつたかもしれない。然し當時の一般女性の位置、後家と娘は若い衆の共有物視したこれらの思想からすれば、別段取り立てる程の不品行でもなかつた

かもしれない。ともかく淀君は歴史上有數なる悪評を受けてしまつた。それに秀頼は大阪の城下には非常な人氣だつたから城亡んだ時、その口惜しさが一途に淀君にむけられたとも想像される。かくして淀君は無類の悪評を受けるに至つたものかと同情する。よし又傳ふる如き性行の女性であつたとしても、文藝的に見るならばこれ又一種の女性で興味があるといへるから、別段かれこれ論議する迄もないことであらう。

只一言したいのは、大阪城滅亡を淀君に負はせる點である。秀吉の正室杉原氏と勢力拮抗してゐたので、舊臣が二分して遂に關ヶ原で失敗して、やがてくる滅亡の因を作つたことは確かであるが、その他で淀君に責を負はせることは少し無理ではないかと思ふ。例へば中川一男氏は淀君を、歴代の政治的に活躍した女性に比して著しく見劣りがする。男子を凌ぐ意志の力もないし、思慮ある政治的手腕もない。「只蔦蔓の如く大樹の影によりすがつて上つただけの女性であるから、女性のもつあらゆる缺點を具へてゐて、虚榮で淺慮でまた著しく臆病であつた。」といひ、豐臣氏の滅亡に關しては勿論家康の野心と奸計に基くのであるが、彼女もまた女賢しうして牛賣りそこなひし罪を負はねばならぬだらうと評してゐるが、家康の如き稀に見る術策家にかゝつてはどうして淀君の如きが太刀打ちの出來る筈が無い。豐臣氏が失敗したから淀君

の罪とするのは事情からいつて少し冷酷ではないかと思ふ。家康以上の英雄だつたら或は豐臣氏を盛り立てたかもしれないが、若しそうだつたら淀君は日本一の女人政治家として名を賣つていい筈とならうではないか。どうせ淀君は平凡人だつた。だから赤子の腕をねぢるやうに家康から捻られてしまつただけのことである。

依つて最後の事件鐘銘問題を書いて見よう。慶長十九年、秀頼が方廣寺の大佛供養を行はんとした時、鐘銘に國家安康の句があるのを、これ家康を呪詛するものなりとして供養を差し止めた。大阪では驚いて片桐且元直ちに駿府に下つて百方辯疏したが家康は聽かなかつた。事容易に收まらぬ形勢に淀君心配して更に大藏卿局を下した。すると家康は今度は反對に甘言を以て優遇し、心配することはないと大阪に歸らしめた。大藏卿局よりその旨復命を受けた淀君は案外の報知ではあつたが、一も二もなく信用して家康の老獪を疑はなかつた。家康はこのやうな術策と共に一方駿府に止めて大阪に歸へることを許さなかつた且元へは三ケ條を以て迫つた。一つは秀頼大阪城を去ることであり、一つは參勤交替することであり、もう一つは淀君を江戸に人質に出すことであつた。且元は家康の老年を思ひ、秀頼の成長を頼み、今暫く何事も隱忍自重すべきが結局利のあることを考へて、淀君を人質に出すことに腹をきめて漸くにして

大阪表に歸つて、その意見を述べた。淀君はじめ大野治長等も大藏卿局の復命と大變に相違するので、これは且元が關東に內應して淀君を質とするのであると疑をかけ、且元を殺さんとした。まんまと家康の術策にかゝつて可惜片桐且元は裏切者と見なされんとする情態となつた。且元遂に大阪城を去つて所領の茨木城に引籠り、家康からの要求は遂げられない事情になつたことを京都所司代板倉勝重に通じたので、こゝで彌々大阪と關東との間に戰ひが起るに至つた。これが慶長十九年の冬の陣である。

片桐且元は大阪城にとつて忠臣なりや否やは議論の餘地のある所ではあるが、鐘銘事件をきつかけに、淀君は全く家康の藥籠中のものとなつてしまつた。長年大阪城の爲に盡した老臣且元を疑ひをかけて逐ひ、今となつては德川と一戰の他なしといふことになつたのである。これこそ家康の待ちもうけたる所、淀君や大野治長など到底家康の敵ではない。

家康出馬の準備整つて、諸大名に出兵を促すや、大阪方は、全く家康の術中に陷つたことを知つたが、もう遲い。今は是迄と豐臣氏の最期を飾るべく籠城に決し、諸侯に援軍を乞ふたが誰一人應ずるものもなかつた、たゞ眞田幸村等の馳せ參じた者と共に、德川勢百三十萬の大軍を迎へて微動だもしなかつたのはえらかつた。家康は戰が長引いて豐臣恩顧の大名が叛旗を翻

へすことを恐れて後日再擧を謀るの賢を思ひ、こゝに和議が成立した。

然るにこの和議の條件の中に、城郭の一部を取り壞つといふのがあり、外濠を埋むることを約したに不拘、德川方の本多正純は二の濠迄埋めたので、大阪方が違約を責むると、これは本多の專斷に假口して荏苒日を過すうちに二の濠全部を埋めてしまつた。且つ條件となつてゐた城中の浪人者を扶助することを交渉したら家康却つて大いに怒つて使の者を却けたといふ具合で、大阪方は先で懲りた筈の所、こゝで漸く老獪家康の意中を知つた。これこそ遲い。大阪城が强かつたのはその濠に圍まれて籠城し得たからであるのに今はもうないのである。大阪方再擧はしたが、今度はどうすることも出來ない。諸將打つて出で討死し、遂に元和元年五月八日城陷つて秀賴淀君等城に火を放つて自刄し、豐臣氏は亡んだのである。

これで知れるやうに家康は實にひどい仕方で大阪をだまし討にしたのである。隨分卑怯なやり方であるが、その間是が非でもとあせりにあせつてゐる所が見られる。こんな爺さんを相手にまともな喧嘩をさせられた大阪方こそ正しく不運なものだつたと云ふ可きではないか。淀君で無くても、誰であつても結局は何とか、かとかして亡ぼされてゐたと思はれる。それ故豐臣氏が亡びたといふ理由で淀君に罪を負はせることは凡そ無理ではないかと思ふ。

然し豐臣氏の最期は花々しいではないか。一度だつて德川氏に頭を下げて臣下の禮を取ることをせず、寧ろ屑よく、その理不盡な要求の前に進んで玉碎していつた所、何ともすがすがしいではないか。一思ひに諦めた所など多少ヒステリツクの傾きはあるが、又秀吉の豪華洒落な風格の及ぶ所と思はれて、こゝに萬斛の詩がひたされてゐるやうに思はれる、或は寧ろこの詩の中にこそ淀君の唄があるとすべきではないか。淀君と豐臣氏とは大阪城を一擧にして灰燼と化しつゝも尙自己の誇に生きたといふ所に全貌があると思ふ。淀君は美貌で、或は多少色ぽい所のある女性であつたかもしれない。平凡なヒステリツクな、別段取り立てる程の女性ではなかつたが、然し幾多の運命を通して自己の誇りの前に花々しく死んでいつたといふやうな一種はでな人柄と思はれて、この點矢張り開放的なはでな女性として特筆されてもいいのではないかと思ふ。

白柳秀湖氏は、日本閨門史で不良とされる淀君定說に對して、淀君は溫良柔順な婦人であると力說し、石田三成大野治長との關係の無根なる由を論證しつゝ、淀君はたいしてむづかしい女性でもなく、ヒステリツクな女性でもなく、もつと溫味のあるふくらみのある女らしい女であつたに相違ない。只秀賴の可愛さに引きずられて最期を遂げたと說いてゐるのを見るが、誠

に面白い說である。實際淀君は可愛い秀賴のために、家康の術中に落ちて、まごまごさせられた婦人であるに止まるのである。

依つてこの稿を終るに當つて大阪城最後のことを詳記することにしよう。元和元年五月夏の陣も、七日城陷るに及んで結末を見たのであるが、この日大野治長は秀賴夫人千姬を城より脫せしめ、使を家康の行營に遣はして、秀賴母子の助命を請はしめてゐる。その時淀君、秀賴等其外女中共に大野修理介、速水甲斐守等城中の山里帶くるわ二間五間の庫にひそみかくれてゐたのである。駿府記、義演淮后日記等諸書に見えてゐる所で、大野の從者米村權右衞門が使者となり茶臼山に參つて本多上野介、後藤少三郎を以て訴へて云ふには、秀賴並に御母儀の命を御助けに於いては、修理を始め各切腹仕る由を申上げた。家康は赦免してもいいといふ考へであつたが尙秀忠の意見を徵せねばならぬと仰があつたが、時旣に夕方に及んでゐたので右の使者は後藤少三郎方に預けられたとある。千姬が城脫出に就いては老談一言記、柳營婦女傳等に淀君とのいきさつが述べてあるものもあるがこれは何れ千姬の項に於いて詳說することにして、千姬は矢張り母子助命の願を治長より托せられて城を無事脫出したものと考へられる。秀忠は千姬の脫出を悅ばずと大阪記には述べてあるが、ともかく秀忠は秀賴母子の助命を肯んぜ

ず、翌八日、晝に井伊掃部助直孝に命じて秀頼母子に切腹を命じた。寛政重修諸家譜、井伊直孝に依ると、秀忠は、直孝、本多正純、阿部正次に討手を命じた、大野治長は直孝等に就いて秀頼の助命を乞ふて、その使者の往復に時刻を過した。直孝等は早く事を決するに若くはなしと鐵砲を放たしめたので、治長はことの成らざるを察して庫に火をかけ、秀頼はじめ淀君その他の將士皆自殺したとある。同じく諸家譜、安藤重信、近藤秀用の項を見るとこれらは時に檢死の役で城中にあり、助命の願を幸に秀頼を生擒にせんと謀つたことが書かれてゐる。慶長見聞書、によると片桐且元が戰爭中城中に入りて火を放たしめ且つ秀頼母子の隱匿の所を報じたとあるが、扨て家康秀忠使を遣はして秀頼の助命を談ぜしめ、大野治長を呼び出し、秀頼は高野に上せ、淀君には一萬石を給すべしとある。治長は、秀頼には何事でも異見して合點させることは出來ませうが、淀君は仲々承知すまいと思ふと答へて内に入つた。其後淀君も承知したが、乘物がないから二三挺借りたいと申込んできた。そこで乘物は一挺しかないから馬を進ずべき由を井伊掃部が申した。これで秀頼を手取りにしようといふ考へであつた。ともかく埒明くるがよからうと井伊安藤等議して發砲せしめたので、頓て内より草を用意してあつたのか、各自害して燒立てたと書いてある。

治長等はこの最後になつて如何に主人の命を永らへしめんと苦心せしかを語るもので、その傳ふる所必らずしも確實な實話ではあるまいが、何處となく涙ぐましい所が見える。治長は白面の優男で、淀君の嬖寵と見なされ甚だ評判惡しく、細川家記などには、大野修理手よわき事沙汰の限り、かはねの上の恥辱無是非儀共に候事と批評されてもゐるが、又翁物語には、治長を批評して、「日本を引請けて今の代に軍すべき大將を知らず、俄かに人數を集て、家康公ほどの名將も氣遣ましますほどの軍をして、終に秀頼公を人手にかけず、切腹させ奉り、共に形も見えぬ樣に武略せし事、敵にしても味方にしてもにくみがたき事也、」とほめてゐる者もある。

時に秀頼は廿三歳、毛利豐前介錯、淀殿卅九歳、萩道喜害すと井伊年譜に出てゐる。然し淀君の年齢は異說多くてわからぬが、玄朔道三配劑錄、慶長八年、内大臣秀頼公御母三十餘歳云々とあるから、元和元年は四十餘歳であらねばならぬ。或は卅九は卅九の誤りかとも思はれる。法名は太虞院英岩と云ふ。翁草によると、享年四十九歳とある。他に四十歳、三十九歳、四十五歳の說あることをも引いてゐる。法號も、大廣院、又淀光院、又大虛院花顔妙香ともあると書いてある。

秀頼の最期については、恰度義經の最期と同じやうに、薩摩琉球に逃れたといふ異說が傳へ

られてゐる。勿論取るに足りない。リチヤルド・ユツクス日記、日本西教史、一六一五、一六一六耶蘇會のパードレ等より同會の總長に送りし日本の年報、諸系譜、慈性日記、舊典拔書、薩州舊傳記、譚海、先公實錄、甲子夜話、龜山抄、老談一言記等枚擧に遑がない。

出雲阿國

大日本史料、慶長八年四月是月の條に

出雲ノ巫女國、京都ニ至リ歌舞妓躍ヲ演ズ、遂ニ諸國ニ行ハル。

と本文が誌され、慶長のはじめにあたつて、出雲の巫女阿國といふ者が躍つた新體の舞踊が、非常な勢で流行したことが知られる。

時慶卿記　慶長八年五月六日、天晴、女院御所へ女御殿御振舞アリ、ヤヽコ跳也、雲州ノ女樂也、貴踐群集也。

御湯殿上日記、慶長八年五月六日、はるゝ、女ゐんの御所へ女御の御かたより、やゝこおとり御めかけまいらせられて、く御にもならします、御はんはこなたにて上る。

慶長日件錄、慶長八年五月六日、晴、於女院かぶきおとり有之出雲國人云々、女御之御振舞也、內々衆多分被召者也。

慶長見聞錄案紙上、今年〇慶長八年春より、をんなかぶき諸國江くたる、これは於國と申太夫、

出雲のもの、佐渡江渡、京へ出をとり初、諸人是を見物、次第に能成、諸國に女かぶき有、江戸江名人のかぶき來候得とも云々、

鹿苑日錄十九、慶長九年正月廿二、自朝晴天、齋了、源介、孫四郎同途シテ赴北野、自東京、昕英、玄室、江叔、魯雲、丘叔光駕、於北野參會、抃躍之妓女一覽、各々同途シテ、依松隱擧盞進酒。

當代記三、此頃○四月ノ條カフキ躍ト云事有、出雲國神子、女、名ハ國、但非好女、出仕、京都へ上ル、縱ハ、異風ナル男ノマネヲシテ、刀、脇指、衣裝以下、殊異相也、彼男、茶屋ノ女トタハムルル體有難クシタリ、京中ノ上下賞玩スル事不斜、伏見城ヘモ參上シ、度々躍ル、其後學之、カフキノ座イクラモ有テ、諸國エ下ル、云々

（尙、十二年二月廿日ノ條ニハオ國歌舞妓江戸ニ下ルコトヲ誌セリ）

野槌五、近年○慶長中出雲巫京に來て、僧衣をきて鉦をうち、佛號を唱へて、始は念佛おどりといひしに、その後男の裝束し、刀を橫へ歌舞す、俗にかぶきと名づく、云々

以上の諸書によつて、凡そ歌舞妓踊が慶長の頃になつて勃然と流行し、はじめは念佛躍であつたのが、男裝して女にたはむる樣を躍るかぶき躍になつたこと、及それが出雲國人、或は出雲

巫女國といふものが始めたることを知り得る。それが如何に流行したかは、女院の御所、伏見城にまで參上し、或は北野に跳る等の記事を見てもわかる。

以上によつて阿國は慶長八年頃京都に榮えた出雲の女であることを知つた。然らば阿國の經歷はどんなか出雲阿國傳（千家七種所收）によると

出雲阿國傳、○千家七種所收、出雲大社宮假冶職中村三右衞門カ女ニシテ、巫子國女ト云ヘルハ、普通書ニハ小村トアリ、又阿國ガ實家ヲ中村ト名乘ルハ杵築ノ內中村ト云フ處ニ居住シタルヲ以テ、家號トセル也云々、永祿ノ頃、大社修覆勸進ノ爲、諸國巡回セシニ、容貌美麗ニシテ、然モ神樂舞ニ妙ヲ得タレハ、人皆是ヲ稱ス、後京都ニ昇リ、磐戸ノ俳優ヲナスニ、足利義輝殊ニ是ヲ愛シ、度々召シテ舞ハシメラル、後、阿國神樂舞ヲ一替シテ歌舞ス、於是、阿國カ歌舞、世ニ名高ク、信長、豐太閤ノ御前ニモ出、又文祿年中、伏水城ヘ召サレ、越前中納言秀康卿ノ前ニテ歌舞ヲナシ、水晶ノ珠數ヲ襟ニカケタルヲ見苦シトテ、具足ノ上ニカケタル珊瑚樹ノ珠數ヲ下シ、秀康卿感涙ヲ催サレケリ、其時阿國カ歌ニ

おほけなき寶の珠の數々をいたゝきつるもありかたのよや

後老テ杵築ニ歸リ、尼トナリテ智月ト稱シ、（中村門五郎カ家記ニ霜月信女トアリ、何レ

カ是ナラン、）連歌ヲ好ミ、又法華經ヲ讀誦セリ、同所中村舊阿國カ實家、鍛冶原ト云フ處ヨリ、三町計北ニ庵ヲ結ビ、連歌ヲ以テ樂メリ、故ニ世ニ此庵ヲ連歌寺トモ連歌庵トモ、又おくに寺トモ云ヘリ、智月八十七歳迄長命セリト、墓所ハ中村門五郎カ墓地太皷原ニ在リ、云々

右に依つて阿國の經歴は大體わかつた。これによると阿國は永祿の頃出雲大社修覆勸進の爲に諸國を巡回して京都に至り、義輝、信長、秀吉、秀康等に寵愛せられたと見える、つまり、こゝに思ひかけずも阿國は永祿の頃の人といふ說が出て來たわけである。先に述べた阿國歌舞妓が榮へた慶長八年より數へると永祿元年は四十六年も以前に當る。一寸辻つまの合はぬ事になる。この永祿說の唱へられたのは寛文二年に出た雍州府志がはじまりで、人倫訓蒙圖彙、貞丈雜記、歌舞妓事始等に主張された一說で、試みに雍州府志を引くと、

雍州府志八、芝居、又一種有歌舞妓者、元出雲大社巫女、有號國女者、一轉神樂而歌舞、是古所謂白拍子之類、而元神樂之變風也、永祿年中、有名護屋三左衞門者、元武人而落魄生也、在京師則與國女密通、共謀之作歌舞妓曲、歌舞妓、中古所稱狂言樣也、其稱猿若者、三左衞門所每赴之娼家奴隷男、有猿者、性魯鈍而不通人情、三左衞門常玩之、至今有狂言

猿若、是皆所假爲猿若者也云々、遂於洛東祇園社南門、開場催之、是歌舞妓之濫觴也。

卽ち、永祿の頃名護屋三左衞門と阿國共謀して歌舞妓の曲を作つたとなつてくる。この永祿說、阿國名護屋三左共力說は貞丈雜記によると尙一層敷衍されて相連れ立つて足利將軍、信長秀吉迄出てくる。貞丈雜記二歌舞妓の事の段には、永祿中出雲大社大破に及び、おくにといふ巫女が國々に勸進にまはり、「時の將軍義輝公の御所へも參り、御祈禱の爲、神樂を歌て御覽に入る、かのお國、美女にて歌舞を能しければ、將軍家へ召抱られけり、又其頃名古屋山左衞門と云浪人も歌舞を能して、將軍家へ召抱へられて、山左衞門とお國と打交りて歌舞をなして御覽に入しが、右兩人相互に密通して」お暇を賜つて浪人、その後信長秀吉にも稱美されたが、特に「信長公の時歌舞の場所を北野の人升有し所にて給りて、山左衞門とおくに歌舞を興行す、是歌舞妓芝居の始也、其時の辻札の寫しさのごとし、

從五月八日、於北野名古屋山左衞門在所、絲捻女の所作成之一覽念望之、人須來見

右のやうに少しづゝ詳しくされてゐる。この說のもとに阿國傳は書かれたのであつて、これは名護屋山三は出て來ないが結城秀康の件が詳はしく附加されてゐる。然し何はともあれ、伏見城主結城秀康では困まる。伏見城は秀吉が文祿三年に築城したもので曾つて秀康が城主たりし

ことはない。武家閑談では、それ故「慶長年中伏見にて越前黄門秀康御屋敷へ、お國といふかぶき女を召て、かぶきをとらせ御見物有云々」となつて居り、更に歌舞妓事始には「文祿年中秀吉公の御時伏見御家門御歴々の御屋敷へ、於國を召れ云々」と記して秀康とは明示してゐない。これで一應は秀康の難はまぬがれ得たやうでもあるが、永祿の足利義輝に寵愛されたやうな云ひ方と慶長八年に「此頃かぶき躍と云ふ事あり」といふやうな敍述との年代的開きは如何ともし難い所である。義輝が弑されたのは永祿八年だから若しその時として最小限に年月を切つても卅八年の開きがある以上、若し阿國が永祿の時二十歳と假定すると慶長八年には五十八にもなる。慶長見聞集五歌舞妓をどりの事の段に、

「扨又、慶長の比をひ……くにといひて、かたちゆふに、心さまやさしき遊女候ひしが、柳髪風にたをやかに、桃顏露をふくめるふせい云々

と讃め、「音聲雲にひゞき、こと葉玉をつらね」と書き、ともかく若やかな樣子が見える。まさか五十を過ぎた婆さんの形容詞とは申されない。そこでこの矛盾を何とかしようとして遂に永祿の頃の人は初代で慶長頃は二代目阿國であらうと混合折衷說が揑つち上げられることとなつた。その代表的なものは歌舞妓事始である。これによると、阿國等五人の女藝者が室町殿に寵

愛されたが、後騷擾重なる時勢の故に御いとまを賜つた。山左衞門於國は渡世の營なくして困つてゐたが信長公の時御前に召されて度々舞つた。場を求めて歌舞せんと願つた所其比北野に人升のありしに御免あり、

「天正三亥年、於國神樂を略して、始めて北野にてまひけり、是歌舞妓を芝居にてつとむる創也、夫より文祿、慶長にいたり、洛東祇園南林におゐて、場をひらきこれを催ふす、山左衞門と於國が中に、娘ありけるをともなひ、連まひを仕たりける。其後五條橋の南（今云、問屋町さや町の邊也）にて娘に國の名を讓り、芝居興行せり、是を世にお國かぶきといへり、此二代目の國に聟をとり、舅山左衞門が名をかたどり、山三郎といへり、世にいふ名古屋山三是也、云々」

この說は全然一種の妥協案でしかないのであるが、現代でもこの說を遵奉してゐる者がある。それ程前後整然としてゐる。それだけ阿國や阿國歌舞妓の歴史說が時代の世の中に採まれた後に出來た證據である。高柳氏はかゝる說を反駁して、事始に天正三年神樂を略して初めて北野で歌舞妓を芝居にしてつとめたと記するが、出鱈目なことである。大體この事始が案外信用されないことには、永祿二年義輝に召されて物眞似狂言づくし、義經記、曾我仇討などを三段續きに演じたと記してあるが、これなぞ少し歌舞妓や狂言のことを知れるものには驚くべき出鱈

目であることがわかるといつてゐる。つまり永祿說は寬文以後の諸書に出てくる說であつて、肝心な永祿慶長の當時の信賴さるべき公の記錄には阿國歌舞妓のことは何等記載さるゝ所がないのである。それ故慶長以前のお國說は畢竟抹殺すべきものである。事蹟合考參考落穗集にはお國は文祿の頃京に出たとあるがこれも確證があるわけではない。

右の如く、文獻に現はれてくる事實よりして阿國は慶長の頃に榮えた人といふ說を取らないわけにはいかない。又このやうにして文獻の整理も出來或は文獻そのものゝ動きも知れて興味深きことでもある。又この整理によつて阿國が名古屋三郎との關係についても一應の見透しがつくやうにも思はれる。

山三が阿國と關聯して始めて文獻に出てくるのは、先に述べた永祿說が初めて出た寬文二年の雍州府志を溯ること十年、卽承應二年の懷橘談である。

懷橘談によると

「抑、此國○出雲八雲立、出雲八重垣、陰立寄テ、歌詠人モ多カラメト、人ニ尋侍ハサハナクシテ、和歌正風變シ、神樂律呂モ亂レテ、今ハ夷曲(ヒナブリ)タル歌舞妓ト云ル事、近頃久仁ト云巫女ガ舞出シタリ、白拍子ノ朝羊ニヤ、○中略此頃ノカブキ、初ハ僧衣ヲ著テ鉦ヲ打、佛號ヲ唱テ

念佛躍ト云シニ、其後名古屋山三郎ト云フ者、久仁ニ刀ヲサヽセ、頭包(ヅヽン)、早歌ヲ教ヘ舞ヒケレバ、歌舞妓ト云、云々

其後雍州府志を初めとして貞丈雜記、安齋隨筆、武家閑談、事跡合考參考落穗集、嬉遊笑覽、落穗襍談一言集、張州人物志略、尾張名所圖會、名府戲場事始、歌舞妓事始等々に山三の事が誌されてゐる。山三郎は阿國の情人で相謀つて新工夫して、彼の考案によつて阿國が歌舞妓躍を創めたといふのである。初めは山三郎が名護屋三左衞門とも書かれ、永祿說と共に足利義輝のもとに召し抱へられたりする。その後文獻が永祿慶長妥協說の頃になると初代阿國と名護屋三左衞門、二代目阿國とその聟名古屋山三郎となつてゐたりする。

然らばこの山三郎とは如何なる人として傳へられてゐるか。尾張名所圖會(前編一)によると

○前略…名古屋藏人言信……はふるき地侍にて、今川氏豐の城主たりし時より以前の人なり……山三はその一族にて、鹽尻に、名古屋因幡守敦順が子山三郎、後九右衞門といふ、母は織田刑部太輔の女、山三郎浪人の後、出雲の巫子くにといふ女を具し、京都三條にて女歌舞妓をなす、其後大阪にて淀殿とも惡名の沙汰ありと云々と見えたり、山三郎はじめ蒲生家に仕へ、後森作州侯の家臣となりしなり、森家の系圖に、森侍從忠廣朝臣の母は名古屋山三が

妹なるよしに見えたり、其緣によりて奉公せしなるべし、山三、後に井戸某が爲に害せられしともいふ。

更に詳しくは、落穗襍談一言集十七にある。

蒲生氏鄕の小姓名古屋山三郎は秀吉公の御馬廻り中井平左衞門組に、大番衆名古屋庄兵衞が七男也、庄兵衞僅に五百石の身上にて、男女十人計り有ければ、養育し兼て、山三郎をば建仁寺の西來院の喝食に出しけるに、天正十八年、小田原御陣觸有し時、氏鄕は御先手にて、深草に於て武者揃せられしに、洛中の男女僧俗、多く見物に出けるに、此時山三郎も、紫の長絹にて見物に出たりしを、氏鄕馬上より見て、其名苗字を尋ね、遂に父庄兵衞に便り、建仁寺より招て、小姓に召抱へられたり、名古屋其頃の美童にて十四歳なり、氏鄕逝去之後、遺物の金銀澤山に持て京へ登りけるが、其時十九歳也、容色美麗にして、尤前髪あり、馬を持人を抱へ、浪人にて凡五百石程の身上也、傾城葛城と云女にちなみ、其外禁裡仙洞の上臈、女房、公家武家の女中等、山三郎と密通の事共其數を不知、淫亂の汚名を天下に流布して今の世にも人の嘲となれり、山三郎が姉、是又無雙の美女にて森右近太天忠政の妾也、其子內記忠續を產む。其緣に依て山三郎は作州津山に住して三左衞門と改名し、家老職に成

つて、家の仕置せしが、猶淫亂の風儀は不止けり、或時井戸理兵衞と云者を、右近申付討せられしに、返り討に討たれて、名古屋は死せしといへり。

とある。卽ち山三郎は尾張の人で蒲生氏鄕に仕へたが蒲生家沒落後退散して京に住んだ頗る付の色事師であると傳へる。これが出雲神子國と一緒になつて女歌舞妓をはじめたといふ次第である。事跡合考參考落穗集によると、蒲生家を浪人して、文祿の頃、京大阪に遊び、今は山左衞門と稱し、お國と密通したが、元々彼は「美男風流にて猿樂の能の、間の狂言よりおもひ付て」「尾張の座猿若といふ下人としくみて、猿若太夫といふ今樣狂言をとりたて、お國が躍念佛の間とし、且つ亦新發意太皷、花笠踊などいふを舞す、この時その名代お國歌舞妓と唱ふ」とあつて阿國山三の醜聞合體の彌々はつきりするやうに書かれてゐる。それ故現在でも阿國山三の合體合成作は何等かの眞實を傳へるものではないかと信ずる學者もあるのであるが、果してそんなに密接な關係があるとすべきであらうか。

武家閑談六には秀次の愛した不破萬作と山三郎は天下の美色也とほめ、山三郎は氏鄕沒落後浪人したと書きながら、その第四卷には淀君と密通して秀賴を生んだなどと書いてゐる。秀賴は文祿二年に生まれてゐるに氏鄕が卒したのはこの四年である。このやうな間違をすら平氣で

書いてゐる位だから他は推して知るべしだが、このやうに山三の出現と阿國との連關には何となくとつてつけたやうな所がないではない、特にその記錄が後世の雜書に多い點から考へても山三といふ天下に名高き色事師があつたといふ傳說が阿國歌舞妓に合流してきたのではないかと疑はれる。

第一に疑はれるのは、肝心な阿國傳に名古屋山三の名が乘つてゐないことである。それに東海道名所記は山三が初めて名乘り出た承應二年の懷橘談が已に世に出て七八年を經た後の萬治年間のものである、がそれには、

「かくて三十郎といへる狂げん師を夫にまうけ、傳介といふものをかたらひて、三條繩手の東のかた祇園の町のうしろに舞臺をたて、さま〳〵に舞をどる云々

とあつて山三郎なんて情人のことは載つてゐない。だから骨董集上編下後はこゝに疑を止めて、

「そゞろ物語に、くにが父小村三右衞門とあり東海道名所記にくにが夫狂言師三十郎とありて、父も夫も三もじを名につきたれば、それを後にきゝひがめて、名古屋山三郎に混しにや、名古屋山三郎、あるひは三左衞門ともいひ、いづれかさだかならず、たゞし、くにと同時の人なることは論なし、くにはもと遊女なるよしなれば、かれをもこれをも夫ととなへし

か、そはしるべからず、

とある。然し殘念ながらこの說は夫と情人との區別を立てゝゐないから、忽ち嬉遊笑覽に東海道名所記の他にくにの夫を誰々とは記してない。山三郎が只舞を舞はせたといふに止まる、といふのであると反駁されてゐる。安齋隨筆では山左衞門はくにを妻となしとしてゐて、山三郎とは別人だと斷つてゐる。喜多村氏は山三郎とお國の夫三十郎とは別人とする說を以てゐるが、ともかく山三郎がその情人であるとは云へ、その說の盛に吐かれた文獻は多く後世の俗書であつて、古記に少いといふことは以上の敍述で知られる樣に尙以つて救ひ得る所ではない。それ故我々はお國永祿說に對したと同じ態度で山三郎說にも對さなければならぬと思はれる。一應の疑を持つのは當然のことである。それ故大日本史料でも、

山三郎ノ名ノ世ニ喧傳スルハ、寬文、延寶ノ頃山本土佐椽ガ淨瑠璃曲曲名、名護屋山三に作り、尋デ之ヲ戲場ニ上セシニヨルナラン

と案文を下すのも然るべきものであつた。こゝに幸にも多少とも斷案を下し得る資料が近年發見された。それは「かぶきの草紙」である。この草紙は慶長をさること餘り遠からざる時代のものであつて、これは阿國の歌舞妓に名古屋山三郎の亡靈が訪ねてきて共々躍るといふ趣向で

ある。なこさんさまと書かれて名古屋様であらう。つまり阿國歌舞妓には名古屋山三郎が趣向として織り込まれてゐたといふことを知る。これによつて山三の名聲は高く寛文延寶の頃には淨璃瑠曲に仕組まれて益々以て喧傳されたものと思はれる。

この「かぶきの草紙」と阿國山三については高柳光壽氏が日本風俗史講座桃山時代篇に詳細に紹介しつゝ勁拔な論を立てゝゐる所である。今それによつて大體の論をつゞけると次のやうな說になる。

阿國山三は肉體的に關係があつたかのやうに思ふ說者は多い伊原青々園、高野辰之兩氏もそうであるが、かゝる情人說の古來出たのもこの「かぶきの草紙」に起源してゐるだらうか。山三郎の亡靈とも彌々躍り分かれる段となると、

おかへりあるかのなこさん（名古山）さまは、おくり申さうよこはた（本幡）まで、こはた山路に行暮れて、ふたりふしみ（伏見）の草まくら、八千夜そふともなこさんさまに、なごりをしきはかぎりなし、云々

とある。情緒纏綿としてゐるが、これは阿國が躍の後に山三郎の亡靈を慕ふといふのであつて、必らずしも兩者間の直接的な關係を示すとはされない。現に山三の亡靈の出る所の說明せる一本には

さればふしぎのことあり、一むかしの事かとよ、なこやさんさと申てなまめいたるいろこのみのおのこあり、まことにみにすぐれたるかぶきもの、れんぼのみちにみをなして、いかなるくらいの人々とも、ふみたまつさをかよはかし、こゝろのまゝになひかして、世になかれたるかぶきもの、いへともいまははや、なのみはかりそのこりけり、おくにのかぶきに世うしんありて、ふたゝひゑんふたいてんして、まようこゝろのあさましけれども○下略

卽ちもう十年ばかり前に名古屋山三といふ有名な色事師があつたが今は已に世を去つて名ばかり殘つてゐ。その山三がお國歌舞妓に執心して冥途から再び迷つて出て來たといふのである。だから先の文句が兩者間の肉體的交涉の根據にはならない。大體脚色をそのまゝ事實に持つていくことは無理である。寧ろ、この場合裏から云へば、お國かぶきは山三が亡靈になつて迄執心する程面白いものであるといふやうに、一代の蕩兒、天下の子女を恍惚たらしめたかぶき者山三郎が宣傳のだしに使はれたに過ぎないといへないだらうかと說いてゐる。誠に面白い考へである。

大體歌舞妓といふ言葉は儒者學者等の文字知りがあてた宛字であつて、意味は「かぶく」卽ち傾くの連用形をそのまゝ名詞化せるもので、放埒に流れるといふ意味で古くより使はれてゐ

たのが、天正前後から時代的の粧に伴ふ流行語となり、好色遊蕩などの意味を指す俗語となつてゐる。それ故そういふ人間を「かぶきもの」といつたりしてゐる。山三郎がそのよき例であらう。夫故慶長初年阿國歌舞妓が榮えたといふのも、實は女が男裝したりする異風のもとに諧謔的にして頗る好色的な劇的新作があつたので、かぶき踊とも云ひ、忽ち天下を風靡する流行をも作つたと思はれる。だからかゝる躍りに天下に名高きかぶきもの名古屋山三を引き合ひに出すなぞ正しく格好のものと思はないわけにいかぬ。これらの藝人たちは畫は舞臺に立つか夜は客の枕席に侍するといふ古の女傀儡師以來の媚を賣る遊藝人だつたから尙一層流にも投じた。又そのために儒者道學者にはすつかり卑まれた、例へば羅山先生文集など美文を連ねて擯斥してゐるし、慶長見聞錄案紙などでも、

江戸へ名人のかぶき來候得とも、大納言樣秀忠公一度も御覽無之、御物語も無之と諸人奉感とばかり書かれてゐる位で君子の近づく可からざる體のものであつた。その賣笑は幕府公認の遊廓制度にも反するといふ次第となつて、家光の時寛永六年には全國的に禁止されてしまつた。これで女歌舞妓はなくなつて、以後若衆歌舞妓、野郎歌舞妓となつてゆくのであるが、寛永六年は慶長八年よりすると僅かに二十七年目に當る。以てその風紀紊亂振りも察せられる

し、天下に蔓延した樣子も察せられる。當時地方に下つた者は京に名高き阿國歌舞妓とあつて、いつの間にか阿國は歌舞妓の名稱にされてしまつてゐた。この事情が全國到る所に又時代を隔てゝも阿國が興行してゐたやうに間違へられて、さてこそ後世の俗書に二代目三代目のといふ說まで云々されたのであると思ふ。

以上、大分迂曲を盡した考證により私はこゝに一結論を得ると思ふ。

阿國は慶長の頃の人であらう。

阿國歌舞妓は慶長の初めに隆盛を極めた。

その歌舞妓踊には趣向として「名古屋山三郎」の名前が織り込まれてゐた。

寛永六年禁止された後、歌舞妓そのものが江戸時代の民衆藝術として本格的に完成して行くにつれて、その發生期が顧みられて古い昔を綴らうとした。そのころ民衆に傳稱されてゐた背ての名古屋山三の趣向を恰かも當時實存の人物と思ひなして、阿國と山三の歷史が織り込まれてきた。

歷史家はその經歷の古い程尊いと思ひたがる習癖がある。彼等もそうだつた。そこで山三郎を當時の名越山三郎にあて、それに辻褄を合はせるやうになつて、永祿文祿說が後世程唱導さ

れる。

以上のやうになる。尤もかゝる混亂した俗說が唱導されたにはこの他に歌舞妓が日本舞踊史或は演劇史に持つ位置を考へると、その中にも原因が見られる。「阿國歌舞妓の起源を永祿年間に求めんとするのは中世末期京都に於いて行はれた女曲舞、女猿樂等と混同して陷つた錯誤であらう」と原田亨一氏はその著近世日本演劇の源流で說いてゐる。

かぶきの草紙を見るとはじめは念佛踊があつて、後に「かぶかん〳〵」とかぶき躍にはいつてゐる。阿國歌舞妓之記所載の次嶺經に、

歌舞妓に出雲御子國トカヤ云シ者、黑衣ニ鐘ヲカケテ躍シヲ初メニシテ、ヤヽコ、大原木ナトイフ躍小哉ノ拍子ノ曲、諸人耳目ヲ悅バス

とある。一種の念佛踊から起つてゐる。ヤヽコ踊は分明ではないが、天和貞享頃に大阪で流行したといふ。歌に合はせて手拍子毎に木偶を踊らせるヤヽサマ踊とその原流を一にするらしい。喜多村信節氏は一種の子供の盆踊であらうといつてゐる。諸家說のわかるゝ所であるが要するに阿國歌舞妓は念佛踊、ヤヽコ踊から、民謠小唄をいれ、且つ茶番式の痴態狂言をもまぜてゐて、いはゞそれ迄の巫子舞から猿樂、田樂、曲舞、倶舍論舞、說敎等から、今樣、早歌等

迄集大成した觀がある。そこで歌舞妓の原流を求めんとして阿國歌舞妓に至つたときその先き迄つひ手がのび過ぎてしまふといふ形になつて永祿文祿說が起つたと思ふ。

そこで原田亨一氏は慶長八年隆盛になつたといふ記錄の中より既に宮中に召されたり、又諸國にも下ると書かれてゐるから、この頃までには阿國歌舞妓は或程度迄完成されてゐたものと考へなければならぬとし、阿國は時流に棹して大成した人と見ることによつて、かぶき躍りに至る階梯には多少の年月を要したと認めねばならぬとなして、阿國歌舞妓の起源は慶長の初期或は文祿迄遡り得るかと思ふと說いてゐる。

右に依つて大體の敍述は終つた、阿國は一種の惑星で、忽ち出でゝ忽ち天下の人氣を取つた。(小寺新吉氏說) これによれば創始者と考へられる。又前述の如くなれば、かぶき踊りに類したものが徐々に出來上りかけてゐた中に、阿國が新工夫を以て登場して人氣を得たが故に阿國歌舞妓ともて囃されたとも考へられる。普通一般にはこの後者の新工夫者としての說が通つてゐる。夫故阿國それ自身の傳記も朧であるし、又それもさして興味あるものとはいへない。只女歌舞妓を隆盛に導いた人として深く忘れ難い人であるに止まり、しかもそれこそ江戸時代の娛樂が芝居に盡きることを考へればその功績は實に偉大としなければならない。

それ故我々の興味も主として、では阿國歌舞妓の初期はどんなことをしたかといふ點に系るに思ふ。高柳光壽氏に從つてそのかぶき踊をこゝに附加して筆を擱くとする。

かぶき踊は大體能に近い、樂器も能と大體同じで、笛小皷大皷太皷を用ゐ、三味線をいれたのは可なり後らしい。少くともお國かぶきには用ひなかつたと思はれる。かのかぶきの草紙を説明すると、先づ最初に、

みやこのはるの花ざかり〳〵かぶきをどりにいでようよ

と「ワキ」次第らしきものがあり、

そも〳〵これはいづもの國の大やしろにつかへ申し社人やにんにて候、それがしがむすめにくに

と申すみこ巫女この候を、かぶきおどりと申ことをならはし、てんか大へいの御代なれば、みやこにもまかりのぼり候て、おどらせはやと存候

と名乘る、次に

「ふるさとや、いつもの國をあとに見て

とお國が揚幕から橋がゝりへうたひながら出てくる。長門の國府に出で廣島牛窓、大阪を經て京につく迄の道行があり、さて都についたと舞臺の眞中に出る。そこで都は春、洛陽の花をな

がめんとばかり諸所の名花を賞し、遂に千本の花に如くはなしと北野へ行く、

「いかに申候、今日は正月廿五日、きせ貴賤ぐんしゆのしやさんのおりからなれば、かぶきおどりをはじめばやとおもひ候、まづ〳〵ねん念佛ぶつおどりをはじめ申さう

と念佛踊の歌をうたふ。

くうみやう光明へんしやう遍照十はうせかい世界、ねん念佛ぶつしゆし衆生やうせつし攝取しやふしや不捨　なむあみだぶつ南無阿彌陀佛

なむあみだ南無阿彌陀佛　なむあみだ佛なむあみだ、はかなしやかきにかけてはなにかせん、こゝろにかけよみだ彌陀のみやうかう名號　なむあみだ佛なむあみだ。

頭に笠を戴き頸に珠數をかけ鉦を打つて、うたひ且つ踊る。この念佛踊の場へ、

「なふなふ　おくにに物申さん

とて山三郎の亡靈がでゝくる。山三の亡靈は我を見知るやその昔の床しさにこれまで參つたといふ。阿國思ひ出されずして貴賤群集の中で、誰方かわからぬ名乘らせ給へといふに、山三は

いかなる物とこひたまふ。我もむかしの御身のとも、なれしかぶきをいまとても、わするゝことのあらされは

遂に冥途より迷つてきたといふ。そこで阿國は、その言葉のはしより

さてはむかしの小き人なごやとのにしましますか

といへば山三は、名古屋といはれて恥かしいとつまらぬ喧嘩がもとで世を果てた無念を述べ、

よし何事もうちすてゝ、ありしむかしの一ふしをうたひて、いさやかぶかん〳〵

とこゝで本當のかぶき踊に入る。その歌、

あたらうき世はなま木になたしやとなふ、おもひまはせはきのとくやなふ

あたらおくにはゆの木にねこしやとなふ、おもひまはせばきのくすり

よどの川せの水くるまたれをまつやらくるくると

ちややのおかゝにまつたひそはゝいせへ七度くまのへ十三度あたこさまへは月まへり

茶やのおかゝに七つのれんぼよなふ、一つ二つはちはにもめされよなふ、のこり五つはみな

れほしやなふ

風もふかぬにはやとをさいたなふ、さゝはさすとてとくにもおしやらひて、あたらつれなの

きみさまやなふそなたおもへばかとにたつ、さむきあらしも身にしまぬ

次に一本には、こゝで茶屋のおかみをひき立てゝ踊る、時に貴賤の中から物ずきに見える女を引き立てゝ踊らすので僧も法師も打つれて、恥も人目も打ち忘れ、芝居も棧敷も踊つたと書い

てある。この茶屋のおかみは男が女装して踊つてゐるのである。阿國の扮装は華美な男装であつた。その様子は

おくにがそのひのいてたちには、はだにはくうばいのこそでをき、うへにはごふくの花やかなりけるこそでを、あかぢのきんらんのはをりにもよきのうらをうちたるをきて、むらさきのすこきおひをむんずとしめ、ひしたかのじゆすをくびにかけ、きんつばのにしやくなるしらさめさやのかたなをさし、きんのはりさやの二しやくはかりなる大はきざしをはねさしにさしこなし、こしのさけものなに〳〵ぞ、なしちまきゑのいんろうに、こんぢのきんらんのおうきんちやく、きんのへうたんとりまぜて、くすみてさげしありさまは、こまいづるほどにそみへたりけるがあみかさまぶかにひきかつき(下略)

右の様ないでたちで、阿國は山三、猿若茶屋のおかゝ諸共にかぶき歌を唄ひ踊つた。この間問答があり、猿若とおかゝとの間にもあつて、痴態を盡せるものらしい。

こゝで淨瑠璃もどきに移る。亡靈お國に向つて、右の歌は既に古くさき歌だから、めつらしきかぶきをちと見申上う。いまのほどはじやうるりもどきといふをうたひ申候、さらばうたひてきかせ申さん

とこゝから又一變する。その歌、

我が戀は月にむらくも花にかせとよ、ほそ道のこまかけておもふそくるしき

やまをこへ、里をへだてゝ人をも身をも、しのばれ申さん、中々にうたにふしとはおもひ

候へと、それふくふへはよひのなぐさみ、こうたは夜中のくちすさみとよ、あかつきかた

におもひこがれて、ふくしやくはちは、君にいつもそうてふ、別て後は、またあふしき、

はるさめのしだれやなぎの、うちしほりたるを、見るにつけても、このはるばかりと世の

中の人とちきらは、うすくちぎりて、すへまでとげよ、もみぢはをみよ、うすひかちる

が、こきそまつちる、ちりての後はとはすとはれす、たがひにこゝろの、へだたれぬれ

は、おもふにわかれ、おもはぬにそふ、なさけは大事のものかの

これが濟むと、かぶき踊も時過ぎてとなつて阿國亡靈の分れの段となる。分れを惜んで名古屋

も歌へや舞やと亂舞すれば阿國も名殘を惜んで又一節踊る、「とゝろ〳〵となる神も、おもふ

なかはよもさけし」とばかり亂調である。そこで彌々分れて亡靈を木幡伏見迄も送るといふこ

とになる。（こゝの本文は前に出てゐるから略す）そして最後の結びは、

よく〳〵物をあんずるに、此おくにと申は、かたじけなくも大やしろのかりにあらはれいで

たまひ、かぶきおどりをはじめつゝ、しゆしやうのあくをはらはんため、かゝるかぶきの一

ふしをあらはしたまふばかりなり、あらありがたのしだひかな〳〵

これで大全である。

山内一豐の妻

山内一豐の妻は小學讀本に有名なる馬代金を夫に與へて他日その出世の緒口たらしめたといふ賢夫人である。戰國の世、武士の妻たる者が心得べき家政の整理者として名譽を擔つて、天晴れなる名婦人と仰がれた。依つてその傳記をさぐると、夫人のことは舊記（土佐國群書類從所收）及び山内一豐夫人若宮氏傳に詳しいから、その他の諸書を補ひつゝ、これらによつて讀むとしよう。

夫人は弘治三年の生れ。父は江州淺井家の臣若宮喜助友興、母は石川小四郎某（法名伯養）の女である。某年、父友興戰歿して孤兒となり、母と共に母の姉婿なる不破市丞重純の許に至りて養育され、天正のはじめ山内一豐に嫁したといふ。つまり彼女は幼くして父と死別し、母と共に伯父のもとに寄寓し、成人して一豐夫人となつたといふわけであるが、尙舊記には更に一說を附加してゐる、夫人は天正のはじめ山内家に來り、一豐の母法秀（一豐の父盛豐の夫人）の侍女であつたのを、後一豐が娶つたのであるとも傳へてゐる。舊記の筆者は「此說より所も

なく、いぶかしき事なれと人のかたりしまゝを記し置ぬ」と斷つてゐる。藩士が主家の來歷を書くのであるから或は曲筆も止むを得ない所でもあらうが、兎も角かゝる一說を附加する所に妙味があるといへばいへよう。

彼女が嫁したのは、未だ小身の時よりの事であるから非常な艱難を共にした。それも凡て一豐の爲にのみ深く心を用ひて頗る內助の功があつた。一豐は數々の戰功を立てたが、勿論それは一豐の智勇の勝れてゐたが爲ではあるが、又一面には夫人の內助の功を沒する譯にはいかないと舊記は書いてゐる。

然らば當時の一豐はどんなであつたか、寬政重修家譜や、一豐公御武功附御傳記等によつて見やう。一豐は天文十四年、尾張羽栗郡黑田御土居に生れ、小字辰之助、次で伊右衞門と改めた。父は但馬守盛豐で、その三男だつた。彼は十二歲の時夜討をかけられて一豐の父と兄とは禍を家つたが、その時母法秀院その他弟や姉妹と共に危くのがれて、同國岩倉城織田伊勢守信安に賴つた。然るに永祿二年には信安は織田信長に亡されたので、一豐（時に十五歲）は一族と共に信長に屬し父盛豐の從弟たる同國苅安賀城主淺井備前守賢政に依り、程なく遠緣に當る同國松倉城主前野庄右衞門長泰の許へ移り、牧村兵部大輔政倫に乞はれてその家に寄寓した。

この牧村家にあつて年十六ながらも永祿三年には軍功を表はして居る。この年一豐は山岡對馬守に兒小姓として仕へたが、この對馬守の父道阿彌が一豐の智あり勇あるに感じて近習となし、二百石の作米を與へることとなつた。

元龜元年信長朝倉左衞門督義景を手筒山城に攻め、進んで金崎城を攻めた時、一豐は城の殿將三段崎勘右衞門爲之と取り組み拔群の功を立て、頗る信長の感悅にいつた。而して天正元年牧村氏取持にて、江州長濱城主羽柴秀吉の幕下に屬し。卽ち同國唐國にて四百石の知行をうけた。時に年廿九歲である。天正のはじめ一豐夫人嫁すとあるから正にこの頃のことであらうから、一豐は四百石取の小身者であつた。かくして一豐は幼きより父に死別して諸家を賴り、苦勞を積んでこゝ迄來たので、その身の不運は夫人若宮氏と甚だ相似たる所が多いのも面白い。然しその後の一豐の出世振りは實に目覺ましく、同三年五月には三河長篠役に秀吉に從つて功があり、五年には播磨國內に於いて二千石の知行を與へられ、同六年三月よりは秀吉に從つて播磨三本城に別所長治を攻めて一番乘りの高名を擧げ、九年六月の秀吉の因幡國鳥取城攻めには毛利氏の後卷に備へんがため土居を普請することを勸め、十年秀吉進んで毛利氏と對陣するや、卽ち黃母衣衆の一人として大いに軍功を積み、六月備中國高松城水攻めには堤普請をして

ゐる。かくの如く度々の戰功によつて、同年九月播磨國印南郡に於て五百石の加增があつた。所が天正十年に本能寺の變あつて信長弑せらるゝや、逆臣明智光秀を倒して秀吉は彌ゝ天下第一になつて以來、一豐もその臣としてめきめき立身をはじめ、十一年閏正月、秀吉に從つて伊勢國龜山城に瀧川一益の將佐治新助を攻めた功により、八月には河內國交野郡に三百六石餘加增があり、更に十二年には近江國高島郡長濱に於て五千石を與へられ、十三年六月には若狹國西懸を與へられて一萬九萬八百餘石を領して高濱に住し、遂に萬石以上の知行取となつたわけだ。次いで同年八月には秀吉の甥秀次が近江國に封ぜられたのでその老臣となり、閏八月西懸を轉じて近江國北郡を與へられて二萬石を領し、長濱の城に移り、別に一萬石の地を預かり、三萬石の軍役を勤め、實に着々として家を興してゐる。その後十六年四月後陽成天皇聚樂第に行幸の時從五位下對馬守に任じ、十八年九月には秀吉の小田原陣にはその戰功により遠江國掛川五萬九千石餘に封ぜられ、更に十月には同國一ノ宮邊一萬千九百餘石の支配を附託された。その後文祿元年秀吉の朝鮮遠征を起すや、秀次に隨身して京都聚樂第に詰め、その後伊勢遠江の地九千石の加增をうけてゐる。而して同四年關白秀次罪せられると共に又遠江に於ける闕地八千石を加へられた。かくて秀吉慶長三年薨じた後、五年七月家康が上杉攻めの兵を起すや、

之に從つて東下し、八月福島正則等と共に西下して岐阜の城兵と新加納に戰ひ、九月の關ケ原の合戰には、堀尾忠氏と共に大垣の城兵を拒いだ。同年冬、この功によつて土佐國二十萬二千六百石を與へられ、高知山城に移り、八年三月從四位下土佐守に敍任し、十年九月廿日高知山に急逝した。法名を大通院殿心峰宗傳大居士と云ひ、年六十或は六十一と云ふ。

以上が一豐の一生である。戰國の世に盛なる武勇を以て、信長、秀吉、家康と巧みに歷事して遂に土佐侯となつて大成した。この成功について諸書は筆を揃へて夫人若宮氏の內助の功を讃美するのである。試みに若宮氏傳を見れば「夫人の大通公に嫁せられし頃、公はまだ小身にてありければ、萬のこと不自由がちなりしを、夫人拮据黽勉して、一家の經濟を維持したることは言ふに及ばず、其の後とても夫をして內顧せしむることなく、之を輔佐して、一心に忠勇を勵まし、身をたて家を起さしめたることは、人口に傳播せる、馬代金を夫に獻じたること、及び大阪の事情を關東なる夫の許に報知したることのみには限らざりしならん、今より其の人となりを想像するに、貞淑にして、善く婦道を守り、勤儉にして善く家政を執り、加ふるに聰明にして識見高く、善く大體を辨へたるかたなるべし」と絶讃を呈してゐる。凡そ一家の主婦としてこれ以上の讃辭はない。

又確かにそのやうな賢婦人であつたらしい。文筆には仲々秀いでた所があり、現に山內家に藏せられてゐる書狀など如何にも悧發な女性らしい風格を備へてゐて、達筆である。又裁縫も上手であつたといひ、次の如き逸話もある。或る年、江州長濱に在城の頃、唐織の卷物類のきれを集め縫ひ合はせて小袖に仕立てたことがある。その手際のよきこと人目を愕かしむるばかりだつたので、親しき者より一豐にすゝめて秀吉に見參にいれた所、大變な御感にて聚樂へ上仕の者にも見せ、後には禁裡へ献上されたといふ。頗る名譽な話である。彼女はこのやうな藝術的才能を持つてゐたやうである。どうも色々と頭のはたらく人であつたらしい。

然し彼女は不幸にして子運に乏しかつた。一豐の跡目をついだ忠義は、一豐の弟修理亮康豐の長男であつた。然し一豐と夫人との間にまるで子供が無かつたわけではない。一女與禰姫といふのがあつた。一粒種だつたので頗る寵愛してゐたのを不幸にも、江州長濱に居た折のこと、天正十三年十一月廿九日大地震があつて城が崩れた時、當時六歲になつてゐた與禰姫は難に遭ふて死んだ。親の歎きは一方ならぬ事であつたといはれてゐる。その後城外に藁畚に短刀一腰をそへた棄兒があつたのを五月茂衞門をして拾はしめて養育した。これは成長の後出家せしめて與禰姫の跡を弔はせんといふ考へであつたので養子として育てたのである。本は北村十

右衞門正雄といふ者の三男だつたと云ふ。後京都花園の妙心寺南化國師の弟子となつて出家し、湘南和尚といふのが彼である。

湘南和尚佛門に入りし事情には更に一説を擧げてゐる。それによると、夫人棄兒を拾ひて實子の如く慈しみ深く育てたので、一豐も子供のなきことなればこれを幸とし、後々は養子にもしようとの考へもあつたものか、夫人より養子のことを話しても、さつぱり受けないで、年を經たから、そこで夫人は此子があつては惡からうと思ひ、扨てその子に向つて、今まで樣々恩を厚うして育てゝきたことだから、どのやうなことでもいやとはいはないだらうねと尋ねた。その子は、何として背きませうやと答へたからそこで夫人がお前が此處に居たのでは爲にならぬ事がある。身をさけて貰ひたい。何處へなりとも行て僧ともなるがよいと守刀を取つて、髮のもとゞりを切つて黃金百兩を與へ、これで學問をするがよいといつて、家を出したのである。これが後に湘南和尚となつたといふ。これで一豐の下心もせん術もなくなつて、竹嚴公（忠義）を養子とゝたといふ。舊記の筆者は何のよる所もなく、いぶかしき事にこそと書いてゐる。その通り全くどうも怪しい話で、一豐は夫人の顏色ばかり伺つて居る意氣地なしに見える、まして一家の跡をつぐべき大事な人物についてこのやうな發言權を遠慮するなどといふこ

とは全然考へられぬことであるから、これは言葉通りいぶかしき事である。恐らく事實はこの裏で一豐が忠義を立てんとするのに對して、棄兒を寵愛してゐてそれに何か異存でもあるかのやうに思はれることを憚つて夫人は棄兒をして家を去らしめたと見る方が至當であらう。然るにこゝに若宮氏傳に湘南和尚の素生に關する一説が載つてゐる。それによると事情がまるで違つてきてゐる。前の一説では大變察しのよい物のわかつた婦人である一豐夫人はこゝでは、世間一般の例にもれず嫉妬燒きの相當陰險なことをする婆さんで、次のやうな次第である。

一豐には一人の妾があつたがその腹に男子が生まれた。一豐は夫人に對して憚かる所でもあつたのかその事を匿して告げなかつたが、いつしか夫人の耳に入つたので、夫人は誠に本意なきことゝ思つてゐた。或日佛寺に參詣にいつた歸へりに妾の生んだ嬰兒をつれ歸り、扨て一豐に對しては、「今日佛參に參つた途中に棄兒を見懸け、不憫なことゝ思つて連れ歸へりました。わたしには子もありませんから養育して退屈凌ぎに慰めたいと存じますが如何で御座いませう」とちくりとばかり性惡の根性を出してゐる、一豐も事情を知つて、如何思はれたであらうか、然しさりとて之を拒むべきやうもないので、然らば養育したらよからうと申した。是が湘南和尚であるといふと書かれてゐる。この話も見樣によつては一豐が遠慮していひ出し兼ねて

ゐたのを察して養育したやうにも思はれて夫人も賢夫人となるかもしれないが、かゝる大事な血統をつぐ者を出家せしめたりしてしまつては山内家にとつては、とんでもない夫人となる。だから湘南和尚となつてゐる以上は、この後の二つの話は前の舊記の說く所程採用しにくいとしなければならない。

湘南が南化についたといふには因緣がある。一豐は既に禪を信じ、南化國師に歸依してゐた。土佐國群書類從拾遺十二所收の慶長九年十年記錄切に慶長十年一豐が死んだ時大通院殿心峰宗傳大居士の法號、院號血脈授戒等は凡て生前に於いて南化國師より傳授されてゐたから、頸にかけて常に著用したゐたと書いてある。そのやうな次第だから夫人も一豐と同じく深く南化玄興國師について禪法に歸依してゐた。その緣によつて湘南も亦南化の門に入つたのである。

一豐の死後養子忠義跡をついでから、夫人は京都に出たいといひだした。夫の跡を弔ふ爲に禪を修めたいといふ念願からでもあつたであらうか、或は幾分養子との間に氣まづい思ひでもあつたのか、ともかく京都行きにはこの忠義の父修理亮康豐はひたすら思ひ留まるやうにとめてゐるが、承知しなかつた。そして慶長十一年三月七日土佐を出發した。仕方がないので山内

內記、山內將監、山內勘解由が供して甲浦まで見送り、こゝより乘船して伏見の邸に上陸し、次いで京都桑原町に屋敷を造つて六月京都に移つた。

夫人は京都に於いて更に禪の歸依を深めたと見えて、道歌數首を南化國師に見せてゐる。國師それに奧書を書き示したのが妙心寺大通院に珍藏されてゐたが、今は大通院も廢寺となつたので所在を失つたといふ。その歌は、

すなはちの心佛を尋れば無念無相の所にぞある
三界も唯一つそと聞時は地獄は人の心にぞある
生死あるそのたましゐの源は四大にして靑天とあり
父母の生れぬさきは知らぬなり知らぬ所をこくうとそしる
釋迦みろくぬいそとみれば現在は只すいめんのうちにあるもの
しきくうのきやくを切て無の一字衆生道より虛空にぞゆく
悟りへて迷ひの雲の晴ぬれば眞如□月を見るぞ嬉しき

その後に南化の奧書がある。

御歌いづれも〳〵きとくに候、此うへは釋迦みろく一たいにて候、やかてだうかうかきて

まいらせ候。

夫人は元和三年十二月四日卒した。年六十一歳で、見性院と呼ばれた。湘南は幼時より夫人の深き恩惠で人と爲つたので、和尚も亦夫人の子供のやうな氣持がして、夫人が京都に出てよりは殊に孝養を盡した。歿後十七回忌には見性閣を作つて、開此葬地、築一宇堂、號之見性閣者、全要酬慈母恩愛之一也。と書いた。これは寛永十年のことである。

ついでに湘南和尚の事蹟を書いて置かう。一豐公武功付御傳記に、慶長元年湘南和尚（御童名拾）正法山妙心寺南化國師の弟子侍者となり釋門に入り御入寺同三年喝食と成り給ひ、同五年剃髪して宗化と號す、後妙心寺塔頭に一豐公一寺を建立す、南化の血脈を受け大通院と號す、暫らく南化院に入る。宗化は未熟なりしなり。後年單傳和尚法を傳へ大通院と吸江寺とを兼帶すとある。「正法山誌」に大通院の由緒が載つてゐるがそれによると大通院は舊一柳伊豆守が建立したことは南化和尚が方丈棟梁文に詳記されてゐる。後湘南和尚が住んだが。湘南は土佐州大守の子であるから、一柳之を憚つて退いて檀主とならなかつた。今其院牌名に大通院殿と云ふは土佐太守の先祖である。蓋し一柳退いた後土佐太守の先祖を以て大通院殿と稱するのみと認められてゐる。だから湘南は棄兒で養子となつたといふのと實子であつたといふのと矢

張り二說が流布してゐたことが知れる。

扨て以上により一豐夫人若宮氏の事を概括すれば、よく家政を守つて內助の功ある頗る付の賢婦であつたといふことになる。そうして馬代金、關ヶ原役の時の玉章問題がその代表的な事件として婦道の鏡と傳稱されてゐる。それ故この事件を詳論することによつて、この稿を終へやう。

馬代金の話は常山紀談に詳しいからそれを揭げるとしよう。

常山紀談、卷四、山內一豐馬を買はれしこと。山內土佐守一豐其はじめ織田信長に仕へたりけり。東國第一の駿馬なりとて安土に牽來てあきなふ者あり。織田家の士是を見るに誠に無雙の駿足なれど、價あまり貴とくして求むべき人なく、いたづらに牽きて歸らんとす、一豐其比は猪右衞門といひしが、此馬望に堪かねたれども、いかにも叶ふべからざれば家に歸り、身貧きほど口惜しき事はなし。一豐奉公の初にあつばれかゝる馬に乘りの家形の前に打出べき物とひとり言しければ、妻つくづくと聞きて其價はいかばかりにて候かと問ふ。黃金十兩とこそいひつれと答ふ。妻聞てさほどに思ひ給はんには其馬求め給へ。其料をばまゐらすべしとて鏡の奩の底よりとり出して、一豐が前にさし置きたり。一豐大におどろき、此年

ごろ身貧しくて苦しき事のみ多かりしに、此金ありともしらせたまはず、心強く包み給ひけん、今此馬得べしとは思ひもよらざりきと且つは悦び且は恨む。妻仰の旨ことわりにてこそ候へ、さりながらこれはわらは此家に參し時、父此かゞみの下に入給ひてあなかしこ、よの常の事にゆめ〳〵用ふべからず。汝が夫の一大事とあらん時にまゐらせよと戒たまひ候き。されば家貧しきは世の常なれば堪忍ても過ぎぬべし。誠に今度京にて馬揃あるべしと承れば、此事天下の見物なり。君も又つかへの始なり。よい馬召して見參せさせまいらさんと存候てこそ奉れといふ。一豐悦ぶ事限なく頓て其馬求めてけり。程なく京にて馬揃ありし時、打乘りて出しかば信長大におどろき、あつぱれ馬やとて事の由を聞給ひ東國第一の馬遥にわが方にひきて來りしを空しく歸さんは口をしき事ぞとよ。それに年比山内は久しく浪人して有りしと聞く。家も貧しからんに求得たるは信長が家の恥をすゝぎたるうへ、弓箭とる身のたしなみ是に過たる事やあると感じて、是より次第に用ひられしとぞ」

これは誠に機宜に適した内助ぶりで、正しく一家を守る者の婦德の龜鑑たるに相應する逸話である。然しこの敍述は先述の夫人及一豐の出世目錄と全然喰ひちがつてゐることに氣付く。「一豐奉公のはじめに」とか「年比山内は久しく浪人してありける」がとかいふが、京都に於

ける信長の馬揃があつたといふのは天正九年二月のことであつて、既に一豐は永錄二年より信長に屬し、元龜元年信長に從つて戰爭までしてゐるし、天正元年には長濱で秀吉の家來となつて四百石をとつてゐる。それに夫人が取り出した十兩といふ黃金は夫人が嫁ぐ時父より受けて訓戒迄されてゐるといふが、夫人は幼くして父と死別して伯父のもとに養育された身である。だから父である筈はない。では伯父の誤か。それに黃金十枚とは大金である。當時戰國の世に婦人など眼中になく、すべて政略結婚をさせられて絶對服從であつた。そのやうな女に、しかも伯父がかゝる大金を持參金などに與へるであらうか。それに嫁ぎ行く先きが大家ならともかく、未だ小身者ではないか。だからその「父」伯父の誤かと考へても矢張可笑しい。それに馬揃の天正九年には既に一豐はその五年に播磨國で二千石を取つてゐて、それ程貧しい家庭とはいへない。この逸話では、一豐は當時安土城下で祿五百石を取つてゐたと一般に云はれてゐる。若しそうだとすれば貧困も無理はないと思ふが、そのやうな小身の頃といへば秀吉についてゐる。それに馬揃とは年月がまるで合はなくなつてくる。だからこの常山紀談に揭ぐる文章は全然信ずることの出來ないもので、恐らくは荒唐無稽のものであらう。只一つ一豐公御武功附

御傳記に播州以來御騎馬御身上を超過すといふ記事があることである。それ故この天正九年の馬揃の頃に一豐は身分以上の名馬に騎つてゐたことが知られる。これが信長の目に止まつたと考へれば考へられる。大體信長は大なる戰術家で永祿三年桶狹間で、今川義元を奇襲して大捷を得た原因は彼が當時比類なき騎馬隊を組織立つて使つてゐた爲である。未だその頃では騎兵を使ふことには目がとゞいてゐなかつたのに、信長は賢明にも驅使したのである。だから信長と名馬とは深い意味合ひがあるのであつて、信長の士卒が名馬を欲するのは當然である。だから右の如き逸話が揑造されても語りつがれるのであらうと思ふ。それ故若し一豐の名馬に何等かの夫人の助けがあつたとするならば、夫人が儉約してあつた貯蓄によつて身にあまる名馬を買ひ得たのであらうと思ふ。それを土佐藩士が後世藩主をあがめんが爲に揑造した逸話ではないかと疑ふのである。

然らば次の關ヶ原の役の際に於ける玉章問題はどうか。慶長五年奥州の上杉景勝は江州の石田三成と氣脈を通じて反德川の氣勢を示した。家康はよくその間の事情を察したが、遂に上杉征討の爲に六月十六日大阪を發して東下し、七月廿四日下野國小山に着陣した。山内一豐もその旗下に從つてゐたが彼は先陣を承つて秀忠以下黑田福島と共に宇都宮に在陣した。この時石

田三成等關西にあつて德川氏追討の旗を擧げたことが加賀の前田利長次いで伏見城代鳥居彦右衛門元忠より注進があつた。これは關原軍記大全、或は關原始末記によつて知られる。この注進によつて家康以下關西の變を知り、軍を返して三成等と關ヶ原に戰ふに至つたのであるが、この注進の先着について、土佐物語に一豐夫人のことが載せられてゐる。つまり當時大阪表にゐた一豐夫人より一豐宛に來た報導によつて始めて關東軍は事の眞相を知つたといふのである。土佐物語によると、家康の留守に乘じて三成等諸國の軍勢を集めた。その催促の廻文が大阪の山内家に廻つて來たので夫人は大いに愕き、この廻文に一通の手紙を添へて文箱にいれ、田中孫作といふ者を飛脚にして關東へ遣はした。孫作は甲斐々々しき者なれば、夜を日についで急ぐうちに伊吹山で盜賊に會つて衣裳刀脇指まで剝取られたが、大事の使だからとて何等抵抗もせず、文箱を持つて裸で逃げ延びた。途で老人に會つたので是天の與と取り押へて衣類刀を取り着して、小山へ着いた。一豐はその時諸川の町屋に宿つてゐたが、夜中門を叩いてその文箱を渡して大阪表のことを大體報告した。そこで一豐は野々村右衛門九郎丑政を使として、その文箱を封の儘小山なる家康に捧げた。上方騷動に就いて大阪の妻から文箱が到着したが、嫌疑を憚かつて封の儘差上げると云つた。家康は一豐の信實篤厚の忠義を感心し、扨その文箱

を開くにかの廻文にそへて女の文があつた。

「老中奉行達俄に反逆を企て、人數催促の廻文來り候程に、田中孫作に持たせ差下し候、常常の御志に候へば、申す迄もなく候へ共、上様へよくよく御忠節遊され候へ、構へて〳〵我身事、御心苦しく思召候まじ、叶はぬせんには自害を遂げ、人手にはかゝり候まじなど一紙の間に千萬の心緒を述べてぞ書かれける」

「此注進を始として、諸方より早馬を打つて急を告ぐ」と認めてある。この一言は全く嘘であることは確實な史料には全然見えぬことでわかる。大體この「土佐物語」は山内氏の功績を顯さんとて書かれたる俗書であつて、殊更に扮飾したものであるから到底信用しがたい。當時大名の妻子從類は大阪にあつたので、主成等もこれらを人質にして關東に從ふ大名を引き寄せんと謀つたことは確かで、細川ガラシヤの悲劇を起すにも至つたのであるから、殘された妻子から夫々飛脚をその大名に飛ばしたことはある筈である。だからそのやうな事の一つであつたのであらう。藩翰譜でもこの事を傳へてゐるやうだ。

「慶長五年の秋、德川殿奥の景勝中納言御追討の時、一豐先陣に在て、下野國宇都宮に至る。かゝる所に上方又軍起り、國々の飛脚到來して急を告ぐ、されども未だ事の體分明ならず、

こゝに來れる大名小名妻子類從悉く大阪にあり、人々の周章斜ならず、一豐が妻、さるさかしき人なればしかるべき侍くだせしにぞ、精しき事は知れにける」

この逸話が事實としても精々右位の程度にしか肯定は許されない。大體藩士にしても主家の名譽を顯揚したい爲に色々苦心する所がある。この戰國末期に立身出世した大名など、云はゞ野武士や鄕士等名もなき者の成り上り者である。今で云つたら成金だ。百姓の小倅豐臣秀吉、桶屋の息子福島正則といつたやうなもので、氏の素性のといつたつてある筈のものではない。だからその後亂平らいで大名も身が落つくと、何とか身分のいいことを吹聽して由緒ありげに見せる虛榮のために大名の家譜創作が行はれだして、その方の專門創作家と見られる者まで世に出て賣つて歩くといふ始末であつた。だから藩士が主家の傳記揑造などありうちのことで、右の如き注進第一着逸話を作り出したと見るべきである。恐らくこんな事は全部嘘だつたのだらう。前の馬代金の話も同樣である。現に、その舊記にさへこの兩逸話が載つてゐない所を見てもわかる。寛政重修家譜にはこの注進玉章問題には次の如き記載がある。

「時に大阪五奉行ひそかに一豐が妻の文を廻文にそへて贈る。一豐大いにいかり封を披かずしてかの狀二通を御覽に備へしかば、深くこれを感じ給ふ云々」

若し事實とすれば、かの逸話よりこのやうな事の方がありそうである。一豐は秀吉によつて一家を成した男である、秀吉の恩を忘れる筈はない。三成はこゝをつけねらつて右の如き術策を弄しないとも限らない。しかしこれとても何等確實な史料があるわけではない。

右によつて名婦人の俤を傳ふるといふ有名な二つの逸話がその實案外疑はしいといふことを知つた。それ故我々には「一豐の妻」に對しては又新しき眼を以て見なほす必要があらうと思ふ。彼女は賢夫人ではあつた。そして夫と共に艱難を凌いだ。それは事實である。然しそれは何も彼女にして出來た獨得なものではない。戰國の世にどの大名の妻と雖も經てきた鹽の味でなければならない。

結論に到着した。彼女が土佐を去つて京都に出た時の模樣を考へたりすると案外意地の悪い女のやうにさへ思へる。而して同時に意志の固い點に於て婦道の鑑と仰がれるべき人物ではないかと思はれ、上記の二逸話の實否を別にしても、武人の妻として當時有數の女性であつたであらうことを想像し得る。

細川ガラシヤ

ガラシヤは基督教信者としての名前で、本名は玉姫、細川忠興夫人である。夫人は明智光秀の次女、光秀は一個の牢人者に過ぎなかつたが中々の利け者で、信長に事ふるや一躍して大々名となり、丹波近江の國主となる、その立身出世は柴田勝家の如きをさへ驚かしめる程であつた。細川家は足利時代以來の門閥の家柄であつて、藤孝卽ち幽齋は文に秀でゝ古今傳授に名高く又政治的才幹もあつた名門である。忠興はその子であるが、信長が間に立つてお玉は忠興夫人となつた。時に天正七年、彼等同年で十七歳の時である。

當時信長は中國地方攻略を志し、山陽に秀吉を遣はし、山陰に光秀を立てた。明智氏は近江丹波にあり、細川氏は山城に居たので、その婚姻は信長の意中より出た斡旋だつた。信長は光秀に書を送つて、先づ光秀の軍忠を稱し、且つ與一郎忠興が器量秀でゝ今後武門の棟梁たるべき者と讃め、それ故この結婚は隣國といひ剛勇といひ尤の緣邊、幸の仕合であると書いてある。

忠興は誠に異色ある大名で、十一歳にして槇の島合戰に名を擧げ、天正五年十五歳で河内國片岡城の攻撃には先登を切つてゐる。後數々の武功を表はしてゐるが唯だかれは剛勇であるばかりではなく、父幽齋の子に相應して、後には茶道の奥義を極めて千利休の高弟となつてゐるし、また策ある所の智者で、秀吉家康に重んぜられてもゐる。然し性格的には意地惡で且つ頗る癇癪持であつた。つまり非常に激げしい性質の男だつたらしく、一旦の怒のために手打にされた家來も尠くなかつた。

忠興は夫人を熱愛してゐた。夫人は夫人で流石に光秀の子らしく、怜悧にして氣性勝れた婦人であつた。只管夫の御機嫌を伺つてゐるやうな自己のない女性ではなかつた。一種の精神力を以て自己を生きた。こんな話が傳へられてゐる。或時食事中に屋根から仕事師が庭先に落ちた。忠興は不屈者とばかり直ちに首を打つたが、その首を食事してゐた夫人の食膳の上にのせた。夫人は動ずる色もなく食事をつゞけてゐた。忠興も呆れて、お前は蛇の化身かといふと、夫人は鬼の女房には蛇がふさはしいでせうと冷然と答へたといふ。眞僞の程はわからないが、忠興のはげしい性行と夫人の手剛い性質とは矢張り何處か「うま」が合はなかつた所があつたやうである。然しこの怜悧にして澄み透つた性格の故に彼女は數奇な運命を凌ぐことが出來た

のであらう。

思はざるの運命は先づ本能寺の變として起つた。天正十年明智光秀は主君信長を本能寺に襲つた。その時細川幽齋に書を送つて、この大事を爲すも只忠興などの前途を慮つた爲である。差し當つて攝津一國を宛て置く故その方へ參れと云ひよこした。戰國の世の末と雖も光秀の破格の立身も一に信長に依存したことを思へば、主殺しの恐るべきことは云ふ迄もなかつた。幽齋父子は光秀の命を斥け、多年信長の恩を思つてその死を弔つて剃髪し、夫人は逆賊の女なればとて離別して上三戸野山中に幽閉した。結婚早々三年だから早くも夫人には逆睹し難き運命の變轉が來たのである。

時に中國にあつた羽柴秀吉は直ちに引き返して、明智勢と山崎に戰ひ、光秀は敗れて山科で土民の竹槍に斃れた。細川夫人の姉の嫁いだ明智光忠は近江坂本城で自殺し、妹の嫁した織田信重は信孝に擊たれて戰死、且つ病臥中の弟光廣は父叛逆の報を聞くや病勢革つて死ぬなど、夫人の肉親は一族汚名を天下に曝らして沒落した。そして夫人自身は夫と離れて幽閉の身となる。剩へ秀吉は光秀を誅するや明智の支族を求めて悉く之を誅戮するといふ噂が立つてきた。哀れ昨日迄の身の上、今日は夢と化し去つた。家人は捕へられて恥辱を見んよりは寧ろ自害を

すゝめたが、夫人は、嫁しては良人に從ふが婦人の道である。今自ら死しては孝道は立つが貞節に背く。敵が現はれてからでもおそくはあるまいと云つたとつたへる。

秀吉は世の苦勞を知つてゐた。細川父子の苦衷を察し、その忠烈を諒として敢へて夫人を罪しなかつたばかりか、更に忠興を說いてその幽閉を止めしめた。かくて夫人は萬死に一生を得て再び忠興の許に歸つたのである。

はからずも一陽來復して、後忠興の榮達と共に幸多き生活に入つたわけであるが、然しこの本能寺の變及それに伴ふ一族の沒落は痛く夫人に打擊を與へたらしい。彼女がキリスト教を信奉するに至つたのもこの精神の打擊に依るものと思ふ。

當時移入されたばかりのキリスト教にとつては、かゝる大名の夫人が改宗したことは特筆すべき事項であらねばならぬ。從つて夫人の傳記は却つて切支丹關係文書に誌される所が多い。又婦人の身を以て新宗教に投じた彼女は或る意味からいへば、一種の新しい女であり、思想的先覺者でもあらう。こゝより云へば夫人はキリスト教信者であることによつて我が文化史上特異な位置を占むる者といへる。依つてこゝに切支丹大名記、日本西教史によつてその改宗の模樣を述べて見よう。

忠興の茶道の友人に高山右近といふ者があつた。彼は熱烈なるキリスト教信者で忠興にこの新教を物語つた。忠興は佛教を信じてゐたから改宗する心はなかつたが珍らしき儘に右近の說を夫人に傳へた。これが夫人改宗の動機となつた。夫人は强く感動し、その腰元達と共に、爾來何ものにもまして大なる望みは、切支丹寺院を訪れて宣教師の說教をききたいといふ事であつた。秀吉の九州征伐に忠興附隨したのがよき機會となつて、一日秘かに腰元二三女を伴つて大阪玉造の邸の裏門より出でゝ教會堂を訪れた。

神父セスペデスは夫人を慇懃にもてなし、日本人なる神弟ビンセンショに任せた。彼女は種種の教義を聞くや、異常なる感銘のもとに洗禮を受けたいと希望した。然し神父セスペデスは秀吉の側室ではないかと疑つてその要求をば容れられないと斷つたので、夫人はその時は受洗することが出來なかつた。

當時夫人は嚴重なる監視の下にあつて、再び教會を訪れることが出來なかつた。止むなく腰元を遣はしてその疑問を說明して貰つたりして滿足せねばならなかつた。夫人の信仰は彌々燃え、腰元十六人は遂に皆洗禮をうけるに至つた。然し彼女は外出が出來ない爲にさしも熱望してゐた受洗が得られなかつたのに、時恰も秀吉は耶蘇會士に禁令を出したので、神父セスペデ

スは九州に引きあげねばならなかつた。今やこの期を逸せばいつの折にか洗禮を受けられよう。夫人は如何にもしてその目的を果したいと願つた。それ故神父セスペデスは腰元のマリアにその方法を授けて、自宅に於いて夫人に洗禮を受けしむることを許した。かくて夫人は信者の列に加はり、名をガラシヤともらつた。時に天正十五年八月の初めである。ガラシヤは又その子千丸にも洗禮を受けさせ、ヨハネの名を受けしめた。千丸は病床にあつたが受洗後間もなく本復したので母の熱心は更に深まつた。千丸は後に立孝と呼ばれた。

受洗後のガラシヤは、全く新しき思想の下に、恰も修道院にあるが如き生活をした。祈りと、「基督の模倣」その他の書物を讀んだ。

かくして彼女は立派な信者となつて、安住の信仰を得たのであつたが、忠興は九州より歸つて見ると、夫人が改宗してゐるのを知つて驚き且つ怒つた。彼は夫人に信仰を捨てよと命令し、腰元の鼻をけづり髪を剃つて追放し、その家老等を全部かへ、更に白刃を擬してガラシヤに改宗を迫つた。然し彼女は聽かなかつた。たとへ身は殺さるとも信仰はかへられないといつた。信仰は生死を超へてゐる。忠興もそれを如何ともすることが出來ないのである。迫害は更に激しかつた。夫人は苦しさのあまり神父オルガンチンに宛て一書を送つて、これ程のひどい

試練に會ふよりは寧ろ家を拔け出たいと歎いてゐる。オルガンチンは如何なる苦痛にも耐ゆるのが信徒であるとさとして、思ひ諦めしめたといふ。

折角信仰によつて精神の安住の地を得たと思つた彼女は、今度は一家の中に、夫婦の間に思ひがけぬ大きな苦痛が落されてきた。彼女の宿運は今や夫婦の間に鉾先が變つたのである。然しこの骨をもくだく苦練も少しづゝ融ける時がきた。その媒介になつたのは忠興の弟興元で、彼は義姉ガラシヤの德に動かされ、且つ高山右近との關係から、遂に大阪にて極秘のうちに洗禮を受けた。ガラシヤの喜びはいふ迄もないが、これがいい機會となつて、忠興も興元の諫言を容れて、それ迄辛らく當つてゐたのを寛大にするやうになつた。剩へ二人の女に洗禮を受けることを許した。その後文祿四年には三男忠利も受洗した。

ガラシヤの喜びの日がめぐつてきたのである。彼女は平和になつた一家にあつて敬虔な心を以てその子女に深き宗教心を教へることが出來た。忠興も、わけもなくキリスト教を排斥したのではないやうに思はれる。彼は大名であり、秀吉の持つ政治的意向を參酌しなければならぬ立場にあつた。だから耶蘇會士の禁止には從はねばならぬのであつたと思ふ。もともと忠興の精神生活は深かつた。自らは三齋と號し、茶道では千利休の高弟で、後世迄も令名ある人であ

る。だから彼はキリスト教に對して單なる浚分曉漢ではなかつたであらう。それ故今や機運めぐり來て妻子の宗教に寛大な處置を取るやうになつたのでもあらうか。日本西教史（佛人クラセ著、西暦一七一五年巴里出版）に彼のことを丹後公ジャコンと書かれてゐる。ジャコンとは現に細川家に殘る麝香といふ印の讀み誤かと思ふが、麝香とはヤコブといふ基督名であるかもしれない。ガラシヤは俄羅沙と書くからである。この麝香は父幽齋の印だといはれるから、幽齋亦信仰を持つてゐたとも見られる。そればかりでなく忠興も黑田如水の印と同樣に Tadaoquiといふのがある。ハイカラに一寸使つたものであるかもしれないが、何かこの細川一家にはこのやうな空氣が流れてゐたことが察知せられる。忠興の寛大な處置にいよいよ背景が見られるやうに思はれる。

然しこの信仰の世界に於いて、ガラシヤの運命に、今度は外部から暗澹たる暴力が襲つてきた。秀吉からキリスト教禁止といふ發令を見る事件が突如として起つたことである。

それは慶長元年イスパニヤ軍艦サン・フイリツプ號がマニラからメキシコへの航行中土佐の浦戸に坐礁した。そこで太閤は增田長盛をして積荷全部を沒收せしめた。艦長ランデチョウは烈しく抗議したが無効だつた。そこでサン・フイリツプ號沒收に憤慨した按針デ・ランダが我

が國を威嚇せんとして、イスパニヤ王フイリツプ二世の勢力を稱揚して、その版圖は全世界に跨つてゐるといつた。餘りに廣大な征服に驚いた增田は如何なる方法を以てかくも多くの國々を占領することが出來たのかと尋ねた。デ・ランダは、先づ宣教師が行つて說教し、軈て軍隊がその後を追つて新改宗者の助をかりて征服せしめたと答へた。これは單なる威嚇で、當時信用のあつたポルトガル人を疑はしめようとした策略だつたかもしれないが、この無謀な言動は、いたく秀吉を怒らせた。これ迄長い間新宗教に對して襲はんとしてゐた嵐がこゝで急に殺到することになつた。卽日秀吉はかゝる危險なる人々を逮捕すべき命令を下し、京都大阪のフランシスコ會並に耶蘇會士の住宅を取り圍ませ、同時に教徒の名簿を調製してその捕縛が始まつた。この事件は又はげしく信者を動かし、改宗せんよりは寧ろ死せんと殉教者の心持に迄却つて昂揚していつた。高山右近はじめ皆々死を決し、細川ガラシヤ亦處刑の時に着る衣を仕立てさせてゐる。彼女は苦辛して得た家庭の和樂も束の間で、今は全くこの信仰の爲に殉ぜんものと覺悟をきめなければならなかつたのである。彼女の運命は豫測を許さぬものがあつた。太閤は、イスパニヤ人なるフランシスコ會の宣教師六名、日本人の耶蘇會士三人、その下の切支丹二十人ばかりを投獄し、慶長元年十二月十九日これらの殉教者を長崎で磔刑に處した。その

數二十六人だつた。これが有名なる廿六聖者と傳へられるものであるが、太閤の新教彈壓はこれ以上には及ばなかつた。その爲に彼女たちは幸にして無事なるを得たのである。

かゝる危急存亡の時に際しても忠興は夫人に何等の處置を加へようともしなかつた。彼は眞に熱愛してゐた。彼等にあつてその夫婦間はどんなであつたかは書かれてゐないが、夫の苦悶にも心從ひ得ず、信仰生活にはいつてゐた夫人に對して、愛し切つてゐたらしい忠興の心の底にどんな淋しさがあつたかは想像される所である。大體忠興は激しい性行の人であり、また嫉妬深く夫人を監視したやうにも傳へられてゐる。彼が九州に出征する時家臣に命じて、夫人に一歩たりとも邸外に出ること又男兒に會ふことを禁じ、その無寥をなぐさむる爲に非常に多くの腰元を侍せしめたといふ。又陣中より和歌を送つて警めてゐる。

靡くなよわがませ垣の女郎女男山より風は吹くとも

といふのである。然しこれは必ずしも忠興の嫉妬とばかりはいへない事情があつた。當時秀吉は有名なる女色狩りで大名の妻にして優秀なるものにはあらゆる機會を以て挑んでゐたから、美くしい夫人を秀吉から保護したいといふ念願からであつたかもしれない。しかし三齋程の道を極めた者をして嫉妬の所業と呼ばしめるが如き振舞があつたといふならば、實以て彼が內心

の寂莫は察するに餘りがあるやうだ。

彼女は餘りにも氣丈夫で、妥協を缺く性情だつたやうだ。青白く、きりつと締つた口元が見えるやうである。秀吉からお召しが來た時、光秀は逆臣ではあつたが自分にとつては父である。秀吉は父を殺した。この父の仇に會ふことは出來ないと常に病氣を申立てゝ城中に入らなかつたと傳へられてゐる。これ程彼女はしつかり者である。彼女は理に通つた冷靜な女で出所進退を心得てゐた。この意味では彼女はよく日本婦道を心得てゐたといふべく、三齋が心配した程のことは無かつた筈である。それ故三齋は秀吉の女色狩りを避け得たものと思はれる。そうして彼女も亦、一度信じては宗教のために殉ずる覺悟の程であつたが、その運命は却つて、家の爲に壯烈な最後を遂げねばならなかつた。彼女の運命程わからぬものはない。嘗て細川家に嫁いだ時には明智氏との緣談で一家の繁榮になるかと喜ばれたのが、一朝光秀の叛に會ふや却つてそれによつて細川家は累卵の危きに曝された。幸にして危機を脫したと思へば、その精神の糧として信じた宗教故に今度は家庭內に動亂が絕えず妻として非常な苦練を經ねばならなかつた。細川忠興にとつて一種困まつた存在だつた彼女が、壯烈な死を遂げるや、却つて細川家を護つて磐石の安らかさに置くやうな功績となつた。人生の禍福正に測り難きなかに、細川

ガラシヤの一生こそは文字通りその體驗者である。その中を彼女は動ぜず憶せず一貫して生き一貫して死んだ。誠に偉とすべきであらう。

それ故こゝに彼女の最期を傳へて筆を擱くとしよう。

慶長三年秀吉薨ずるや、豐臣方の諸將朝鮮の役に疲弊せるに乘じて、德川家康の威望頓に榮え、こゝで豐臣の遺臣との間に軋轢を見るに至つた。石田三成等秘かに謀つて奥羽の上杉と謀し合はせ、慶長五年先づ上杉叛し、家康軍を率ひて關東に下るを俟つて三成呼應して關西に立つた。今や天下分目の戰である。この時忠興は家康に從つて關東にあり、夫人は大阪玉造の邸に居た　三成は家康附隨の諸將牽制の爲にその妻子を人質にしようと考へ、先づ手始めにガラシヤ夫人を大阪城中へ迎へんとした。宇喜多秀家は前田氏の聟であり、忠興の長子忠隆の妻も前田氏であるから、夫人が宇喜多氏を訪ねたとて只の訪問である。人質ではないと說いて誘はんとしたが、その眞意はガラシヤ夫人にはよくわかつてゐた。彼女は夫の立場を考へ家のために死の覺悟をきめてそれを斷つた。當時長男與一郎忠隆次男與五郎共に秀忠に從つて關東に在り、三男忠利も江戸に人質となつてゐたのが、秀忠の軍に從つてゐて、大阪には忠隆夫人が居ただけであつた。三成は口狀位では手ぬるしと見て軍兵をさし向け家を圍んだ。時に家老河喜

多石見、稻富伊賀、小笠原正齋之を守つたが、裏門を守つてゐた稻富伊賀は砲術の名手だつたが變心するに及んで危險は忽ちに迫つた。正齋は薙刀を持つて夫人の部屋に急を告げた。その時夫人は腰元の霜女といふ者に遺書を三齋に傳へるやうに依囑したが、その霜女後五十九年を距てゝ正保五年になつて當時の狀況を誌して細川家に錄上した記錄が細川家に殘されてゐる。

「扨は心に懸ることなし、少齋介錯したく候へと仰せらる。長まりて候とて長刀を提げ、老女を先に立て參り候處、御髮をお手づから上へきりきりと卷上げさせ給へば、少齋左樣にては御座なくと申上候。心得たりと御胸のところをくわつと御押開きなされ候。少齋敷居を隔て候ひしが御座の間に入り候こと憚多く候へば今少し此方へ御出なし下され候へと申上げゝれば敷居近きところに御居直りなされ候。長刀にて御胸元をつき通し奉り候。少齋も此處にて御供仕るべく候へども憚の多く候とて表に立出で候云々」

と誌されてゐる。日本西教史によると、自ら死裝を整へて天主を安置せる一室に入り焰を點じて天主に祈り、そして夫人は顏色淸艶心衷湛然徐ろに坐についたといふ。キリスト及マリアの名號をとなへ衣襟を開いて首をのべ劍手に委かせた。老臣作禮して刀を以て首を刎ぬといふ。彼は直ちに絹褥で死骸を覆ひ上に火藥を散亂して、他室に退いて自殺し、他の一人は火を放ち

大廈一時にして燒盡したとある。

このやうに彼女は終を全うして壯烈な最期を遂げた。この報一度關東に至るや忠興をして感奮せしめ、又諸大名にもよき手本となつて敢へて妻子の爲に西歸しようとする者など一人も無かつた。このことは延いては次いで起つた關ケ原の戰の勝敗に影響を及ぼせること非常に大きかつたといへる。新井白石も藩翰譜に、「爲に石田三成等は案に相違し、慙なることを仕出し諸大名を內府（家康のこと也）の方人になし果せて詮なしとて、是より後人質とるべき沙汰に及ばず」と誌してゐるのもこの間の消息を語るものである。ガラシヤは正く義のために死んだのである。常山記談には、次のやうな話がのつてゐる。はじめ妻子を城中に取り入れようとすと聞いて、夫人は家老を呼び、「吾此所を出んこと思もよらず城中にとりこめられんは恥辱なり、よく斷りを申候へ、猶き丶入れられずば是を限りと思ひ定むべし」と語つてゐる。小笠原正齋が申すには、「殿本國に向はせ給ひし時おもひかけざる事のあらんには正齋はからひて武將の恥なさらしそと仰置かれ候ひて、敵奪ひとらんとするならは其時思召切せ給へと申しけり。」とあるから、時の情勢で動亂が起るかもしれないといふのは豫め察知されてゐたのだから、彼女は一死以て細川家のために殉じたのである。さすれば實に貴き美しき最期であつたといはねばな

らぬ。ガラシヤその時三十八歲であつた。

この丹後侯の燒跡から、半ば燒失した遺骨を得て、オルガンチン師は厚く之を葬つたが後亂おさまつて忠興は夫人を追慕して措く能はず、基督敎の法式を用ひて厚く葬儀を行ひ、涙沈沈として止まらなかつたといふ。

日本西敎史では夫人の人となりを附加していふには、夫人は美しかつたが自ら奉ずること嚴格で、嚴密に法敎斷食を行ひて、規格を遵守した。又棄子を養ひ、數人の師徒を寄食させて傳道せしめ、又ラテン、ポルトガル語迄もよくしたと誌してゐる。以て彼女の怜悧にして信仰にいそしんだことを知ることが出來よう。

千姫

千姫の生涯には三箇の話題が傳へられてゐる。その一つは大阪城落城の時城脱出の模様、その二つは本多忠刻に再嫁するに當つて坂崎出羽守事件、その三つは吉田御殿の色地獄である。その何れを見ても小説的題材で、大衆の興味を牽かざるはない。それだけにこの話題が何處迄實話に則つてゐるか疑問となるのである。講談にしろ、傳説にしろ、凡そ興味本位であるだけに、實際などはどうだつていい。大衆にうけることが話の筋を立てる原動力となるからである。依つて千姫の話と實録との照合は又別箇の興味ある問題で、それ自身充分價値がある。それ故こゝではその一端として古記録を漁つて兩者を並列して見ることにしようと思ふ。

千姫は秀忠の長女で、豐臣秀頼夫人となつた人である。母は達姫といつて淺井長政の第三女、つまり淀君の妹であるから、秀頼とは從兄妹の間柄である。慶長二年四月十一日伏見で生れ、八年七月廿八日七歳で秀頼に嫁した。勿論政略結婚であるが、かくして大阪の御臺所として居ること十三年、關東關西の修交斷絶して、元和元年五月七日遂に大阪城陷り、八日には秀

頼淀君等自刄して果てた。この際千姫は七日に城を出て關東の手に歸つた。この時千姫十九歳である。

何しろ城落ちて天主も燒けるといふどさくさまぎれのことであるから、千姫脱出には種々の風説が流傳されてゐる。しかしこれは大日本史料に「大野治長、秀頼夫人德川氏千姫ヲ城ヨリ脱セシメ使ヲ家康ノ行營ニ遣シテ、秀頼母子ノ助命ヲ請ハシム」と本文がのつてゐるのが眞説で、「駿府記」によれば大野治長の郎徒米村權右衞門が使となつて茶臼山に來て本多上野介を通して、今日姫君城中より出てさせ給ふと語り、秀頼母子の助命を願ひ、然らば治長をはじめ、皆々切腹仕ると申込れたとある。「大阪御陣山口休菴咄」によると、秀頼淀君大野など相談して千姫を城中より出して家康のもとに送つた。供には南部志摩守一人、馬上で御輿の先を拂つて、大阪より姫君樣御出被成候間、何も道を開き候へと敵方へことわつて天王寺表へ御乘物一挺にて出した。内々は敵方より千姫を出すやうにとの手だてもあつたよし取沙汰された。寛政重修家譜、堀内主水の條に、主水氏久及び南部左門某刑部卿局等と共に千姫を守つて城を出て坂崎出羽守直行の仕寄にいたり、直行について茶臼山の本陣にいたるとある。

右のやうに城を出たので、逃れ去つたわけではなさそうである。祕覺集には千姫脱出の狀況

がのつてゐて、大阪城には天守に火の手が上つた。暫らくすると、城内から女郎を一人負申供の女二十人計にて、五十餘りの老女一人をのせ、警固の者廿人計、竹杖をつきかこんで御簾中様にて御座候といつて出てきた。この際山本日記では、姫君天王寺表へ出られ、皆々名乘つて御輿近邊には人を拂つたが、坂崎出羽守と云異風者が參つて御供仕らんと申も近邊へよせず、すると彼は御本陣に案内仕らんと先へ乘拔け、家康へ注進申し、我才覺を以て御供仕たる樣にその砌も云ふとし、其時家康の言質をとり、後に何かと申す故終に討ち果さるゝ也と後日譚までのせて出羽守をまるでうそつきの極惡人のやうに書いてゐるが、大阪記によれば治長は落城に際して千姫に、秀頼淀君の助命を兩將軍によくよくお願してくれることを頼んで御輿もなければ帷巾で顏を掩ひ、下人に負はせ、刊部卿の局をさし添へ、坂崎出羽守の陣所に入れた。坂崎大きに悅んで、則ちあやしげなる輿に召させて大御所の陣所へ入れ奉るとある。

まあ脫出は大體右の如くであつたと見える。

所が坂崎出羽守の一件につらなつて、江戸時代の諸書は右のやうな簡單な記事では滿足する所ではなかつた　そこで先づ千姫脫出に關する風說を書きとめやう。先づ第一には城中では德川氏を怨み、千姫をにくんでゐたといはれる。ありそうなことである。異說區々、翁草等には

大阪では千姫が秀頼夫人として輿入れをしたが、關東を奇怪がりて秀頼は一度も奥へいらずと云ふと書き立てられる。特に大阪陣については淀君の關東に對する怨恨の情を激發されてゐたので、千姫を非常ににくんだと噂された。その樣子は柳營婦女傳によると、大阪落城の時、彼等が逃げ込んだ朱三矢倉の糒藏二間に五間の所を三つに仕切り、兩方に秀頼と淀殿、千姫とを分ち置き、中の仕切に女中を籠置いた。此時淀殿は千姫の御振袖を自ら膝下に敷居、質に取り玉ふ心にて少も離さずいますと書かれてゐる。老談一言記では、淀殿は千姫にひしと附き添ひ、事急ならばさし殺さんとする樣子だつたと書かれてゐる。それを千姫はまんまと逃れたといふのである。老談一言記にては、秀頼御自害の由を申す者があつたので淀君あはてゝ思はず矢倉を下りたすきに女中はふとんで千姫の體をまいて、矢さまを開いて落して、女中も石垣を下り、堀内主水が供をして城を遁れて岡山へ參つたと書かれてゐる。柳營婦女傳では秀頼御生害といつたのは刑部卿の才規であると書いてある。ともかく、まんまと淀君をたぶらかして逃れたやうにある。

所が、元寛日記には南部左門等々が方へ本多正信方より內通したので姫君を盜出して、正信の陣へ送つたとある。尙この時速水早斐守が之を見て取留めたのを、大野修理亮が、無用であ

る。姫君も流石御夫婦のことなれば、何とぞ兩將軍家へ嘆き給はゞ御命計は宥申し給ふ事あらんかといつて甲斐守を押しとゞめたと書いてある。

そこで第三は彌々諸傳の如く、煙の中を坂崎出羽守かけめぐつて千姫を助け出したといふのであるが、つまり千姫は未練がましく秀頼と共に死ぬこともせず、それかといつて逃れ出る事も出來ずまごまごしてゐる間に出羽守に助けられたといふことになつてゐる。燒殘反古によると、いよいよ大阪落城で火も懸けた。この時家康秀忠は千姫の身を心配して、誰人でも城中へ走入り千姫を救ひ出したならば、貴賤を問はず、その妻となし、その上賞祿を給はる由仰せが出たと書かれてゐるが、然し出羽守傳說の如く城中にかけ入り火にやかれ、肌は破れて形相すさまじくといふ所は書いてはなく、然所に城より大野修理罷出、寄手之矢口を留め呼はりけるは、秀頼卿御臺樣可奉出、誰か御受取ある可しと云ふ。折節出羽守居合せて之を承はり則ち城中へ入つて請取り、堀内九助といふ者におはせて勝山に參るとあるのみである。只續武家閑談では煙の中を馳廻り尋逢つて則ち帷子で姫君の顏をかくし下人に負はせて我陣へ入るとある。講談にあるやうな千姫自害の危機一髮といふ所に出羽來合はせて助け出そうとしたが、出羽のあまりにもひどい醜男で血まみれなのを嫌つて城を出ようとしなかつた。そこを云ひすかして

負つて出たといふやうなお芝居は何々記錄には見つからない。落穗集には千姫脫出のことが最も詳しく書かれてゐるが、それにも右のやうな講談はない、堀内主水つき添つて坂崎出羽守に參り逢つたと書かれてゐる。矢張り城外の話である。この落穗集には治長は米村權右衞門を遣はして千姫に秀頼母子助命のことを願はしめしことを書きそへてゐる、米村は出羽守の指圖で女中の中に交つて行つた。出羽守は茶臼山と天王寺との間に佐渡守の陣所があつたのでその近くの百姓家に千姫を守護警戒して、佐渡守に米村の使の趣を傳へた。家康は非常に喜び何事も姫の願とあらば尤なり助命すべしとあり、秀忠にはからへとあるので佐渡守岡山の秀忠の陣所に參れば、秀忠は以の外の御機嫌惡しく、いはれざる事ばかりをぬかしありかず共、秀頼と一所に罷在て相果て致さずしてと迄の仰であつたと書かれてゐる。その夜は權右衞門千姫方に相詰めて、側の牛部屋でねむつたとある。

然しこれでは話がさつぱり面白くなつて來ない。講談にあるやうなことはないかと見る、柳生家譜に、大阪落城の時家康公は諸將に命じ、秀頼の夫人を奪ひ出す者あらば、夫人を與ふべしと、時に坂崎出羽守成政槍を揮つて奮然城中に入り、夫人を負ひ出すとある。元寛日記には、夏陣秀頼自害の時、城中火を掛け、烟の中を飛入つて御臺所を抱取り奉る人である云々、

そうして家康御感の餘り汝に賜ふ可しと仰せらると書いてある。而して及聞秘錄が最も詳しく書いてある。秀頼公御生害の時天主に火掛りぬれば、大御所様御臺所の御事を御氣遣あり、諸士に向て仰けるは、今度秀頼の御臺を無別條奪ひ來ん者には御臺所を則妻に得させんと高聲に宣へば、坂崎出羽守聞之、馬牽寄て搖りと乘、猛火の中へ駈入、近付敵を切て落し、御守殿近く行つて見るに、御臺所の御殿へも、火既に掛りたり。然る所に御臺所の御局只一人、御臺所の御手を引て御椽頰へ立出たれども早四方に火移つて、黑烟夥しく、あたりも難見分程なれば、何れへ共方角を辨ぜず、茫然として居玉ふ處へ、坂崎駈入て此躰を見、急ぎ馬より飛て下り、某は坂崎出羽守と申者に而候、大御所様の仰を蒙り、御臺様を御供仕ん爲めに是まで御迎に參候、疾々渡らせ玉へと云ふ。御局大に喜び、去らば助け奉り候へと云ふ。仍て坂崎、姫君を抱き上て馬に乘せ進らせ、御局と共に馬の口を取て漸くに猛火の内を逃れ出、岡山の御陣へ參り云々」、これで大分講談に近づいたが、千姫出羽のぶ男振りを見て怯氣を振つたといふやうなる話はない。かゝる生死の境にまで男のきりよう選びのやうなことをしたといふのは實際は考へられぬことであるが、傳說がそこ迄も飛んだ所に千姫の淫亂ぶりの成行きを思はしめる。然し、ともかくも、この城脫出の際、出羽守に殊勳があつて、その時家康より千姫を妻に

賜ふといふ約束があつたといふのが世間一般の聞き及ぶ所であつたと見える。

そこへ、元和二年九月、千姫は伊勢桑名の城主本多忠政の嫡子忠刻（ただとき）に再嫁し、この時石見津和野城主坂崎出羽守直盛之を奪はんと謀り、事露はれて、幕府は乃ち直盛をして自殺せしめ、其所領を沒收するといふ事件が起つたので噂は彌々昂まつたのである。

然らばどうして、本多忠刻に嫁するやうになつたのかといふと、及聞秘錄では秀忠が出羽守を好まなかつたによるとある。もともと出羽は宇喜多家の浪人者で陪臣である、且つ生得短慮の不骨者で、我が聟にするには不足といふにあると書いてある。これで約束を破つたとあるが、燒殘反古には世の通說の通り、千姫が坂崎の色黑く手足肥滿して甚だ不器量だつたので嫌つたのであるとし、且つ、千姫が江戸へ赴くの時、勢州桑名の渡しで忠刻即ち本多平八郎が御座船の延引を怒つて、水主梶取等へ下知する體、才覺あつて智勇備はり、色白く美男なれば諸人に勝りて見えけるを、千姫御覽あつて戀情を催したので、坂崎へ行く位なら自殺する、自分はどこ迄も本多の許なら行きたいと秀忠に駄々をこねたのであると書いてある、秀忠も千姫の我儘には怒つたがどうしても承知しないので遂々坂崎へは約束を違へて忠刻と婚すことに決つたのだとある。一說には墨田川の川舟での見染めとも傳ふる書があつて、ともかく千姫忠刻の

美男に打ち込んで自ら進んで嫁したといふのが一般の說である。坂崎はすつかり眩鐵を喰つて男を下げた。これを怒つて出羽守の悲劇が起つたといふのである。

所が、寛政重修諸家譜本多忠刻の條に、元和二年家康病氣となつたので、忠刻母と共に駿府にいたりて御機嫌をうかがつたところ、千姫君御婚約の臺命を蒙り云々とある。忠刻の母は家康の長男岡崎三郎信康の女である關係からこの緣談は纏つたものであるが、家譜略によると、本多家の方から我子忠刻のために切に再嫁を請うたので家康から許されたのであると誌されてゐる。忠刻はこの結婚により大手前に邸地を賜はり、姫には湯沐の地として別に十萬石を賜つたのである。これが德川家にとつて正傳とされてゐる。然しこれでは世の通說とはひどい開きがあるばかりか、坂崎出羽守怒つて、途を要して千姫を奪はんとして事露はれて自殺せしめらるといふが如き事件が起る筈はない。當の仇で、男の意地といふならば、違約した家康秀忠であり、特に本多忠刻の一家そのものではないか。そういふ事は坂崎の傳說には何處にも出て來ない所を見ると、正傳は曲筆かと一應疑つてくるものがある。

鳩巢小說には本多正純が秀忠と不和になつた原因の一つとして出羽守事件のときを語つてゐるが、秀忠は出羽に段々とその旨を聞かしたが出羽は些かも合點しない。そこで老中共集つ

て、坂崎の家老に秀忠より內意を下して出羽を討つて出せば跡目は立てると仰せらるれば事は無事に濟むだらうと協議した時、正純は反對して、主を討てとは上意にあらず且つ討つとて跡目を立てしめないことに決つてゐるならば僞りの事であるからいけないと云つて正純はその內意の紙面に判を捺さなかつたと傳へてゐる。これが不和の一原因だと數へてゐる所から見ても坂崎と家康秀忠との間には必らずや約束があつたこと、それを無理に拒まんとしてゐた爲に、坂崎の怒りと不承知を說得出來ないこと等を有力に裏付けてゐる會議であると思ふ。

依つて簡單に坂崎出羽守事件の顚末を書き誌るさう。「及聞秘錄」によると、千姫本多忠刻に嫁すと決したことを聞いて、坂崎は大いに怒り、その違約と、自分の不面目を思つて、姫をその輿より奪取した上討手を待つて自害しようと用意を整へた。所が（元寛日記）家人田中道悅町奉行島田彈正に密告したので老中驚いて出羽を召喚したが、事情を察して病氣の故を以て出頭せず秀忠之を聞いて怒り、坂崎來らば誅すべき仰が出た。又家老共へは老中より坂崎を討つて出せば死罪御免の上、褒美を賜はる旨の書面がきたので、家老某（燒殘反古、元寛日記に曰く遠藤某也）が出羽の首を打つてさし出した。これで無事落着したが遠藤某は主を殺す不屆者とあつて處刑された。かくて始末がつき、出羽の處領は處分されたが、その檢使に立つたとい

ふ柳生但馬守は、元和年錄によると日頃出羽守と懇意なので仰をうけて事件を收めんものと出向くと、出羽守は土藏に籠つて對面しない。そこで但馬守は家老牧野勘兵衞を呼び出して、出羽守は亂氣と見えたから切腹いたさせ、舍弟大膳に跡を下さると告げたので、家老は跡目御知行仰付けらるゝならば難有き次第とばかりで、但馬歸て後、出羽守が土藏を出て行水してゐる所を生害したとある。柳生家譜では但馬說得して出羽を自殺せしむとある。東武實錄によるとこの間の事情が明確にされてゐる。即ち千姬勢州桑名の城に入輿あり、江戸御首途の時、坂崎出羽守是を妨げんと欲す、其事ならず、是によつて氣亂れて髮を切、家人等に至る迄皆是を下知して剃髮し、兵器を整へ出、輿を奪ひ取らんと欲す。然る處出羽守沈醉して倉庫に入つて眠る。時に家臣坂崎勘兵衞倉庫の口を閉ぢて是を執事に告る。是に依而、兵士をして出羽が宅地を圍ましむ、出羽守遂に自殺す、坂崎が領地檢使として柳生又左衞門、小笠原市左衞門、駒井右京石州に赴くとある。この事件の年月日は諸書異論があるが、三年四年等と記されてゐるが元和二年が正しい。

扨て坂崎事件は、明らかに德川幕府が非違を行つて一つの悲劇を作つてしまつたやうである。之は德川家の史家を一樣に困却せしめたと見え、御用史家は揃つて坂崎の惡人なることを

書き立てゝゐるが、扨て實際の風評は如何ともし難い所である。されば新井白石の如きも閉口して藩翰譜で誤魔化さうと試みてゐる。それによると、千姬大阪城を逃れ出た時、坂崎は昔宇喜多の家臣として京にあつて知人が多いから、千姬を、攝家花族などの公達の中に世話してくれと秘かに仰を蒙つて、彼は都に上りあれこれと盡力してしかるべき家を申上げた。將軍はよろこんでそれに決つたところ、千姬は再び夫を持つことは心憂きことであるから尼にでもならうといふのであるから秀忠も驚いてこの結婚は駄目だとことはらせた。中にはいつた坂崎も今となつては困じ果てゝ居た所、今度不意に本多忠刻に嫁すといふことに決まつたとき、面目を失つたとて大いに怒り、かくなる上は輿を奪つて京に上らんものをと家の子郎黨を集めた。家老共謀反となるを憂へて諫めて自殺させてその首を奉つたがまことは薙刀で首をはねたと傳ふ。將軍家怒つて家を斷絕し、その家老を處刑せしめたと書いてある。實に馬鹿々々しい話でこの云ひわけの苦しいこと流石の白石もしどろもどろの感がある。

右のやうな具合だから、德川家にとつて不利である事情のものは、歷史を讀むとき隨分氣をつける必要がある。これなど明らかに好き例であるが、この發端が千姬の色好みにはじまるといふ通說こそ、誠に興味ある所である。一體に千姬はまるで色情狂のやうに流傳されてゐる女

性で、何處からも褒めた記事が見出されない、寛永三年五月には忠刻早くも死んでその秋薙髪して天樹院と稱したのであるが、忠刻の死因も飽くなき千姫の慾望の犠牲となつた果てだと福本日南氏などが罵倒する位に多淫の女として名を取つた。玉露證話にも、甚だ婬亂の惡名ありと誌されてゐる。

千姫の家老に吉田修理介といふ者があり、秀忠の命をうけて三番町の邸に館を建て、忠刻の遺兒と共に天樹院はこゝに住んだ。賄料一萬石を給せられ、人呼んでこれを吉田御殿と稱した。こゝで彼女はあくなき淫蕩三昧の生活を送つたといふのが傳説である。勿論その眞僞の程はわからないが、異説日本史に紹介する所をこゝに書いて見ると、天樹院は目黒で鐵砲組の磯野源之丞といふ美男子に出會つた。彼女の情炎は燃えて、源之丞を御殿に呼んで云ひ寄つたが、斷乎として斷られてしまつた。これ以來、天樹院は憂欝、時に狂噪を發する狀態が續き、かくて侍女に命じて源之丞の面さしに似たものを物色せしめ、自ら吉田御殿の高臺に出て往來の人を見、美少年とあれば乃ち招じ入れて酒色を饗し、閨の友として歡樂を恣にした。しかも一度招かれた者は終にこの館を出たものがないと噂が立つた。

時に京橋五郎兵衛町の小間物行商伊之助、並びに神田白壁町の大工職政次郎もこの犠牲者だ

つた。行方不明の政次郎を血眼で探してゐた親分の助五郎がこの事實を聞いて怒り、忽ち乾兒數十名を率ひて御殿の門より、政次郎を還せと迫つたが埒が明かないので、憤然門を破つて亂暴狼藉を始めたが急をきいて馳せつけて來た町奉行の手で取鎭められた。すると折よく磯野源之丞が來て千姫に謁を乞ふて、姫の淫行が德川の社稷を汚すべきを説き、政次郎を還させ、左右の侍臣を誅し、更に姫に向つて自裁を勸告した。そして誓つて「自分も必らずあとを追つて殉死する」といふ、千姫も今は漸くにして惡夢より醒めて自刄して果てたといふのである。

吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子の振り袖で

といふ歌はこの吉田御殿のことだと傳へられてゐる。

以上が傳説であるが、千姫の正傳では江戸城竹橋内に住して世にあること四十年、寛文六年二月六日逝去、享年七十、傳通院に葬る。天樹院殿榮譽源法杉山大姉と謚す、とあるから吉田御殿最後の如きはあり得べき話ではないとすべきであらう。特に吉田通ればの歌の如きは眞實以てまゆつばもので、吉田御殿を捉へて直ちに吉田通ればとはいへる筈のものではない。この點は福本日南氏も疑つてゐるが當然の次第で、吉田は多分三河の吉田卽ち今の豐橋だらうといふのが現今の通説とされてきた。然しこの吉田は三河ではなくて、實は安藝の吉田卽ち廣島の

直ぐ北にある町で、その昔毛利家がこゝに居城して繁榮した時の流行の歌である。これは慶長頃の流行歌を集めたものゝ中で、安藝の國の部に出てゐることで確かとなつた。

こうして見ると吉田御殿の傳說は、誇張の誹謗をまぬがれないものではないかと思ふ。然し忠刻再嫁の時の男の縹緻望みの如きが見られるとする以上は、多少ともその傾向がなかつたとは云へまい。江戸時代になつて封建が制度的に動きがとれないやうに出來上ると、餘りに物體視されてゐた女性は男より以上に動きがとれない固い殼に嵌められてしまつた。大奧の女中などこの爲に色々な噂を產むといふやうになり、或は柱昌院が護國寺を建てるや、その女中共が參詣を名として通ひ、その池を乾した時數多の女人の白骨が池から出てきたといふ獵奇的な話もあるのであるから、そのやうな好奇心に充ちた眼が吉田御殿の噂を產んだものかと思ふ。ともかくこの傳說を確かめるにはなほ研究を要する所であるが、いつの間にか千姬は淫逸なる女性の代表のやうな人にされてゐるのはお氣の毒でもあるが、又そこにこそ興味を惹いて講談の世界に榮ゆる所以でもある。

加賀の千代尼

江戸時代の文學に於いて特筆すべきは俳諧の完成と盛行である。俳諧は室町時代より連句發句としての經路をとつて出現してゐたが、しかし趣向的な駄洒落のやうな言葉の綾に終つて調子が頗る低かつた。然るに元祿の頃松尾芭蕉いでゝ俳諧に寂びの境地を盛るやその深さに徹して、忽然として日本文藝史上の最高峯の一つとなつた。その後天明の頃には蕪村一派出で、又一方には一茶の如き異人あつて、明治の俳壇に及んでゐる。多士濟々、正しく江戸時代文學の華である。

然しどういふものか女流俳人になると月夜の星の如くこの世界には甚だ乏しい。辛うじて、園女、智月尼、去來の妹千子、千代尼、捨女、多代女、花讃女等々の數人を數へるに過ぎないとは殘念である。しかしこの寥々たる有樣は必ずしも江戸時代の女性の不敏性を表はすとのみはいへないであらう。大體が閑寂を宗とする俳句の世界はその表現形式上客觀的抒事的である。つまり名詞的表現である。これは元來女性の感情にとつては不向きな方で、そのため俳句

には入り難いのではないかと思はれる。女性には抒情的な面が性來あつてゐて、つまり感情活動が形容詞的だから、歌とか詩のやうな小說にその得意な才能を示すことが出來たと思ふ。こゝ迄はつきりといひ切ることは少しいひ過ぎではあるが、かゝる傾向があることはいへると思ふ。それに芭蕉が開拓した俳諧の深みは、一種の禪的な悟りのやうな所があつて、當時の女流の生活とは凡そ緣遠い境地であつた爲に、嘗ての平安朝期の女流が文學史上に殘したやうな華華しい活動を彼女たちはすることが出來なかつたのであらう。それに當時は封建社會であつて女性は單なる後嗣を產む道具として取扱はれてゐた時代だから、どの方面からいつても女流の活躍は多くを望み得なかつたのである。それ故必らずしも女性のみの科ではない。時勢の然らしむる所でもあらう。

然しどのやうに辯護してみた所で何とも仕樣はない。俳壇に於ける女性の功績は實にさみしいのである。辛うじて擧げられるこの數人の者にしても、その俳諧道は到底男子と比肩し得べくもない。俳諧史上云々される資格のあるものがないとは口惜しい次第である。只この中にあつて加賀の千代尼だけが猶り名聲嘖々たるものがあるが、その實力からいへば矢張り第二流を拔いてゐるものではない。

朝顏につるべとられて貰ひ水

この句は最も世に知られた千代尼の作であるが、扨てこの中にどれだけの風流があるだらうか。朝起きてみると朝顏の蔓がのびて釣瓶にからんでゐる、切るのは惜しいと手桶さげて貰ひ水に行きましたといふ程の句であるが、釣瓶にまきついた朝顏の風情を娛しんでゐる樣子は見えるが、何となく風流といふのはかういふものですよと人に見せてゐるやうな臭味を感ずる。風雅生活の見本のやうな感じ、素直に生活してゐるやうでしかもひねつた感じが先づ鼻を打つ。矢張りほんとの第一流の句とはすることが出來ないのである。その才氣は愛すべし、しかもその才氣の故に眞の素直さを失つてゐるのである。

秋深き隣りは何をする人ぞ　芭蕉

この深酷な句境と比較して見るとその間の消息がよくわかると思ふ。この芭蕉の句になるとわかつたやうでわからない、深さの底が知れないといふ思ひがするが、朝顏にの句では表面に浮いてゐるからそんな心配はない。そればかりか風流の何たるかを味解したこともない人でも、こういふのが風流だなと合點せしめるやうな所がある。この點が俗受けのする所以であつて、かくして千代尼は名を遠近に馳せ名流女性となつたのである。生前已にその句集が二つも刊行

され、死後は實に色々な傳說巷談が彼女を圍繞してゐる。その人氣や恐るべしである、

尙人氣を得たといふには外的理由も考へられる。恰度千代尼が世に出た頃といふのは、芭蕉死して蕉門の十哲も漸く殘り尠くなつてゆく時、いはゞ蕉門の落ち目で、しかも蕉村の天明調が未だ世に出ない中間の時代であつた。いつて見れば高い波と波との間の谷間のやうな時代であつた。千代尼にとつてはその才を練るには不運な時代であつたが、名聲を博するには好都合であつたのである。この事情は千代尼が芭蕉の十哲中でも凡俗なる美濃派の支考や、伊勢派の乙由の感化のもとに出發したことにその不運と好都合を倍加してゐる。それに千代尼が蕉風の俳人であることも人氣を增してゐる。芭蕉いで〻より蕉風天下を風靡すといふがそれも中心地關係地のことであつて地方の田舍に行けば矢張舊態依然として貞德一派の擅林派が根强く勢力を持つてゐたのである。そういふ中で、田舍より、しかも女の身を以つて蕉風の俳句をものするといふのが蕉風彌々天下に行き亙るに隨つて人氣を加へる所以であつたと思ふ。

かくの如く千代尼はその名聲に似ずその內實は第二流であつた。江戶時代の女流俳壇に唯一の評判者をこのやうにいはねばならぬのは筆者の最もつらい所であるが、それは何とも致し方のない次第である。然しながら千代尼も晩年には

蝶は夢の名殘分け入る花野かな

のやうな深みのある句を作つてゐるから、決して只の鼠ではなかつたことは確かである。されば こそ蕉村等も彼女を尊重したのであらう。ともかくその名聲高くして色々の傳說が附會されてゐることは、嘗て小野小町や和泉式部に種々の說話が生まれてゐるやうに、人氣ある者にとつては珍らしいことではないが、江戶も中期のこの時代だけに、只俳諧史上に珍らしい事柄であるばかりでなく、誠に興味ある問題である。それ故に千代尼の一生をさぐることは更に一層の面白味を感する次第である。

千代尼の生涯や句作については巷說紛々として殘された傳說は混亂して諸書に載つてゐる。歌俳百人撰、續近世畸人傳、近世奇跡考、臨泉亭主人稿、俳林小傳、俳家奇人談、梅室翁隨筆、宮川舍漫筆、理齋隨筆、俳人百家選、名人忌辰錄、千代尼履歷等々。近頃では吉松氏著加賀の千代女の生涯といふのが、その傳說的生涯を傳へたる見本のやうなもので、これは近く種々なる考證の研究の結果、物も見事にすつかり覆へされた。城丸氏千代尼、日置氏千代尼事蹟雜考、信道會千代尼のおもかげ、千代尼聚考等の名著研究が續々出版されて、傳說の千代尼は影を沒してしまつた。今はあらまし千代尼聚考によつてその生涯を書き誌すと、千代女は元

祿十六年二月加賀國松任の表具屋の福增屋六左衛門の女として生れた。母は村井屋の女つる。父は六兵衛といふ一説があるが、これは千代の養子である白鳥が通稱であつて、それがまぎれたものであらう。又幸右衛門といふのも千代の子孫の名前であることが判明した。

千代女は幼くして文藝の趣味を解してゐて、十六七歳の頃には已に俳句を立派に作つてゐた。享保四年、千代女十七年の折に、美濃の支考が北國行脚の途上千代女に會つてその才媛ぶりに一驚を喫してゐることで知られる。この時支考は

千代の許にやどりて

おしむなよ芙蓉の陰の雨舍り

と一句ものし、郷里の友人大亳に宛てゝ珍事とばかり千代女のことを報じてゐる。

珍事

金澤より三里南に松任と申所、表具屋の娘に千代と申して美婦生年十七歳　去年歳暮よりふと發句を始め、あたまからふしぎの名人、三越の間是沙汰にて御座候、先月通かけに寄申候處、頃日禮に人越候、附合一折懸ニ御目ニ候、此比發句題入用事候間稻妻、杜若と申題二つ遣候處

行春の尾や其まゝにかきつばた

稻妻の裾をぬらすや水の上

此二句にて外は御察可被成候

見龍

大亳様

このやうに大の男をして舌を捲かしめてゐる。彼女は若くしてその奇才を表はし、名聲を博してゐたのである。又これで彼女と美濃派との關係が生じたのである。この二句は享保七年（二十歳の時）鵜坂集に採錄され、又彼女十八歳の時の作かと思はれる

池の雪鴨あそべとて明てあり

が同年の北國曲にのつてゐる。享保十年（二十三歳の時）には京に上り伊勢で麥林舍乙由と會つてゐる。かくて千代女の名前が高まるにつれて俳人の來訪する者多く、享保十一年萬華坊魯九が來るし（雪の白河）十二年夏には支考の弟子盧元坊もきてゐる（桃の首途）爾來美濃派との交渉最も多い。

その他彼女との交渉があつた俳人は、蒼紫、風二、東棠、乙峰、金澤の紫仙女、若推、半

睡、相河屋すゑ女、麥浪、梅路、珈調、里朝、珈凉、山叩、大睡、雲峰、麥水、旣白、松因、闌更、宇中、白雄、蕪村、風咪等々、の名前が見出される。かくて千代女は五十二歳寶曆四年歳暮に剃髪して素圓と名を改めた。章流の「からるり」の百韻中に

かゝるつたなき身の、世をうしと思ふにはあらで、ふるき言葉のはし、まことに晝夜をながるゝ水の心ほそくそのまゝに

髪を結ふ手の隙あけてこたつかな

と載つてゐる。千代女は名實共に清淨な生活に入つて俳諧にいそしんだのである。書は持明院流の山本源右衞門につき、畫は前田直躬の家臣なる矢田四如軒につき、悠々自適の境界に遊んでゐた。傳說によると、佛門に入るや金澤の念西院に籠つて精進したやうである。宗派は眞宗だつたので念佛のために寶曆十年（五十八歳）には秋の彼岸に越中井波御坊に祖師五百回忌法會に參詣したり、その翌年には金澤の珈凉女同道にて京に上つて東本願寺祖師五百回忌大法會に參つてゐる。又傳說では木曾路から近畿東海道更に奥州迄も旅行した如く傳へられてゐるがこれらは確證なくどうも嘘らしい。ともかく各地に遊歷して諸士と交を結んだりした事は察せられぬでもない。彌々俳名高まるにつれて、その十三年（六十一歳）には無外庵旣白によつて

千代尼句集、乾坤二冊が編まれて刊行された。藤松因の序、半化坊闌更の後叙、宇中の傳千代女書、麥林の書信、支考、盧元坊、希因等の句を添へ、千代尼の句五百四十六句を載せてゐる。生前に句集發刊されるなど、その名聲の程が察せられるが、尙この年の八月には下命によつて朝鮮慶賀使に懸物六幅、扇子十五本計二十一句を淨書して上つてゐる程である。されば明和八年（六十九歳）には再び雲樵旣白によつて俳諧松の聲が千代尼句集續編として編まれるに至つた。三百二十七句をのす。生前已に二冊の句集が刊行さる。彼女の名譽や思ふべしである。

漸く老衰して病褥に親しむやうになつたが、尙その枕を立てゝ安永三年七十二歳の時には蕪村の玉藻集の序文を草してゐるが、遂にその翌年九月八日にみまかつた。

月も見て我はこの世をかしく哉

の辭世を殘した。

葬る所は判然しない。二十五年忌辰に松任聖興寺に塚を立て、碑面に辭世の句がある。また金澤念西院にも句碑が建てられてゐる。名人忌辰錄には「金澤專光寺に葬る」としてあるが今は確めるべき資料がない。

法名は釋尼素圓といふ。

このやうに千代尼は若くして支考に認められ、生きてゐるうちに既白によつて句集が二度も出版されたり、蕪村の玉藻集に序文を求められる等、その俳人生活者としては申分ない名譽の一生を送つたといふべきである。それだけに彼女の名聲は色々の傳說が附會されることにもなつた。その俳句の秀拔に對する信仰的なる傳說をこゝに拾つて見よう。

彼女は若くして名聲を博してゐたので、幼くして已にその才をあらはしたと傳へられてゐる。

初雁やならべて聞くは惜しいこと

これが七歲の時の作、すつかり親爺を驚かしたと傳へられる。勿論僞談である。斯樣にその才能を持ちながらも、田舍でいい師匠がない。適々美濃の盧元坊が北國に行脚の節、松任に寄つたので千代女は好機來とばかりに彼をその旅舍に訪れて敎を乞ふた。千代女時に十五歲だつたと傳へられる。盧元坊はそこで「時鳥」といふ題を與へた。千代は熱心に句作し。一句成る毎に申出たが盧元坊は顧みてもくれなかつた。そればかりか旅の疲れに果は鼾をあげて睡つてしまつた。しかし千代は尙も苦吟をつゞけて膝を崩さなかつた。遂に曉に至つた。盧元坊ふと目をさまし、未だそこにゐたのかと驚き、そうして夜は明けたかと尋ねた。千代は卽座に

時鳥々々とて明けにけり

と吟じた。盧元坊これを聞いて枕を叩いて、そこだそこだと感嘆した。その氣性を忘れなかつたなら必らずや後日大成するであらうと許して弟子にしたといふのである。これが有名な千代女時鳥の話であるが、實を云ふと盧元坊が北國に行脚したのは享保十二年千代女二十五歲の時である。彼はその紀行桃の道途に、その折千代其他の俳人との俳諧連句一及彼女の句一つをのせてゐる。これが實際であつた。山東京傳著近世奇跡考にはこの時鳥の傳說をのせた後に

時鳥々々とて睡りけり

といふ伊勢の凉蒐の名句があるからそれをもぢつたのであらうと書き添へてゐる。然し此句は凉蒐ではなく調和の句である。

つまりかゝる作り話が假托されるのは、千代が若くして認められたが、一體何處で俳諧を敎つたのかといふ疑問に答ふる爲であつたと思はれる。それについては正德三年の十二歲の頃、本吉町の北潟屋半睡のもとに女中奉公したから、半睡に就いて學んだといはれる。姬の式によると金澤の俳人野角の妻紫仙女に親しんでゐたやうでもあるが、結局は先述の手紙「珍事」にあるやうに或は特別の先生はなかつたのかもしれない。それに松任は大體俳諧の盛な土地であ

つたから周圍の影響から自得したものであらうか。傳說では同じ町の相河屋武右衞門のもとに小間使になつたのが緣で、その妻すゑが文を解し、風流な女性だつたから、すゑ女より俳句の手ほどきをして貰つたといふのである。千代女とてそれは誰かに手ほどきはして貰つたであらう、先の半睡にしてもそうだつたであらう。然しそれが相河屋すゑ女と云はれる限りに於いては事情が顚倒してゐる。すゑ女は千代女の弟子で、蘭更の破れ笠（寶曆十年刊）に「すゑ女は風雅を素園尼に習ひて蕉風の姿情を得たり云々」とある。すゑ女は千代女より十七年若く天明八年六十九歲で歿してゐる人である故、この手ほどきの話はまるでいけない。因みに十二歲の時金澤の堀田麥水といふ乙由の弟子に入門したともいはれてゐる。

かくして千代の名が喧傳され、その奇才が推賞されるや、その句才以つて神靈に通ずべしとて、小町や其角の雨乞ひのやうな話がどしどし製造されていつた。

花なくばまた來る春の薪かな

と詠んだら枯れたと思つた櫻に花が咲いた。

狐めがをのがつくりを喰ひにくる

と詠んだら、さしも狩りあぐんでゐた狐が、その翌朝瓜畑で死んでゐたとか、又

もろこしの舟のをこりは落葉哉

船中でおこりを患つてゐた人がけろりと癒つたといふやうな話、すべて作り話であるが、それにしても不手際な作り方である。

千代女は不美人だつたといふ噂がある。その例として、京にあつてその句會の席で「炎天に火を吹きそうな鬼瓦」とやられた。鬼瓦のやうに不細工だといふのであらう。之に對して千代尼は

ひとかゝへあるも柳は柳かな

と、これでも女は女らしい所もありますよとやり返したと傳へられてゐる。然し彼女が不美人だつたといふ噂はどうも嘘らしい。却つて美人だつたらしい。先の「珍事」にもあるやうに「千代と申して美婦生年十七歲云々」又近世奇跡考には、

「容貌美にして言語少く常に閑寂を好む、畫をまたよくす、松任は京へゆきゝの要路なれば日毎に諸國の旅客に交りをもとむるに應じて書畫をあたへけるとなん」

とある。矢張り美人だつたんだらう。又そのおかげもあつて名聲がひゞいたといふ功德もありそうである。

話がこゝ迄くると、千代女は、では誰と結婚したかといふことに興味が集まつてくる。然るに何と奇妙なことにはこの所が最も漠然としてゐて、誰と結婚したか所か、或は一生結婚はしなかつたのではないかといふ疑問さへ湧いてくる始末で、その解決のために興味ある考證を待つてゐる。

亭保七年千代女二十歳の時、金澤に移つてゐるが、これが嫁いだのかどうかが不明である。その十年に加賀國小松の不五舍宇中が傳千代女書（千代尼句集所載）を著はして彼女を賞揚してゐるが、中に

「やゝ廿とせの春秋を經て千代の翠に生先しるし、いまだ高砂の尾上に相生の名もあらずとかや」

といつてゐるから、當時千代女二十三歳だが結婚してゐなかつたらしい。千代尼三十三回忌の無躬集の三宅橘園の序せる一節に

「吾鄉有千代尼、幼善俳歌、頗造精妙、自失不嫁、專志雅藻」

とあつて、どうも生涯嫁がなかつたらしい。然し一般には結婚したといふ傳の方が多い。近世奇跡考には「十八歳の頃金澤の福岡某が家に嫁す、その後夫身まかりければ松任にかへり父の

家にあり、云々」と誌し、これは松任村井屋のものゝ話だとことわつてある。又臨泉亭記には「年十六にして金澤大組足輕福岡某の男に嫁し、不幸にして數月を經ず夫某死す云々。」又千代尼履歴にも「廿一歳の時金澤石坂組足輕大野重右衛門に嫁し、廿五歳に後家となり松任に歸る」とある。これらによるとどうも結婚したらしい樣子である。然しこれに對して確證がないので、不明とするより他は致し方がない。しかし坊間傳ふる所では確然結婚したことになつて居り、俳句迄喧傳されてゐる。

千代女は十八歳の時金澤の加賀藩の足輕福田彌八に嫁した。彼女は女としては餘りに體が肥大であり、顏も惡かつたといふ。そこで

澁かろか知らねど柿の初ちぎり

と詠んだ。翌年一子彌市を生んだが、夫彌八は不幸にして嫁して七年、彼女二十五の夏七月下旬死んだ。一說では嫁して半歳程にして死んだともいふ。その時の悲しみを彼女は

起きて見つ寢てみつ蚊張の廣さかな

と詠んで嘆いたといふ。然るに悲しみは更につゞいた。その翌年最愛の子彌市が又死んだ。

蜻蛉つり今日はどこまで行つたやら

破る子のなくて障子の寒さかな

と悲痛の句を作つてゐる。その後は

暑き日や指もさゝれぬ紅畠

とよんで再縁を却け、廿七歳に剃髪し名も素園と改めて佛門に入つた。後四十餘年の後半生を俳諧になぐさめつゝ清い生涯を終つた、とこう傳へられてゐる。一見句との關聯もあつて筋が通つてゐるやうに見えるが、これらの句は凡て皆傳稱の句であつて千代の句であるといふ確證は得られないのである。千代尼にとつてはその生前に已に句集が二部も刊行されてゐるのであるからこれにない句は一應考慮の餘地がある。澁かろかの句は續近世畸人傳（寛政五年刊）に初めて見える句である。千代尼死後十八年目に當る。蜻蛉つりの句も歿後四十五年を過ぎた一茶のおらが春にはじめてのり、又安政六年の千代尼發句集に出てゐるが、之は餘り信用出來ない本である。歿後八十四年目である。起きてみつの句に至つては千代尼の生前の集に已に傾城浮舟の句として發表されてゐるものである。まして剃髪は五十二歳の頃と推定されるから、夫や愛兒の死別で無常を感じて佛門にはいつたといふやうな順序いい話し具合ではない。このやうにこれらの句は傳說としてのもので、恐らくは、その俳句によつて釀された想像に基いて、

却つてかゝる俳句を連ねて見ることによつて一人の加賀の千代尼なる假作人物をでつち上げたのではないかと思はれるのである。いつて見ればこれ迄の千代女として傳へられた人間は尠くとも一應疑問に附される筋合のものであらう。

一體千代尼は有名だつただけに他人の句が大分まぎれ込んでゐる。近來の研究の結果によると、當時大和にも千代といふ同名の女流俳人があつて、しかも若死してゐる。延享三年、加賀の千代女が四十四歳の時僅か二十餘歳で早逝した。その大和の千代の句がはいつてゐるといふ。四首。浮草の流てはまた咲かはり、は大和の千代の作なりとは已に子規の考證がある。相河屋する女の句も三首、又穎原氏の考證によると內藤丈草の句が十二。又楠井也有の句は二十。しらべて見たら未だ他にどしどし出てくるかもしれない。幸に千代尼には生前の句集二部ある故諸家の研究を待つことが出來る。それだけに傳說の句は眉唾ものと一應思はなければならない。半化坊蘭更が千代尼句集の跋に

「しらぬひの筑紫の人も鳥が啼く吾妻の人も此尼の風流を慕はぬはなき」

と賞めてゐる。このやうな名聲が傳奇的興味のもとに齎らされて、種々なる說話の主體とされるに至つたのであらう。

終りに弟子のことを書くと、本吉の二木屋そよ、金澤の前田賴母の母某、松任の相河屋すゑ、これ位のもので、少なかつた。

傳千代尼書として、彼女の畫俳が多少殘されてゐる。

扨て顧つて顧みると加賀の千代尼のおもかげは傳說說話と全然裏腹になつて、何となく幻滅の悲哀なきにしもあらずである。然しながら彼女が女性の爲に氣を吐くことは萬丈であつて、このやうに持て囃されたといふことが已に意味深きことである。彼女は才氣溢れてゐた。仔細に見れば女らしい句作は矢張り彼女のものである。それ故に若し彼女をして、俳諧的にもつと隆運の時勢に會はしめたならば如何に大成したであらうかと遺憾に堪へぬ。之が現代俳壇の彼女に對する批評の全部である。私も亦そう思ふ。然し芭蕉や蕪村のやうに新境地を開き得たであらうかを思ふ時、寂寞を感ずるのは强ち私だけではないであらう。畢竟千代尼は第二流だつた。

鏡山お初と山口阿藤

德川幕府の政策的封建制度が完成して組織的に動きのとれない社會となるや、今度は「お家」の中に色々なごたごたが起つてきて、諸大名中御家騷動を起したものが多々あるが、就中奥向の女中の問題が耳目を聳動せしむるに至つた。卽ち女中の中で勢力あるものが出ては表向きに嘴をいれる者迄現はれ出で、中には春日局の如き一種の傑物をも出したが、その大多數は矢張り女らしい陰性なもので、封建社會獨特な風景を呈した。このやうな奥女中の中で女ながらも仇討といふ話がある。その代表的なものとして人々に膾炙する鏡山とお藤の話を書かうと思ふ。

鏡山お初

享保九年四月三日石見の國濱田城主松平周防守康豐の江戸虎の門內の邸で、奥女中の局の澤野（六十一歲）なるもの、側女みち（廿一歲）が草履をはき遠へたのを罵つて侮辱を與へたの

で、みちはこれを憤慨し、面目上自害した。みちの侍女さつ（廿四歳）は主の仇とばかり澤野を刺して讐を打つた。（太田南畝、一話一言）

これが卽ち世に草履打ち事件として傳へられた。鏡山はこの事件を主材として、更に加賀騷動を題材とした加々見山廓寫本を取合はせたもので、歌舞伎では近江の多賀家のお家騷動として作られてゐるのを、本曲では足利家の事件として十一段に脚色し、その六段目が草履打ち、七段目がお初の復讐となつて居て特に有名な場面である。

歌舞伎の加賀見山蕉錦繪は勿論有名だからこゝでとかくの紹介は不要と思ふ。澤野は岩藤、みちは尾上、侍女お初と呼ばれ、意地惡のにくまれ役から、やさしい同情される役から、最後の胸のすくやうな忠義な侍女の役柄まで、ともかく人氣を得るにはもつて來いの膳立てである。何しろ江戸時代には上役が下役を叱り飛してゐても、下からは何の反抗も許されなかつた封建時代であつたから、この芝居は日頃の鬱憤を漏らす、いい見物だつたらしい。頗る人氣を呼んだものゝ一つである。

その實錄は已述のやうに石見の松平周防守康豐の江戸の邸の中であつたことである。康豐の奥方の輿入れに際して、その里からお供してきた奥女中に澤野といふ者があつた。中々の利け

者ではあつたが、又頗るつきの意地惡で、惡まれ者だつた。之に反して中老の瀧野（お道）はものやさしい性質で親切だつたので、朋輩や若い女中からは深く慕はれ、又奥方からも可愛がられた。或夜のこと時鳥の鳴音を興あるものとして奥方は瀧野をよんで琴の音を娛まうとした。恰度その時瀧野は女中の山路（せつ）に髪を結はせてゐた。生憎な時のお召しで、困つた所、いざ出かけようとした時、自分の草履が見當らない。まごまごしてゐると彌々お召しに遲れるし、且つ夜中急なお召に心急くまゝに、そこにありあはせた他人の草履をはいた。あとでお詫を云つて許してもらふつもりだつたのが、運惡くそれが澤野の草履だつた。事件はこゝに發端した。大體澤野は瀧野がお目にかなつてゐるのを心憎く思つてゐた。腹黑い彼女はいつか恥かしめてやらうとよくない了簡を持つてゐた所、いい機會がきたと思つて持ち前の意地惡を發揮したのである。奥方の前で琴を引き澄して居る。奥方はよろこんで耳を傾けてうち興じてゐる。やきもちに似た氣持ちで、この私の草履を無斷で履くとは不始末なと、からみ出した。瀧野は事情を云つて、お斷りするひまもなかつたが、そんな心算りではなかつたのであるとその失禮を詫びるが澤野はいつかなきかない。奥方の面前で散々に侮辱して草履で瀧野の面上を打ち、且つ草履が汚れたといつて捨てるのである。

やさしい瀧野は、よくこらへて自分の部屋に歸つたが、口惜しさが胸にこみ上げてくる。何の面目があらうと泣くのである。侍女の山路は一心になつて瀧野をなぐさめた。瀧野はその親切に涙ぐむで帶と小袖を與へた。そうしてその夜中、山路を使に出して矢倉に居る自分の兩親に手紙と箱をとゞけしむる。山路はさていひつけによつて出たものゝ、この夜中わざ〳〵兩親へ使など腑に落ちぬことゝ心配になり出し、日比谷御門迄きたが、それより引き返した。歸つて見ると瀧野は自殺してゐた。手紙は兩親への別れの手紙だつたのである。

山路は瀧野が無念の心中を察して仇を討つことを決心した。そうして熟慮を重ねて、その夜明けると、澤野のもとに赴いた。澤野はおすわといふ女中を又候叱つてゐる所であつたといふ。瀧野只今氣絶したので、靜かに寢かせてありますから、何卒おいで下さいましと、澤野を誘ひ寄せた　深き事情ありとも知らず、澤野は女中お久をつれて、のめのめと病氣見舞に來るのである。澤野が瀧野の部屋にはいつて枕屏風に手をかけんとする時、山路は御主人樣の仇といつて短刀で刺した。時に澤野は六十一歳、瀧野は廿三歳、山路は二十二歳とある。年齡は六十一、廿一、廿四といふのがほんとらしい。芝居では岩藤尾上お初となつてゐる。

澤野は女中をいぢ惡く叱かりとばしてゐたので、內々甚しく評判が惡かつたので、いい氣味

位に取扱はれ、山路の行爲はよろこばれた。その爲に山路は松尾と改名して尙つゞいて勤めてゐた。

山口阿藤

も一つ、女中が女中を刺した話では信州飯田の阿藤といふのがある。これは鏡山のやうに上役が只癪に觸るといふやうな私的なものではなかつた。殿樣の鐘愛に增上して政治向に迄口をいれてお家の不爲となつた女中を、家國のために身を捧げて、切り拂つたのであるから、これぞ正に烈婦の龜鑑であるといふべきである。

お藤の父は山口彈治（後に代出兒と改名）十石二人扶持の御藏番であり、總領は藤三（後に藤左衞門と改む）ともかく山口阿藤の家は輕い身分の家であり、阿藤は孝行者だつた。母が大病となるや幼き身を以て水垢離をとり、その評判で縫模樣の小袖一襲と金十兩を賜つたといはれてゐる。

飯田の殿樣は堀大和守親審（しげ）といつて、その正室は蜂須賀家より來たが、不幸にして子がなかつた。側室が二人あつて、その方には子供があつた。時に豐浦といふ奧女中があつた。彼女は

江戸城大奥の某の局の妹だといふ。豐浦は頗る美人で、和歌書道遊藝一般に通じてゐたので殿の鍾愛著しく、それにつれて增長してきた。豐浦が江戸城大奥の勢力ある局の妹だといふことには確證あるわけではない。餘りにも威張るし、殿様まで憚かる所があつたので、當時の世相から大奥の局の持つてゐた政治的の勢力を考へるとそこに何かありはしないかといふ憶測が出てくるのである。石田氏は「もと佐竹藩足輕の女であるが、妾に出すに當つて、市人を假りに親と名付けたので後その母扶持を賜はり、養子をとらしめて新に豐浦の家を立てしめ、山村と稱し今は飯田にありといはれてゐる。」と書いてゐるが、何れにしても當時女は氏なくして玉の輿に乘るといはれ、隨分いかがはしき身分の者で出世した者が多いから、豐浦のその點の詮義立ては無用であらう。

ともかく豐浦は殿様の恩寵をうけるや、次第に增長して、夫人をも何とも思はず、はては政治向に迄關係し、役人の位の上げ下げに嘴をいれるといふ有様、それでも殿様は豐浦の色香に迷つて反省する所がない、爲に藩政漸く紊れんとした。この江戸の様子が飯田の留守番のものに傳へられるや、騷然として物議をかもし出した。むしろ當然のことであらう。そこで國家老安富主計は藩士をなだめて、獨り江戸に參向した。そうして死を決して豐浦の面前で君を諫め

た。流石は堀公、いさぎよくその言を納れて、豐浦はその場で却けられた。

國家老安富も漸く安堵して飯田に歸つた。お家の爲を思ふ藩士の熱烈なる歡迎はいふ迄もなかつた。然しそれにもかゝはらず、江戸では豐浦は若山と改名して再び秘かに殿中に呼び返へされた。殿様は餘程迷ひ込んでゐたものと見える。こゝが豐浦の身分について兎角の議論も出る所で、大奥の局の妹である爲その局への義理上、又再び召されたのであらうといはれてゐる。何れにしても國家老がわざわざ江戸に迄下つて切諫するといふ大騷ぎがあつたにも拘はらず、約束も忽ち反古にして召し寄せるといふのであるから、豐浦にしてみれば殿様の鼻毛は讀み盡したといふ所である。今はその寵を恃んで我儘增長は前にも增して甚しく、夫人と殿との間を隔てゝ殿様を獨占するに至つた。今や心ある者の痛心事となつた。

當時阿藤はどうだつたか。安井息軒の阿藤傳によると、十二三歳の時侯の愛妾豐浦の部屋子となり豐浦再び入りて名を彦山と稱したる時藤女之を失へりとあるやうに、豐浦とは關係があつたやうである。藤女ははじめ御殿に仕へて居たが年頃になつて館を下がつて一度嫁したとは山口家にも傳へられた事實だが、阿藤傳には載つてゐない。幾程もなく良人身まかつたので、家に歸り再び嫁せず、又御殿へ勤めたやうにいはれてゐる。又一説には豐浦付きではなくて夫

人付きの女中だつた。豐浦との間柄は、彼女から歌や書道を教つてゐたのであるとされてゐる。この邊少し混雜してゐるやうだが、堀家など小身者だつたから奥にあつてもそれ程の人數ではなかつたらうから、色々といはれるやうな事になつたのではないかと思ふ。その實所屬も何も無かつたのかもしれない。何れにしても阿藤は最後にこの若山を刺してゐるから部屋子だの何のといふのとは少しは違ふかもしれない。夫人付の女中とする方が話はうまく纏るやうに思はれる。卽ち阿藤はお家の大事を考へたには相異あるまいが、主としては夫人の身の上に同情してのことではなかつたらうか。その結果若山を亡きものにしなくてはならぬと決斷するに至つたものと思ふ方が女の仇討らしい。

阿藤は決心してから、若山に手本十餘帖と金一封を持參して返却し、師弟の關係を絶つたといはれてゐる、つまり阿藤は若山から歌書を習つてゐたのである。それを今や師弟の緣を切つて自由なる間柄となつて事を決行したのである。卽ち自ら下に白裝束を着、上に着物を重ねて短刀を懷中にして若山の部屋を訪ねた。そうして、內々にて是非申上げたい事がある暫く人拂を願ふとて他の女中を去らしめ、扨て若山の日頃の所行を難じた。若山は目上の者に敢へてする無禮をとがめんとしたが、熱誠面に現はれてゐる阿藤を見ては、いひくろめん術もない。う

まく口を合はしてその場を逃れんとしたのを阿藤はかくし持つたる短刀で肩先に斬りつけて斃した。この時阿藤をとり押へた者は適々用事があつて奥にきた父彈治だつたとも傳へられてゐる。天保十一年九月三日江戸は西丸下御館の出來事であつた。

侯の怒りは想像に難くない。家中の者は禍根を拂ひ得て心中喜ばぬ者は無かつたが、阿藤の罪狀は許されず、國許の飯田へ送られることになつた。夫人は我身のために思つてしてくれた阿藤の心に感謝したのでもあらう。金子五兩は旅費とし、又別に三兩を垂布團の下にいれて死後の葬料とした。

飯田では牢にいれられてゐたが、家中一般の秘かなる祈願にも不拘、遂に死刑にされた。同年十二月二日であつた。

しなのなる山路の雪ともろともに春をも待たで消ゆる今日かな

といふのがその辭世であつた。自分の身を捨てゝかゝつた阿藤の忠烈は當時世間賞讃の的であつた。就中夫人の里である蜂須賀家では德とする所深く、色々と堀公に申入れて阿藤の宥命を願つた。堀公も今や長夜の惡夢も覺めた心持がしたのであらう。阿藤を助ける氣持になつた。その宥命の書面は、然し不幸にも死刑執行の濟んだその日に到着して間に合はなかつた。阿藤

享年廿一歳、一貞院不二妙松信女といひ、長源寺に葬られた。

阿藤もお初と同じく、自分の身を殺してかゝつたので、すべてが人のためであつた所に貴い所があつた。尙阿藤についてはその死際に一挿話がある。彼女はその死刑執行の日不幸にも女の身としていとなみのある日に當つてゐた。彼女は死後汚れた體を見せることを恥ぢて、一時の許を得て身を清めてから刑に就いたといふ。女の身だしなみと心づかひがほめられたが、この話が幾變轉して今では、一種の迷信を呼び、この長源寺の彼女の墓には近在からの藝者や商賣女が手向ける線香の絶ゆる時がないといはれてゐる。しもの病ひがなほるといふのであるそうな。

日本名婦傳 終

昭和十二年一月廿三日印刷
昭和十二年一月廿八日發行

日本名婦傳
〔定價一圓八〇錢〕

著者　龍居松之助

發行者　黑田茂雄
東京市目黑區中目黑二ノ五八二

印刷者　櫻井專吉
東京市牛込區山吹町一九八

發行所　北斗書房
東京市目黑區中目黑二ノ五八二
振替東京七三一一二
電話高輪三〇四五番

御存じですか？

讀賣新聞社婦人部編

美麗ポケット型クロース上製箱入
本文ルビつき索引共三〇〇頁

價九五錢（送料八錢）

最新刊

コンナ便利な本が出來たのを御存知ですか？
コンナ重寶な本が出來たのを御存知ですか？
ドノ一頁を讀んでも一圓の價値はあるのを御存知ですか？
讀めばスグ役に立ち讀まねば損をするのを御存知ですか？

婦人面では日本に新聞始まつて以來、斷然他社をリードしてゐる讀賣新聞社婦人部が、長年同紙へ連載中の「御存じですか？」を、讀者の熱望により、此處に整然と讀みやすく、使ひやすく纏めたのが本書です。

―主要内容―

調理篇
洗濯篇
保存篇
家庭醫學篇
ものしり博士集
内外智識の泉
其他多數

★北斗書房發行★

邪教新論

高津正道著

最新刊・定價一圓・送料一二錢

四六判本文ルビつき　二五〇頁

【内容】○ひとのみち教團を解剖する　○ひとのみち檢擧の眞相　○出口王仁三郎と大本教　○邪宗教と貞操問題　○搾取に耽る天理教　○無産階級より觀たる金光教　○生長の家その他　○波に躍る友松圓諦たち　○友松圓諦の功罪　○眞理運動の反動性等

大衆は溺れてゐる！救ひなき生活に喘ぎ疲れた學句、せめてもの頼みと、不覺にも所謂新らしい宗教に走つた。然るにどうだ！得たり賢しと差のべられた手は、憎むべき邪教の魔の手だつたのだ。彼等は、飽くなき欺瞞と搾取と罪惡の限りを盡して最後の血の一滴までも啜らうとしてゐる。著者憤然、全無産大衆に代つて叩きつけた爆彈こそ、卽ちこれ本書である。（裝幀　加藤悅郎）

北斗書房

東京目黑中目黑二丁目五八二

電話高輪三〇四五番

振替東京七三一一二番

ウエルズの新世界觀

滿洲吉林高等師範學校教授　齋藤茂譯

四六判美麗本
定價八〇錢
（送料六錢）

若き知識階級の諸君に捧ぐ！　新らしき思想戰に備へよ！

科學の洗禮を受けた文學者、絶えず理想への追求をやめぬ旅行者ウエルズが、ソヴィエートを訪れてスターリンと如何に討論の火花を散らしたか？　アメリカの支配者を如何に解剖したか？　彼は云ふ「知識と技術と金融に關係ある知識人のみが新らしい世界國家の建設に參加するサムライ族である」と。

〔主要內容〕
スターリン對ウエルズの一問一答
ルーズヴェルト批判　著者所感

東京・目黑・中目黑二丁目
北斗書房
振替東京七三一一二
電話高輪三〇四五

725
11

47

12年4月28日

閲覧済